新富町文化財調査報告書　第 52 集

隅ヶ迫横穴墓群・南原ベニガラ工房跡
祇園原地下式横穴５号・比良横穴墓群

―民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

２００９･３

宮崎県児湯郡・新富町教育委員会

1　比良横穴墓群上空から

1　比良横穴墓群全景（南側から）

新富町文化財調査報告書　第 52 集

隅ヶ迫横穴墓群・南原ベニガラ工房跡
祇園原地下式横穴５号・比良横穴墓群

―民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

２００９･３

宮崎県児湯郡・新富町教育委員会

序　　文

新富町は太平洋に面し、九州山地から流れる一ツ瀬川が形成した平野を有しています。この平野から台地上には、旧石器時代から連綿と続く埋蔵文化財があります。

新富町では昭和57年に最初の遺跡地図を作成して以降、埋蔵文化財の調査が相次ぎました。今回の報告書では、平成２年度から平成７年度にかけて調査が行われた４遺跡を掲載しております。

隅ヶ迫横穴墓群と比良横穴墓群では合わせて９基の横穴墓の調査を行い、多くの副葬品が出土しました。周辺の台地上には県内では最大級の古墳時代の集落である上薗遺跡が存在します。墓地と集落を考える上で重要な遺跡になりそうです。

南原ベニガラ工房跡では近世のほうろく鍋が多数出土しました。この時期の遺跡が調査されるのは珍しく、ほうろく鍋がどのように流通したのか興味深いところです。

祇園原地下式横穴５号は祇園原古墳群内で発見されました。この付近では古墳時代後期の群集墳が展開しており、地下式横穴墓も群集墳の一角を占めていたことが判明しました。

町ではこれらの資料を、学術研究はもとより広く生涯学習の素材として活用していく考えです。

最後になりましたが、調査に際してお世話になった関係各期間の方々に深く感謝を申し上げます。

平成21年３月

新富町教育委員会
教育長　米　良　郁　子

例　　言

1．本書は平成２年度から平成７年度にかけて行った隅ヶ迫横穴墓群、南原ベニガラ工房跡、祇園原地下式横穴５号、比良横穴墓群の発掘調査報告書である。

2．発掘調査及び報告書作成は、国庫補助を適用して行った。

3．本書で使用した位置図は国土地理院発行の２万５千分の１図を基に作成し、調査範囲図はそれぞれ平板実測にて作成した250分の１測量図を基に作図した。

4．本書で使用する方位は座標北（座標第Ⅱ系）であり、レベルは海抜絶対高である。

5．遺構の土層図と土器等の色調は『新版標準土色帖』に拠った。

6．遺構実測は有田辰巳、島岡武、東憲章　和田理啓、有馬義人がおこなった。

7．遺構・遺物の写真は有田、有馬、樋渡が行った。

8．整理作業は樋渡、杉尾、吉永、甲斐、清で行い。遺物実測及びトレースは樋渡、吉永甲斐が行った。

9．本書の執筆は第１章から第６章および第８章を樋渡が行い、第７章は鹿児島女子短期大学竹中正巳氏、下野真理子氏に執筆を依頼した。

10．本書の編集は樋渡が行った。

11．基準点及び水準点測量は有限会社服部測量に委託した。

12．比良横穴墓群の航空写真撮影は株式会社スカイサーベイに委託した。

13．出土遺物その他の記録はすべて新富町教育委員会生涯学習課に保管してある。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　新富町の位置と概要 …… 1
第２節　報告書作成に至る経緯 …… 1
第３節　調査組織 …… 2

第Ⅱ章　新富町の地理と歴史
第１節　新富町の地質と地形 …… 4
第２節　新富町の歴史 …… 4

第Ⅲ章　隅ヶ迫横穴墓群の調査
第１節　調査に至る経緯 …… 9
第２節　遺跡の位置と環境 …… 10
第３節　調査の概要 …… 10
第４節　遺構と遺物 …… 10
第５節　小結 …… 24

第Ⅳ章　南原ベニガラ工房跡
第１節　調査に至る経緯 …… 33
第２節　遺跡の位置と環境 …… 33
第３節　遺構と遺物 …… 33
第４節　小結 …… 34

第Ⅴ章　祇園原地下式横穴５号の調査
第１節　調査に至る経緯 …… 39
第２節　遺跡の位置と環境 …… 39
第３節　調査の概要 …… 41
第４節　遺構と遺物 …… 43
第５節　小結 …… 44

第Ⅵ章　比良横穴墓群の調査
第１節　調査に至る経緯 …… 47
第２節　遺跡の位置と環境 …… 47
第３節　調査の概要 …… 48
第４節　遺構と遺物 …… 48
第５節　小結 …… 62

第Ⅶ章　分析
第１節　宮崎県新富町比良横穴２号墓出土の古墳時代人骨 …… 70

第Ⅷ章　考察とまとめ
第１節　横穴墓の築造時期について …… 81

第２節　横穴墓の立地について ……82
第３節　地下式横穴墓について ……82
第４節　まとめ ……82

挿図目次

図版１　今回掲載された遺跡位置図 …… 3
図版２　隅ヶ迫横穴墓群とその周辺遺跡 …… 9
図版３　隅ヶ迫１号横穴墓実測図 ……11
図版４　隅ヶ迫１号横穴墓出土遺物① ……12
図版５　隅ヶ迫１号横穴墓出土遺物② ……13
図版６　隅ヶ迫１号横穴墓出土遺物③ ……14
図版７　隅ヶ迫２号横穴墓実測図 ……16
図版８　隅ヶ迫３号横穴墓実測図 ……17
図版９　隅ヶ迫２・３・４号横穴墓出土遺物 ……18
図版10　隅ヶ迫４号横穴墓実測図 ……19
図版11　隅ヶ迫５号横穴墓実測図 ……20
図版12　隅ヶ迫６号横穴墓実測図 ……21
図版13　隅ヶ迫５号横穴墓出土遺物① ……22
図版14　隅ヶ迫５・６号横穴墓出土遺物 ……23
図版15　南原ベニガラ工房跡と周辺遺跡 ……33
図版16　南原ベニガラ工房跡出土遺物 ……34
図版17　祇園原古墳群古墳分布図 ……40
図版18　祇園原地下式横穴５号位置図 ……41
図版19　祇園原地下式横穴５号実測図 ……42
図版20　祇園原地下式横穴５号出土遺物 ……43
図版21　比良横穴墓群位置図と遺構配置図 ……47
図版22　比良１号横穴墓と出土遺物 ……49
図版23　比良１号横穴墓出土遺物② ……50
図版24　比良２号横穴墓実測図 ……53
図版25　比良２号横穴墓と人骨 ……54
図版26　比良２号横穴墓出土遺物① ……55
図版27　比良２号横穴墓出土遺物② ……56
図版28　比良２号横穴墓出土遺物③ ……57
図版29　比良２号横穴墓遺物出土状況 ……58
図版30　比良２号横穴墓墓道出土遺物 ……59
図版31　比良３号横穴墓実測図 ……60
図版32　比良３号横穴墓出土遺物 ……61

表　目　次

表１　隅ヶ迫横穴墓群土器観察表 ……25
表２　隅ヶ迫横穴墓群鉄器計測表 ……29
表３　隅ヶ迫横穴墓群耳環計測表 ……29

表４　南原ベニガラ工房跡土器観察表 ……35
表５　祇園原地下式横穴５号土器観察表 ……44
表６　比良横穴墓群土器観察表 ……63
表７　比良横穴墓群鉄器観察表 ……67
表８　比良横穴墓群耳環計測表 ……67
表９　頭蓋骨計測値（㎜）……73
表10　鎖骨計測値（㎜）および示数 ……73
表11　上腕骨計測値（㎜）および示数 ……73
表12　橈骨計測値（㎜）および示数 ……73
表13　大腿骨計測値（㎜）および示数 ……74
表14　脛骨計測値（㎜）および示数 ……74
表15　腓骨計測値（㎜）および示数 ……75

写真図版目次

巻頭図版１　１．比良横穴墓上空から
巻頭図版２　１．比良横穴墓群全景（南側から）
図版１　１．隅ヶ迫２号横穴墓閉塞状況
　　２．隅ヶ迫１号横穴墓羨道部土層断面
　　３．隅ヶ迫１号横穴墓閉塞状況
図版２　１．隅ヶ迫横穴墓群調査状況①
　　２．隅ヶ迫横穴墓群調査状況②
　　３．隅ヶ迫横穴墓群調査前
図版３　１．隅ヶ迫横穴墓群西側から
　　２．隅ヶ迫１号横穴墓検出
　　３．隅ヶ迫１号横穴墓真上から
図版４　１．隅ヶ迫横穴墓群出土遺物①
図版５　１．隅ヶ迫横穴墓群出土遺物②
図版６　１．隅ヶ迫横穴墓群出土遺物③
図版７　１．隅ヶ迫横穴墓群出土遺物④
図版８　１．隅ヶ迫横穴墓群出土遺物⑤
図版９　１．隅ヶ迫横穴墓群出土遺物⑥
図版10　１．隅ヶ迫横穴墓群出土遺物⑦
図版11　１．南原ベニガラ工房跡全景
　　２．２号土抗①
　　３．２号土抗②
図版12　１．２号土抗③
　　２．２号土抗④
　　３．２号土抗⑤
図版13　１．２号土抗⑥
　　２．１号土抗と２号土抗
　　３．１号土抗調査状況
図版14　１．南原ベニガラ工房跡出土遺物
図版15　１．祇園原地下式横穴５号竪抗検出状況

図版16　１．祇園原地下式横穴５号出土遺物
図版17　１．比良横穴墓群南側から
　　２．１号横穴墓検出状況
　　３．１号横穴墓作業状況
図版18　１．１号横穴墓奥壁調整痕
　　２．１号横穴墓奥壁ないし左側壁調整痕
　　３．１号横穴墓側壁刺突痕
図版19　１．１号横穴墓完掘状況
　　２．２号横穴墓土層堆積状況
　　１．２号横穴墓閉塞状況
図版20　１．２号横穴墓（西側から）
　　２．２号横穴墓（正面から）
　　３．２号横穴墓玄室内状況
図版21　１．２号横穴墓左奥壁側遺物出土状況①
　　２．２号横穴墓左奥壁側遺物出土状況②
　　３．２号横穴墓右奥壁側遺物出土状況
図版22　１．２号横穴玄室内遺物出土状況（人骨取上げ後）
　　２．２号横穴墓須恵器出土状況①
　　３．２号横穴墓須恵器出土状況②
図版23　１．２号横穴墓奥壁・側壁調整痕
　　２．３号横穴墓検出状況
　　３．３号横穴墓閉塞状況
図版24　１．３号横穴墓作業状況
　　２．３号横穴墓ベッド状遺構
　　３．３号横穴墓完掘状況
図版25　１．比良１号横穴墓出土遺物
図版26　１．比良２号横穴墓出土遺物①
図版27　１．比良２号横穴墓出土遺物②
図版28　１．比良２号横穴墓出土遺物③
図版29　１．比良２号横穴墓出土遺物④
図版30　１．比良２号横穴墓墓道出土遺物
図版31　１．比良３号横穴墓出土遺物

第Ⅰ章　はじめに

第１節　新富町の位置と概要

新富町は宮崎県中央部の日向灘に位置し、県庁所在地である宮崎市から約20㎞北にある。町の北西部から南東部にかけては一ツ瀬川が蛇行しつつ東進し、その流域左岸部の沖積平野と標高70～90ｍの台地面にかけて町域を有する。町域は南北約７㎞、東西約９㎞、面積61k㎡で人口約18,500人の田園都市である。隣接する市町村には西に西都市、北に高鍋町、南に宮崎市がある。主幹産業は酪農や園芸などの農業で、町中央部には航空自衛隊新田原基地があることから「やさいと基地のまち」というイメージが強い。

第２節　報告書作成にいたる経緯

新富町では昭和50年代以降、各種開発行為に伴う埋蔵文化財の発掘調査が相次いだ。

とくに平成以降になると個人農地改良や民間開発に伴う調査が増加した。町教育委員会では、その度に開発者側と調整し発掘調査を行った。そして調査年度内に概要報告書を作成したが、日程及び予算上の都合から本報告書の作成には至らなかった。しかし、埋蔵文化財は発掘調査終了後速やかに本報告書を作成する必要がある。このため県文化財課や文化庁と協議を行い平成19年度から21年度の３ヵ年間にかけて、未刊行報告書作成事業として国庫補助を適用して調査を行った遺跡の本報告書を作成することになった。

未刊行報告書作成事業は今年度で２ヵ年目にあたる。今回は平成２年度から平成７年度にかけて調査を行った隅ヶ迫横穴墓群、南原ベニガラ工房跡、祇園原地下式横穴５号、比良横穴墓群の報告書を作成することになった。

第３節　調査体制

各遺跡毎の調査体制は以下のとおりである。

【隅ヶ迫横穴墓群】平成２年度

総　　括	小田　幸一	（新富町教育委員会　教育長）
	新名　正担	（同　　社会教育課　課長）
事務担当	斉藤　久明	（同　　社会教育課　係長）
調査・調整	有田　辰巳	（同　　社会教育課　主事）
	東　　憲章	（宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係　主事）
調査協力	島岡　　武	（川南町教育委員会）
調査指導	本田　光子	（福岡市埋蔵文化財センター）

【南原ベニガラ工房跡】平成２年度

総　　括	小田　幸一	（新富町教育委員会　教育長）
	新名　正担	（同　　社会教育課　課長）
事務担当	斉藤　久明	（同　　社会教育課　係長）
調査・調整	有田　辰巳	（同　　社会教育課　主事）
調査指導	岡本　武憲	（日南市教育委員会）

【祇園原地下式横穴５号】平成５年度

総　　括　清　　郁雄（新富町教育委員会　教育長）
富田　　博（同　　社会教育課　課長）
河野　正勝（同　　社会教育課　課長補佐）
斉藤　久明（同　　社会教育課　係長）
庶　　務　長友裕美子（同　　社会教育課　主任）
調査・調整　有田　辰巳（同　　社会教育課　主事）

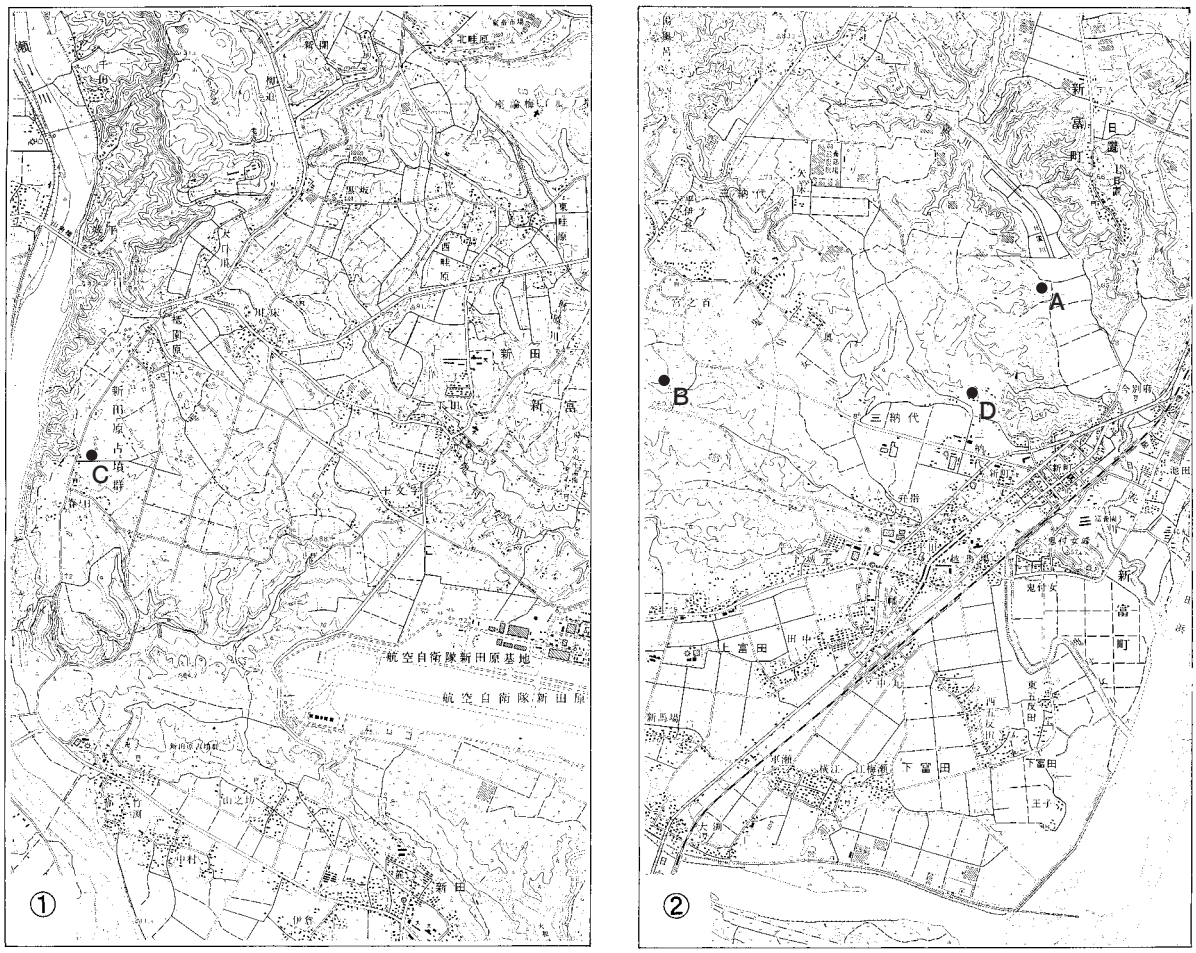
【比良横穴墓群】平成７年度

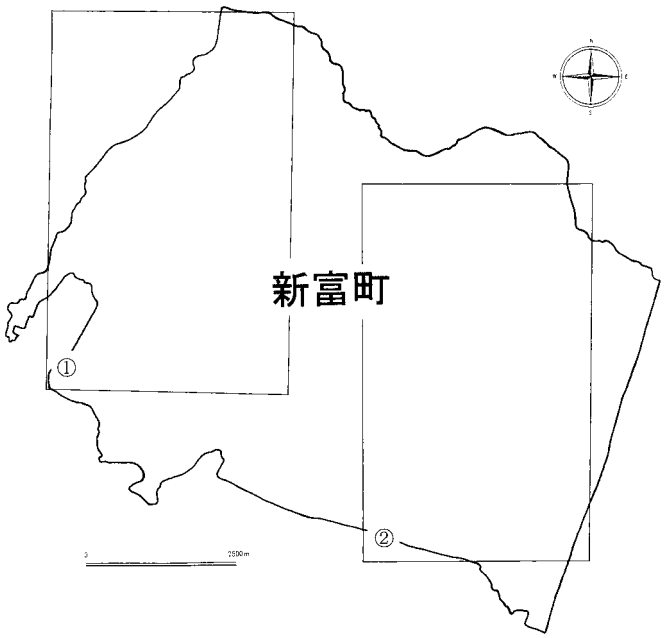
総　　括　清　　郁雄（新富町教育委員会　教育長）
水間　　亮（同　　社会教育課　課長）
高正　静夫（同　　社会教育課　課長補佐）
調査・調整　有馬　義人（同　　社会教育課　主事　文化財担当）
調 査 指 導　小片　丘彦（鹿児島大学教授）
竹中　正巳（鹿児島大学助手）
田中　良之（九州大学教授）
金　　宰賢　大森　　円（九州大学大学院生）
作　業　員　荒木　早苗　荒木　春美　野尻　富子　杉尾美千子

【報告書作成】平成20年度

総　　括　米良　郁子（新富町教育委員会　教育長）
後藤　博己（同　　生涯学習課　課長）
金丸　雅弘（同　　生涯学習課　課長補佐兼　社会体育係長）
調査・庶務　樋渡将太郎（同　　生涯学習課　主任主事　埋蔵文化財担当）
調 整 補 助　有馬　義人（同　　生涯学習課　係　　長　文化財担当）
作　業　員　杉尾美千子　吉永　和美　清　美貴子　甲斐　直美

※平成19年度に社会教育課から生涯学習課へと名称が変更した。





A　隅ヶ迫横穴墓群
B　南原ベニガラ工房跡
C　祇園原地下式横穴５号
D　比良横穴墓群

図版１　今回掲載された遺跡位置図

第Ⅱ章　新富町の地理と歴史

第１節　新富町の地質と地形

新富町は宮崎平野部の中央よりの沿岸部に位置する。宮崎平野の台地は高度の異なる複数の段丘面から構成されている。本町では北部に洪積台地が拡がり、それぞれ北から茶臼原面（標高約100～120m）、三財原面（標高約80～90m）、新田原面（標高約70m）で構成される。また、鬼付女川や日置川などの小河川が洪積台地の間を流れ、河岸段丘や谷底平野を形成し、南部は九州山地を水源とする一ツ瀬川によって形成された沖積地が拡がる。東部の海岸地帯は、３～４列の砂丘帯とそれに狭まる低所からなる。

第２節　新富町の歴史

（１）旧石器時代

新富町の旧石器時代の調査は1970年代の大野寅夫氏の精力的な表採作業から始まった。1980年代以降になると瀬戸口遺跡や銀代ヶ迫遺跡、溜水第２遺跡で発掘調査によって旧石器時代の存在が明らかとなり細石刃や細石核、ナイフ型石器などが出土している。

2000年代になると東九州自動車道建設に伴う発掘調査が行われるようになり遺跡数が急増する。とくにＡＴ下位層からの遺物の出土が相次ぎ、本町の人類の歴史が３万年以上前に遡ることが明らかとなった。遺跡の範囲は町内の洪積台地上のほぼ全面に拡がっている。

（２）縄文時代

縄文時代は発掘調査された遺跡数だけでも40以上に及ぶ。早期と後期、晩期の遺跡が多く、草創期や前期から中期にかけての遺跡は少ない。

【草創期】瀬戸口遺跡で隆起線文土器が出土している。また、東畦原第１遺跡では、石鏃が細石刃などとともに出土している。

【早期】遺跡の数も規模も大きくなる。瀬戸口遺跡をはじめ大規模な集石遺構を伴う場合が多い。向原第１遺跡では炉穴も確認できる。ただし住居址は１軒も確認されていない。遺跡の立地は洪積台地上に多いが、竹淵Ｃ遺跡は標高約11mの河岸段丘上に位置している。出土する土器は貝殻円筒系や押型文土器多く、後半の塞ノ神式や平栫式系の土器はほとんど確認できない。

【前期】遺跡数は激減する。本町では上日置城空堀跡や藤山第２遺跡で轟式の範疇に入ると思われる土器片が出土しているにすぎない。

【中期】現段階では確認できる遺跡はない。

【後期】祇園原遺跡や春日遺跡で竪穴住居址や土器溜りが確認され、長期的な生活の痕跡が伺える。出土する土器は後半期の三万田式以降が中心である。

【晩期】遺跡数は多いが、前半期は皆無で後半の黒川式から刻目突帯文期が多い。蔵薗第２遺跡では当該期に相当する住居址が検出されている。県内でも貴重な事例であるといえる。

（３）弥生時代

【前期】県内を含めて数が少なく、本町も例外ではない。数少ない資料ではあるが、今別府第２遺跡板付Ⅱ式に相当する壷が採集されている。

【中期】鐙遺跡では２基の竪穴住居址とＶ字溝が確認された。Ｖ字溝は大半が消滅しており、調査できたのは10m程に過ぎないため、全体像は判然としないが、環濠と呼べるものではないらしい。住居址からは下城式系の甕型土器などが出土しており、中期でも前半期に該当する。同じような時期の土器は越田遺跡でも出土しているが、鐙遺跡とは日置川を挟んだ北側に位置し、ともに丘陵性台地上に立地する点で共通している。

中期後半以降になると遺跡数は増加する。新田原遺跡、祇園原遺跡、春日遺跡、向原第１遺跡、鬼付女西遺跡、西畦原第１遺跡、八幡上第２遺跡で集落が確認できる。このうち新田原遺跡や八幡上第２遺跡では「花弁状間仕切り住居」と呼ばれる南九州独特の住居址が検出されている。

【後期】後期の遺跡数も多く、中期後半から継続して集落が形成されている場合もある。また、川床遺跡では周溝墓を含む木棺墓や土抗墓など195基が検出され鉄鏃や剣、素環頭太刀など多くの鉄製品が副葬されていた。時期は後期後半から古墳時代前期に相当すると思われ、隣接する祇園原古墳群とともに墓制の推移を検討する上でも重要な遺跡である。

（４）古墳時代

一ツ瀬川流域から小丸川にかけては、県内でも最大の古墳密集地で、本町も国指定史跡「新田原古墳群」や県指定史跡「富田村古墳」がある。また、横穴墓や地下式横穴といった多様な墓制が混在する地域であり集落遺跡も多い。

【前期】多くの古墳が存在しながら、内容が判明しているものは少ない。それでも各種開発行為に伴う調査や史跡整備、史跡確認に伴う調査によって地道な資料の積み重ねが行われている。

町の区画整理に伴い調査された下屋敷１号墳では勾玉、管玉、ガラス玉、複合口縁壷が出土した。複合口縁壷から前方後円墳集成編年２期に相当すると考えられる。墳形は前方後円形を呈しているが、盛土はほとんどなく、墳端も明瞭ではない。内部主体は木棺直葬と考えられる。このほか山ノ坊30号は、楕円形を呈する後円部平面形と幅狭で低平な前方部といった特徴から前期でも早い時期に比定される可能性がある。また、弁指古墳や塚原３号が墳形などから前期後半から中期初等に比定される可能性がある。集落は八幡上第２遺跡や向原第１遺跡で確認されているが規模は小さい。

【中期】祇園原古墳群で本格的な古墳の築造が開始される。墳長84mの大久保塚古墳は、西都市の女狭穂塚古墳に近似する墳形と埴輪をもっている。鐙古墳では２条鉢巻き状の葺石が巡り、木棺直葬と考えられる内部主体からは、鉄鏃や蛇行剣が出土している。その鐙古墳のすぐ北の丘陵に位置する三納代古墳群太郎兵衛迫支群では、狭い丘陵上に径10～14m前後の円墳が一定間隔をもって築かれていることが判明した。初期群集墳の形成が始まっていた可能性がある。

集落の形成は上薗遺跡で始まっている。上薗遺跡はこの後も中世まで継続して集落が形成され竪穴住居址だけでも300軒以上にのぼる。また、春日遺跡の南部でも中期中～後半にかけての住居址がこれまで15軒確認されている。周辺地形を考慮すると数十から100軒前後の集落が短期間の間に営まれていた可能性が高い。

【後期】祇園原古墳群で墳長70～90m級の前方後円墳と、50m前後の前方後円墳がほぼ同時期に築造されるようになり、宮崎市の下北方古墳群とともに県内最大規模の首長墓系列として評価される。特筆すべきは史跡整備に伴い平成10年度から平成16年度まで調査を行

った百足塚古墳であろう。百足塚古墳は２段築成の前方後円墳で、盾形の周溝と周堤をもつ。埋葬主体は横穴式石室で後円部西側の中腹で入口が確認された。県内最古の横穴式石室である可能性が高い。西側の周堤周辺からは大量の形象埴輪が出土した。出土した形象埴輪の種類には、家、柵、太鼓、大刀、鳥、動物、人物などがあり総数約60個体に及ぶ。さらに墳丘テラスや墳頂平坦面には円筒埴輪や盾形埴輪が確認されている。これらの形象埴輪群は大王墓を除けば西日本最大級といえる。

石船古墳群は前方後円墳３基（うち１基は円墳の可能性がある）、方墳１基で構成されていたが、昭和14年に陸軍の飛行場建設に伴い破壊されることになり、宮崎県から委託を受けた京都大学の梅原末治らが調査を行っている。出土須恵器などからＴＫ43型式併行期から隼上りⅡ～Ⅲ型式併行期にかけて築造された首長墓系列と推定される。

後期群集墳も盛んに築造されている。祇園原遺跡では、平成４年以降ほ場整備や農道整備に伴う調査が行われ、周溝部だけが残存した墳丘消滅墳の検出が相次いだ。現時点で47基にも及ぶ。蔵薗第１遺跡でも昭和62年の調査で、消滅円墳や方墳が確認された。築造時期はＭＴ15型式併行期を端緒に、隼上りⅠ型式併行期まで継続している。

この時期には地下式横穴や横穴墓も築造される。地下式横穴は祇園原遺跡、春日遺跡、蔵薗第１・第２遺跡内で確認され、いずれも群集墳内にある。円墳の周溝内に竪坑を掘削し、墳丘側ないし墳丘外方に墓室を向ける寄生型が多い。横穴墓は台地に深く刻まれた「迫」と呼ばれる所に多く、現在のところ隅ヶ迫、比良、祇園原、銀代ヶ迫、宮ヶ平で確認できる。築造時期は出土した須恵器からＴＫ43型式併行期から隼上りⅢ型式までと推定され、後期群集墳のなかの一墓制として評価できる。

集落は先に挙げた上薗遺跡で集落の形成が続いている。このほか竹淵Ｃ遺跡で、古墳時代中期から終末期にかけての竪穴住居址が22軒確認されている。

（５）古代から中世

上薗遺跡は、14世紀頃まで継続した集落で、墨書土器が出土している。

竹淵Ｃ遺跡では、古代～中世にかけての住居址が多数検出され、越州窯系青磁、緑釉陶器さらには県内では珍しい風字硯などが出土している。

祇園原遺跡でも、２軒の竪穴住居跡と多数の土抗が検出され、うち１基からは須恵質の蔵骨器が出土している。蔵骨器はこのほか越馬場遺跡内で13世紀代と思われる常滑焼が出土している。また、平成19年度に調査された栗別府遺跡では蔵骨器埋納土抗と銅製経筒埋納土抗が並列して検出された。蔵骨器は中国製の四耳壷で12世紀後半から13世紀にかけての所産である可能性が高い。

町内には多数の山城も存在する。一ツ瀬川を南にひかえた新田原台地南側の縁辺部や新田原台地から東に派生した舌状丘陵部に多く、このうち上城は伊東48累の一つ「富田城」である可能性が高い。

（６）近世

遺跡数は少ない。南原ベニガラ工房跡では、ベニガラ焼成土抗と炭窯状遺構、褐鉄鉱の残滓置場が確認され、ほうろく鍋片や薩摩焼系の小瓶などが出土している。

茶碗窯跡でも４基の窯跡が現存し、甕片などが散在している。

第Ⅲ章　隅ヶ迫横穴墓群の調査

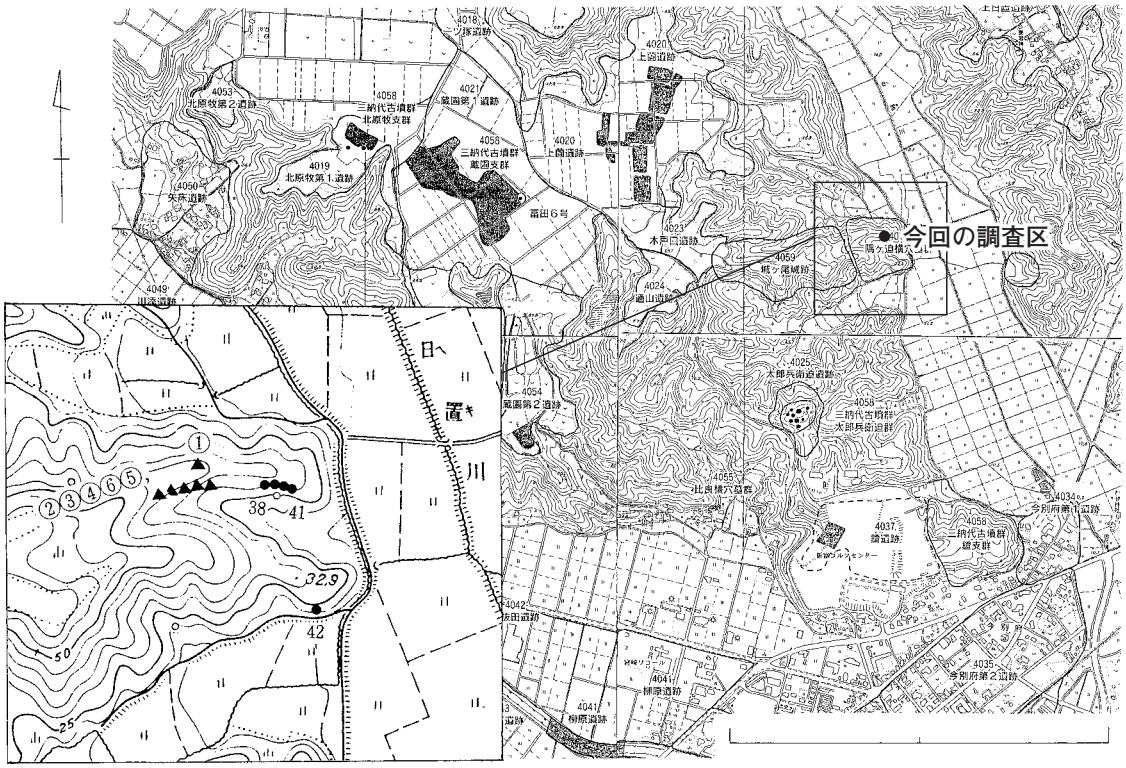
第Ⅲ章　隅ヶ迫横穴墓群の調査

第１節　調査に至る経緯

平成２年９月６日、新富町大字日置字隅ヶ迫の土砂採取工事中に、土器等の遺物の発見が町教育委員会にもたらされた。早速現地を確認すると、１基の横穴墓（１号横穴墓）が露出した状態で確認された。現場作業員から事情を聴取したところ、工事の目的は所有者の依頼による埋め立て用土砂採取と整地であること、この他に破壊された横穴墓はなかったことが判明した。これにあわせて町教育委員会では、土地所有者に確認するとともに、現地周辺には県指定史跡富田村古墳38～41号横穴墓が存在することから、県教育委員会に報告した。そして地権者、工事責任者、県教育委員会、町教育委員会の４者で協議を行った。その結果、今後新たに未確認の横穴墓が存在することが予想されるため確認調査を行うことになった。

現場は既に１基の横穴（１号横穴墓）が北向きに露出し、玄室内は工事による流入土によって覆われていた。このため土砂採取を一時中断していただくとともに、周辺に他の横穴墓がないか現地踏査を行い、新たに南向きに開口した５基の横穴墓を発見した。この結果をうけて町教育委員会では地権者および工事責任者と再度協議を行い、工事対象区域となった約10,000㎡のうち横穴墓が存在する約1,500㎡を全面調査することになった。また、県指定横穴墓38～41号墳が存在する箇所については全面保存することで、地権者側と合意を得た。

調査は町教育委員会が主体となり、調査指導・支援として県文化課より東憲章主事、川南町教育委員会より島岡武氏の派遣を受け調査を行った。調査は平成２年９月21日から11



図版２　隅ヶ迫横穴墓群とその周辺遺跡

月28日までの行われた。

第２節　遺跡の位置と環境

隅ヶ迫横穴墓群は南の鬼付女川、北の日置川に挟まれた洪積台地、通称北原牧台地から東に派生した丘陵に位置する。この北原牧台地上には古墳時代中期から中世にかけて300軒以上の住居跡が確認された上薗遺跡をはじめ、後期群集墳でもある三納代古墳群蔵薗支群や北原牧支群、地下式横穴１基を検出した蔵薗第２遺跡さらに、台地南側に派生した丘陵には比良横穴墓群が存在し古墳時代中期から後期にかけての遺跡が多い。またこの他にも100基近くの縄文時代早期の集石を検出した東牧遺跡や中世山城と考えられる城ヶ尾遺跡が存在する。

第３節　調査の概要

調査対象となった横穴墓のうち、１号墓と２号墓は土砂採取の際に重機によって一部削り取られた状態であった。また２号墓、３号墓そして５号墓は既に内部が乱されていた。盗掘の可能性が高い。調査に先だって周辺の伐採を行い環境整備に努め、周辺地形の地形測量を行った。その後各横穴墓の個別実測と遺物の取り上げを行い、作業を終了した。

なお、調査終了後土砂採取は中断中である。

第４節　遺構と遺物

（１）１号横穴墓

①　遺構

丘陵の最高位に位置し、唯一北向きに開口している。工事の際重機によって天井の一部が掘削され、土砂の一部が玄室内に流れ込んでいたが、未盗掘で副葬状態が特定できる良好な横穴墓である。

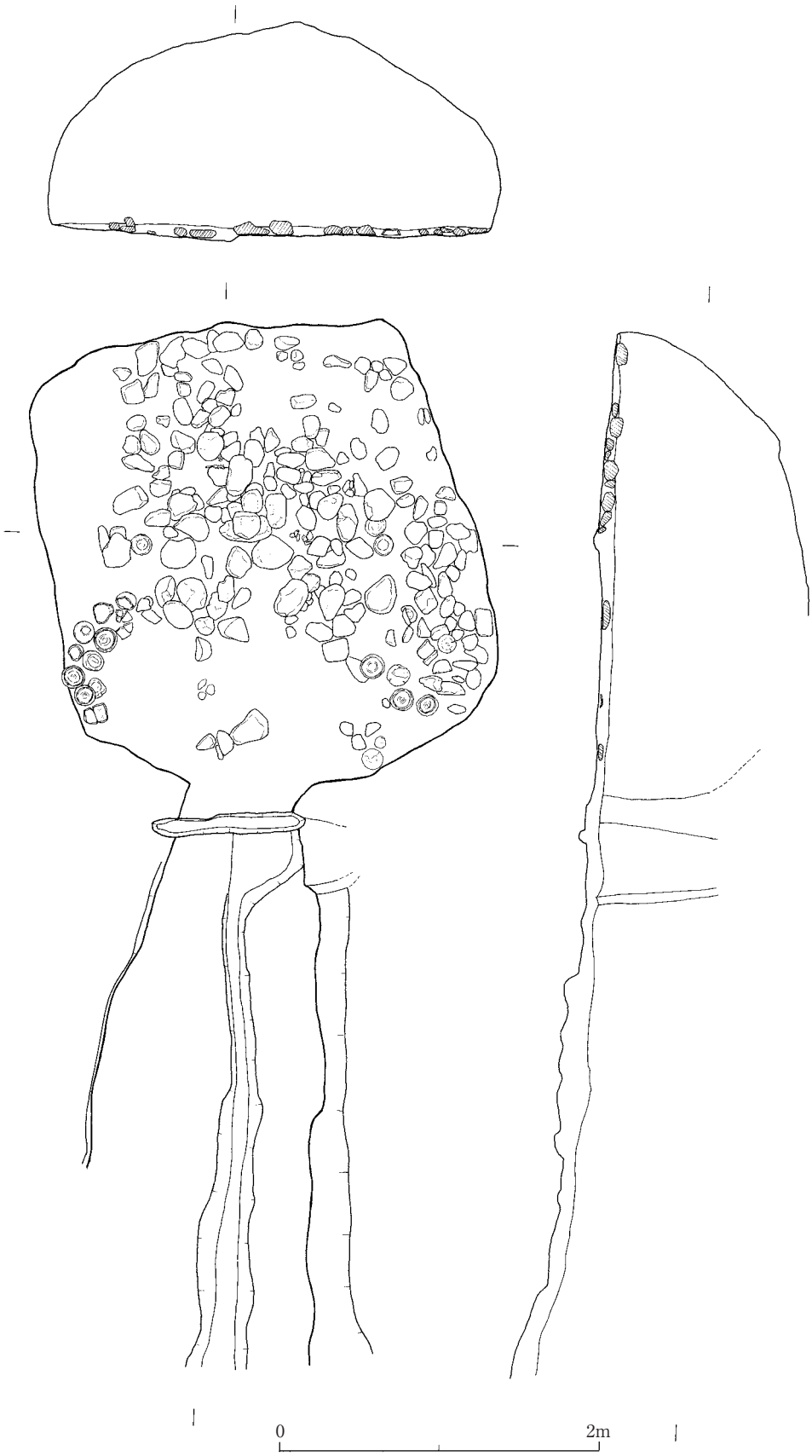
玄室は羨道の主軸より西側に屈折し、片袖に近い。玄室規模は奥行2.8m、幅2.6mの隅丸長方形を呈する。床面積は６㎡。礫を玄室内に持ち込んで礫床を施している。天井は一部崩落しているが、屋根型に近いドーム天井で高さ1.2mを計る。羨門には板閉塞の痕跡と思われる掘り込みが残る。排水溝は玄室内では確認できず羨門から前庭部に向かって延びている。羨道と前庭部との境はあまりはっきりしない。

②　遺物

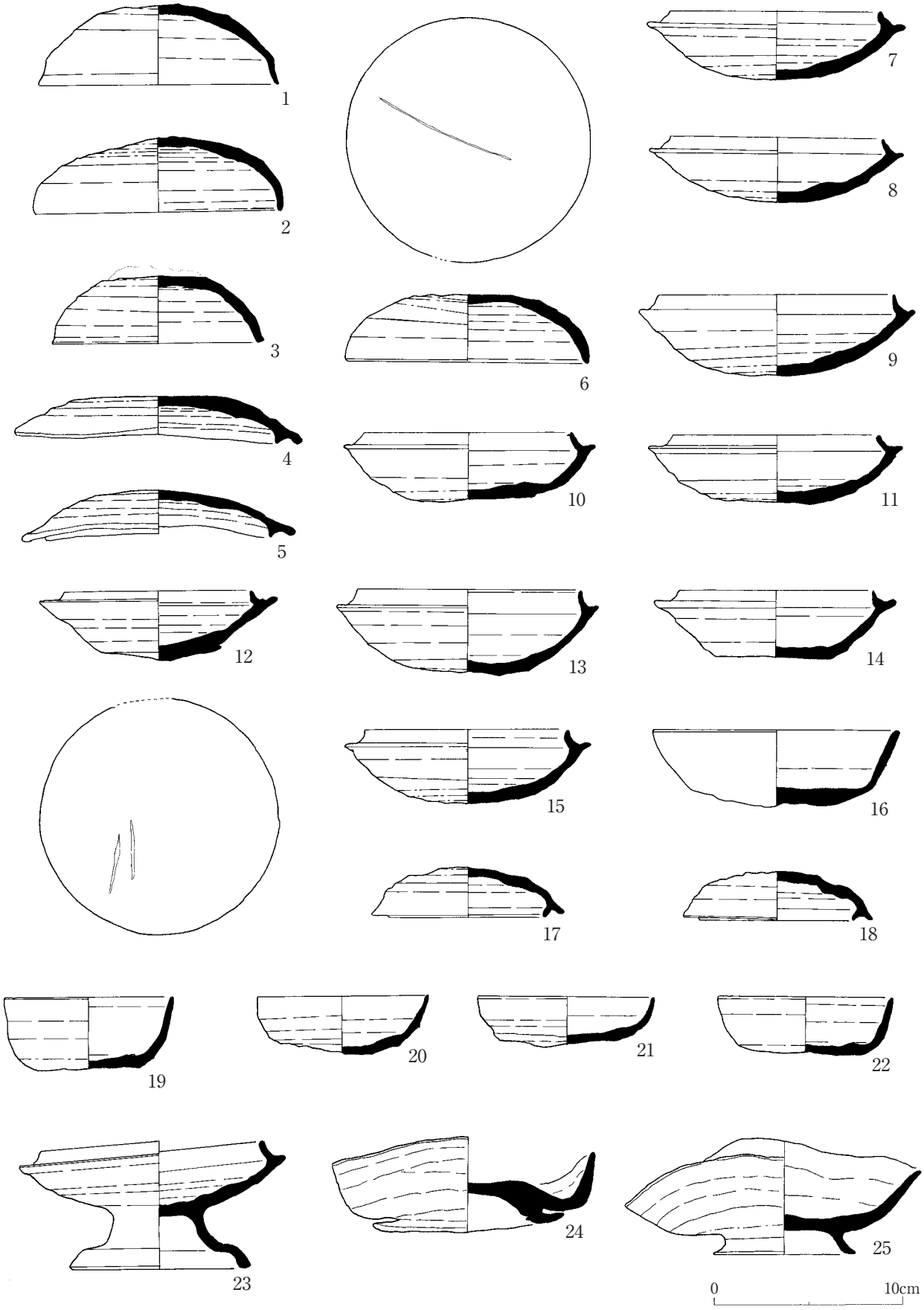
工事に伴う土砂が玄室内に流れ込んでいたが、遺物はほとんど原位置をとどめている。

須恵器28点、土師器10点、鉄鏃２点、刀子２点、金環２点を図化した。

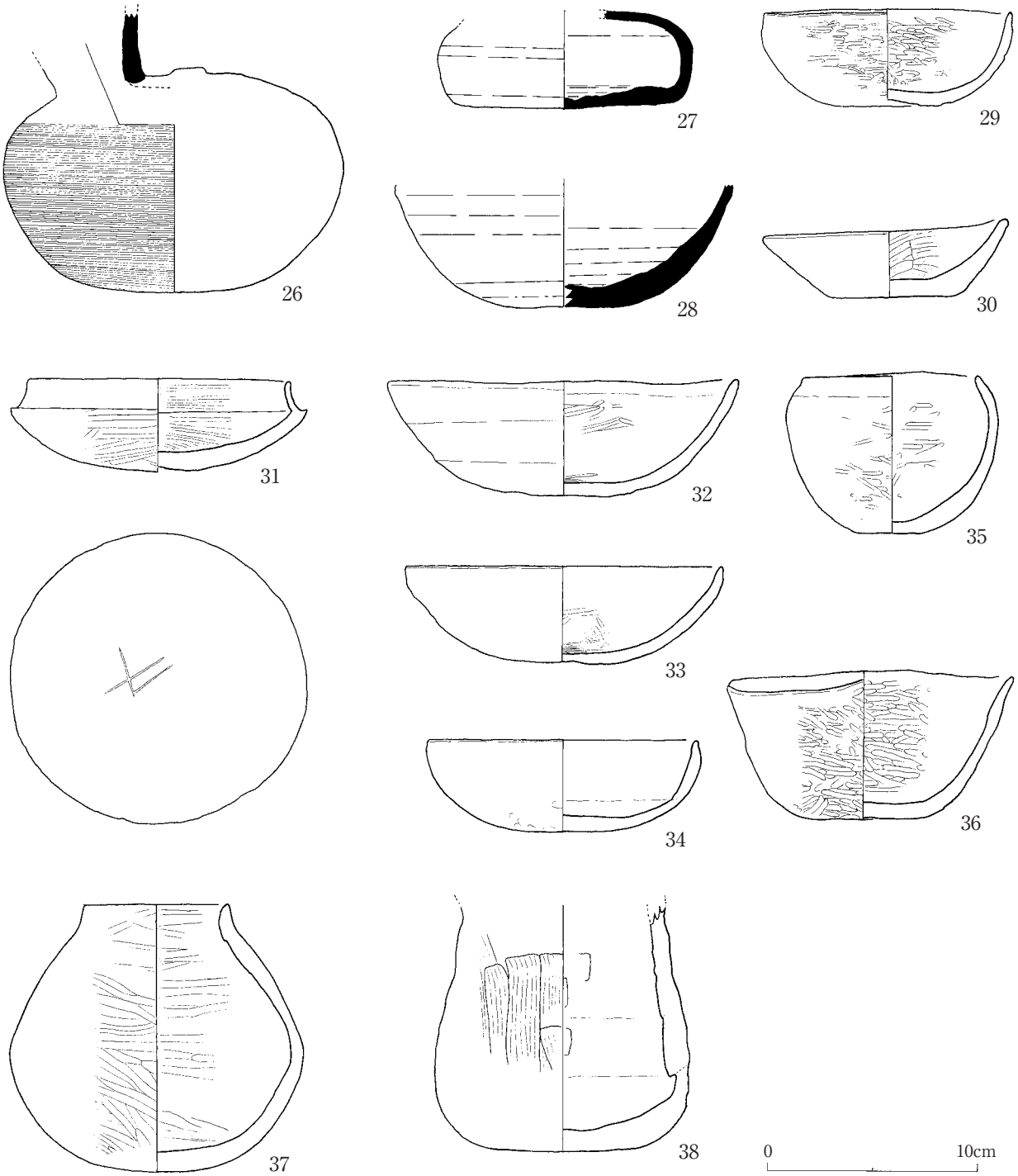
１～６は須恵器の坏蓋である。底部切り離し後の回転ヘラケズリは、いずれも全体の１／４程度である。１は口径12.8㎝で体部から口縁部の境で屈曲し外傾しながら開く。２は口径13㎝で、口縁部先端は丸く作られる。３は口径11.1㎝、口縁部先端は平たく作れられる。４と５は焼きひずみにより形状が変化している。蓋として掲載したがひずみにより器高が低くなったことも考えられ、もともとは身だった可能性もある。６は口径12.9㎝。口縁部は丸くつくられ、外面にはヘラ記号が施される。７～16は須恵器の坏身である。底部回転切り離し後の回転ヘラケズリは全体の１／３～１／４程度である。７は口径11.3㎝。口縁部は強く内傾する。８は口径11.4㎝で口縁部は強く内傾する。９は口径12.5㎝。口縁



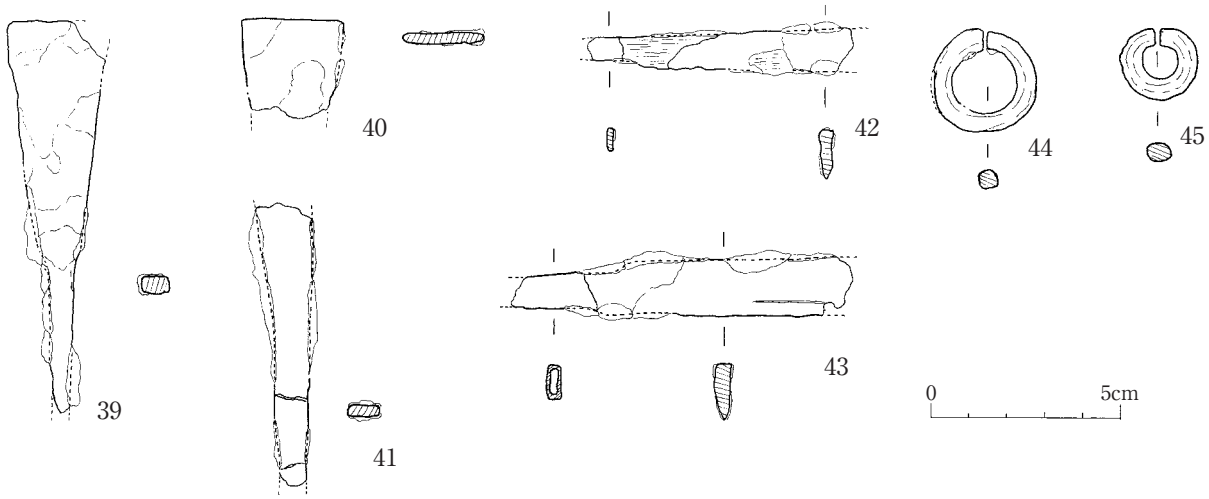
図版 3　隅ヶ迫 1 号横穴墓実測図



図版 4　隅ヶ迫 1 号横穴墓出土遺物①



図版５　隅ヶ迫１号横穴墓出土遺物②



図版６　隅ヶ迫１号横穴墓出土遺物③

部は内傾したのち角度を変えて口縁部にいたる。10は口径11.1㎝、口縁部は内傾し先端は丸くつくられている。11は口径13㎝で口縁部は強く内傾し先端は丸く作られている。12は口径9.9㎝。切り離し後の回転ヘラケズリは行っていない。口縁部は短く内傾しながら立ち上がる。13は口径11.9㎝。全体的に器壁が薄くつくられている。口縁はやや内傾し途中で角度を変えて垂直気味に立ち上がる。16は口径13㎝。摩滅が激しく調整は不明瞭だが、底部の回転ヘラケズリは行っていない可能性が高い。17と18は須恵器の蓋として掲載したが坏身の可能性がある。器形の矮小化が進んでおり、口径はいずれも８㎝程度である。18は天井部の回転ヘラケズリが省略されている。19～22は須恵器の受部が消失した身である。19以外は回転ヘラケズリが省略されている。口縁部はやや外傾しながら立ち上がる。23は須恵器の高坏である。口径は11.8㎝、口縁部先端は丸くつくれられている。24と25は須恵器の高台付坏身である。焼きひずみが激しいが底部は外開きになっている。26は平瓶である。口縁部は欠損し体部にはカキ目が施される。27は小型の平瓶か。頸部から口縁部を欠損している。

28は須恵器の鉢の底部か。わずかに回転ヘラケズリが施される。29と30は土師器の坏である。29は底部がやや上げ底気味で、胴部は丸みをおびながら口縁にいたる。全体に荒いミガキが施される。30は平底の底部で胴部から外傾し直線的に立ち上がる。内面にはヘラ状工具と思われる横方向のナデが施される。31は須恵器の坏身を模倣した土師器坏で口径12.4㎝、口縁部はやや内湾そして内傾しながら立ち上がり先端を丸く作っている。底部には木の葉痕が残る。32～33は土師器の坏で32は口縁部が外傾しながら立ち上がりそのまま先端へと至る。33と34は口縁部先端で角度を変えて垂直気味に立ち上がる。36は土師器の鉢で底部は平底を呈す。口縁部は外傾しながら立ち上がる。37は土師器の壺で口縁部は短くわずかに内傾する。斜め方向のヘラミガキが施される。39と40は方頭形の鉄鏃でサビぶくれが激しく全体の形状は判然としない。41も鉄鏃で鏃身先端が欠損している。42は43は刀子でいずれも先端や茎部が欠損している。42には有機質の痕跡がわずかに残る。44と45は耳環である。いずれも銅芯で44は金箔張りか銀箔張りかどうか不明。45は金箔張りであ

る。

（２） ２号横穴墓

①　遺構

１号横穴墓の東側で検出された。南向きに開口しており、１号横穴と同様に天井の一部が重機によって掘削されていた。玄室は奥壁に向かって広がる卵形で奥行3.7m、幅1.4～2.8mで床面積は6.7㎡である。また玄室内に少量の礫が持ち込まれており、礫床が施されていたようだ。天井は高さ1.4mのドーム型を呈する。玄室中央付近に排水溝を設け、前庭部まで延びている。羨道長は0.75mと短く、閉塞には人頭大の礫を使用しれている

②　遺物

46は須恵器の坏身で推定口径は11㎝、口縁部は内傾しながら立ち上がり先端は丸く作られる。47は須恵器坏身の口縁部片でやや内傾しながら立ち上がり先端を鋭くおさめる。48は須恵器坏蓋の口縁部片で先端を鋭くおさめる。49は方頭形鉄鏃で残存状態は良好である。鏃身に逆三角形の孔があり、茎部には有機質の痕跡が残る。50～53は円柱状の土製品で52と53は一部欠損している。長さは６㎝前後で幅は1.7～2.2㎝、厚さ１～1.8㎝である。両端には径５㎜ほどの貫通孔が施されている。人骨は歯を２点検出しているにすぎない。

（３） ３号横穴墓

①　遺構

２号横穴墓の東側で南向きに開口して検出された。玄室は奥行4.6m、幅2.5～３ｍの長方形プランを呈し、床面積は12㎡である。天井は高さ２ｍの寄棟型で今回検出された横穴墓の中では最も高い。玄室内に礫が少量残されているが、動かされており盗掘された可能性が高い。玄室の壁に沿って排水溝が施され羨門から前庭部に向かって延びている。閉塞には礫を使用している。

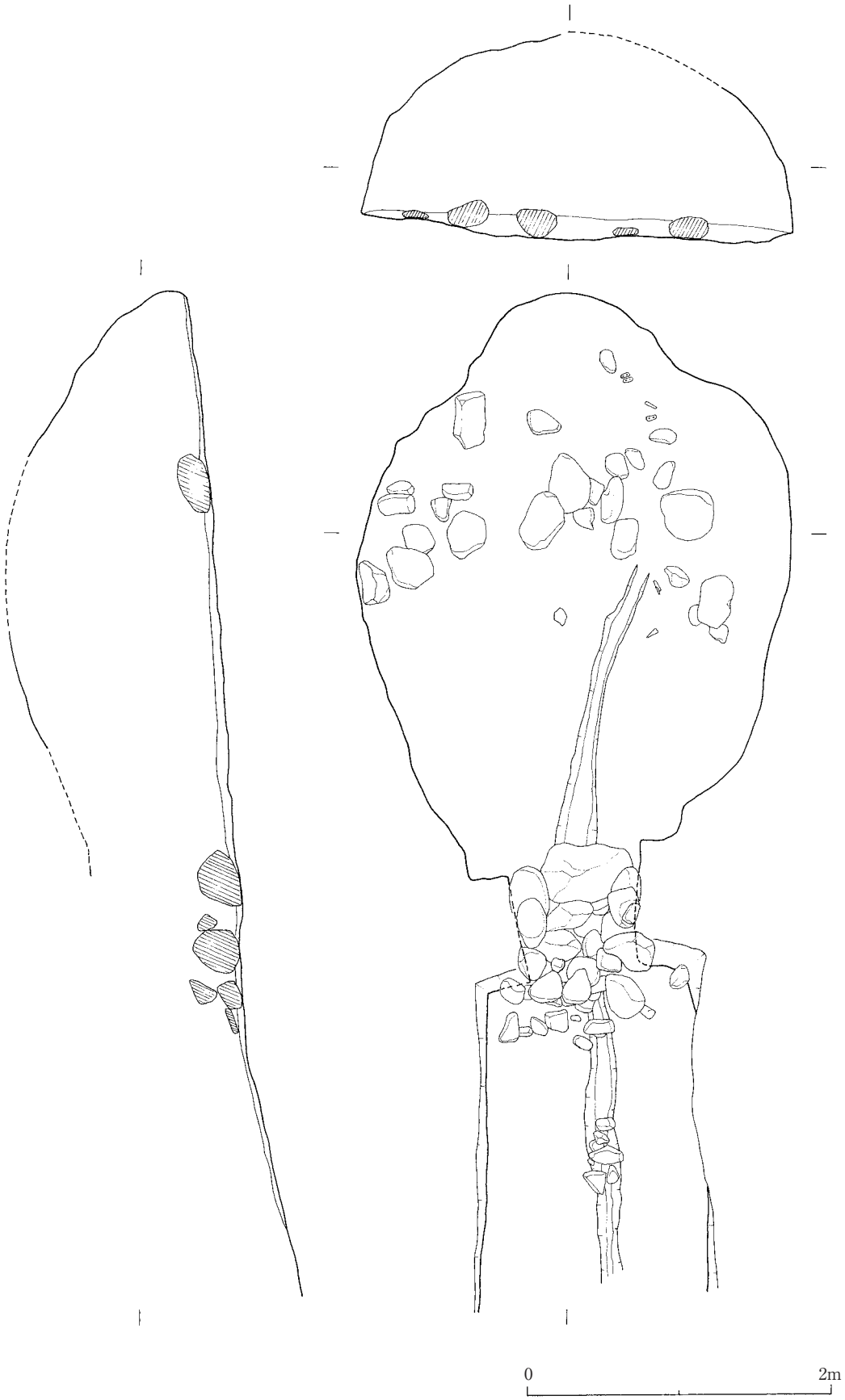
②　遺物

54と55は須恵器の坏身である。54は口径12.3㎝で回転ヘラケズリは全体の１／４程度。口縁部はわずかに内傾しながら立ち上がる。55は口径11.6㎝、回転ヘラケズリは全体の1／４程度で口縁部はわずかに内傾しながら立ち上がる。56は須恵器の高坏で焼成は著しく不良で表面の摩滅も激しい。脚部はハの字状に開き、口縁部は欠損している。57は坏身として掲載したが蓋の可能性もある。推定口径は13.7㎝である。

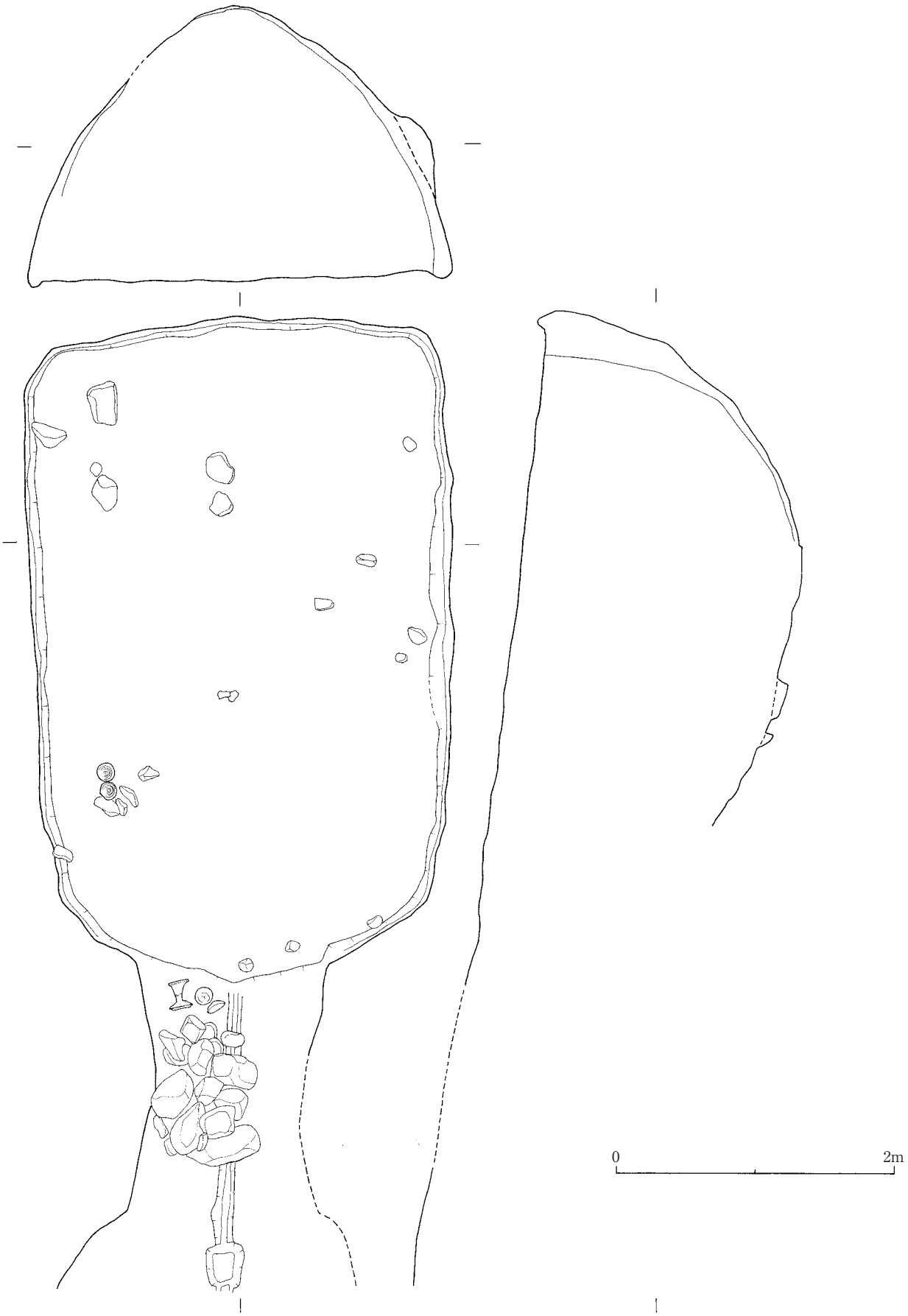
（４） ４号横穴墓

①　遺構

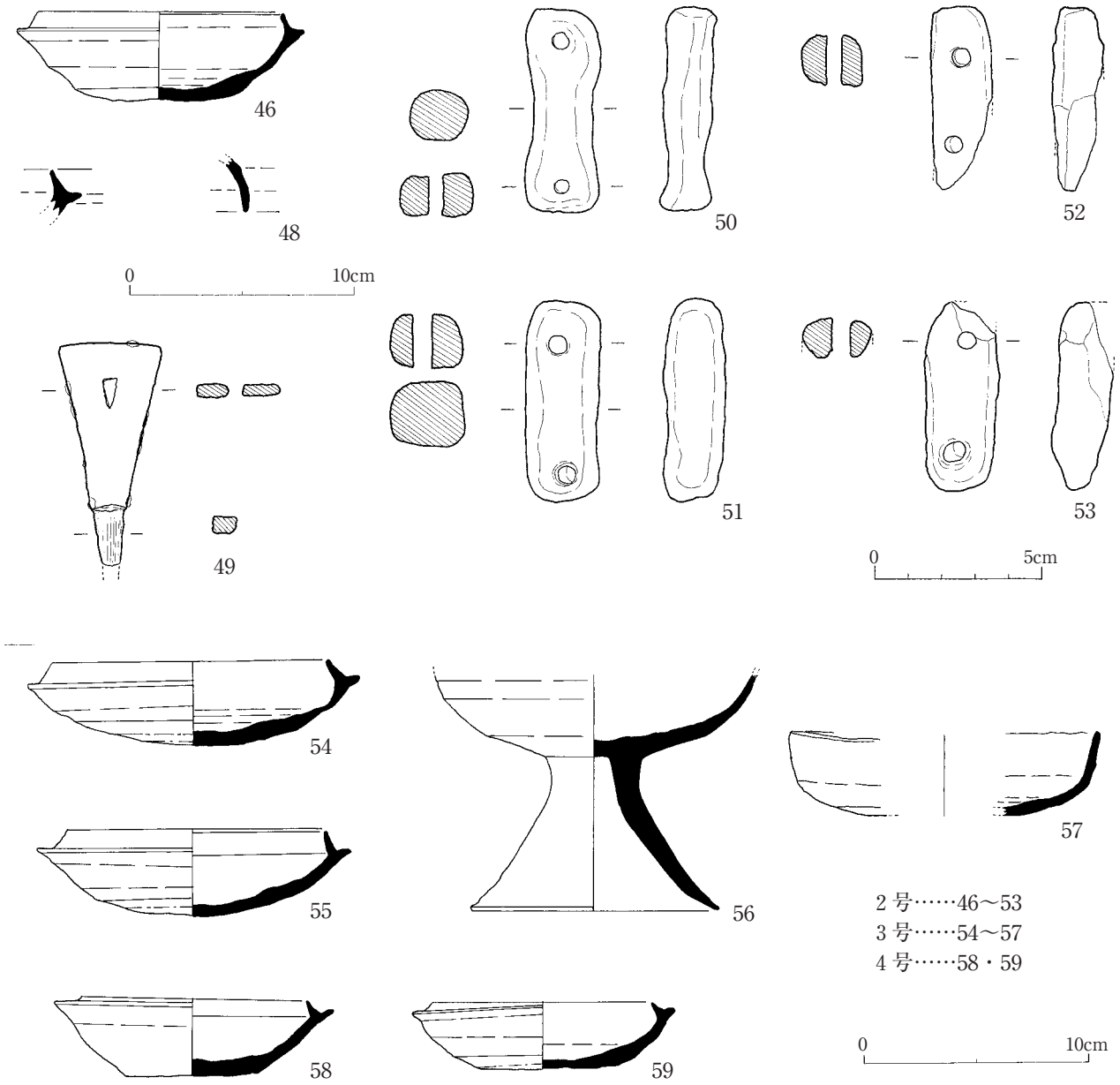
３号の西側で南向きに開口して検出された。玄室は奥行1.6m、幅1.9mの隅丸方形プランを呈する。床面積は2.8㎡で今回検出されたなかでは最小である。天井は高さ0.7ｍの平天井である。玄室内には人頭大の礫が持ち込まれており、礫床を形成したと思われるが原位置から動いており、盗掘の可能性が高い。排水溝は設けていない。羨道長は0.85ｍで、玄室高と羨道高がほぼ同じ高さであり築造の簡略化が伺える。閉塞には人頭大より大きな礫を使用している。



図版 7　隅ヶ迫 2 号横穴墓実測図



図版 8　隅ヶ迫 3 号横穴墓実測図



図版９　隅ヶ迫２・３・４号横穴墓出土遺物

②　遺物

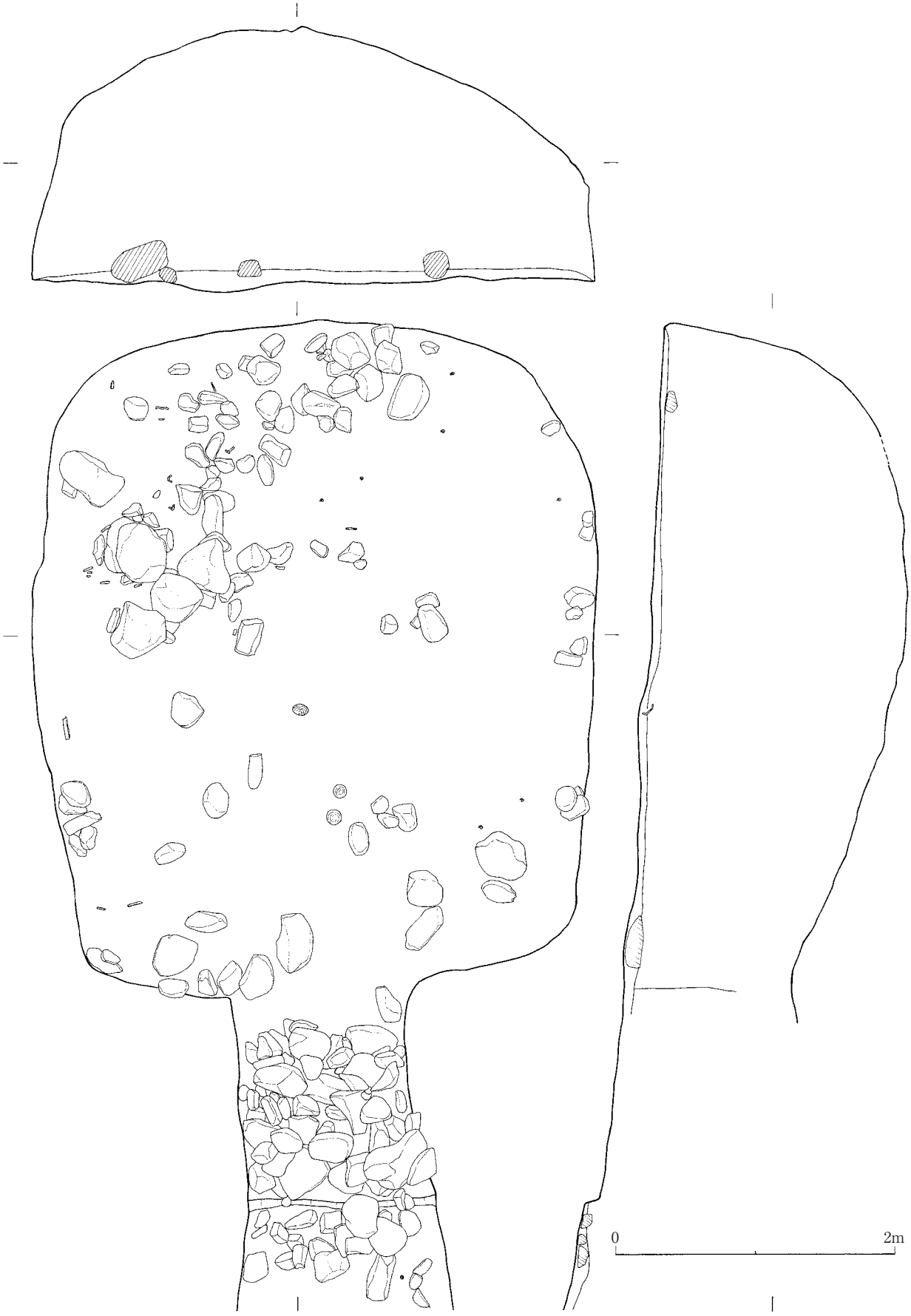
58と59は須恵器の坏身である。58は口径10㎝、底部は平底で回転ヘラケズリは省略されている。口縁部は短く内傾する。59は口径9.8㎝、回転ヘラケズリの範囲は全体の１／５程度で、口縁部は短く強く内傾する。

（５）５号

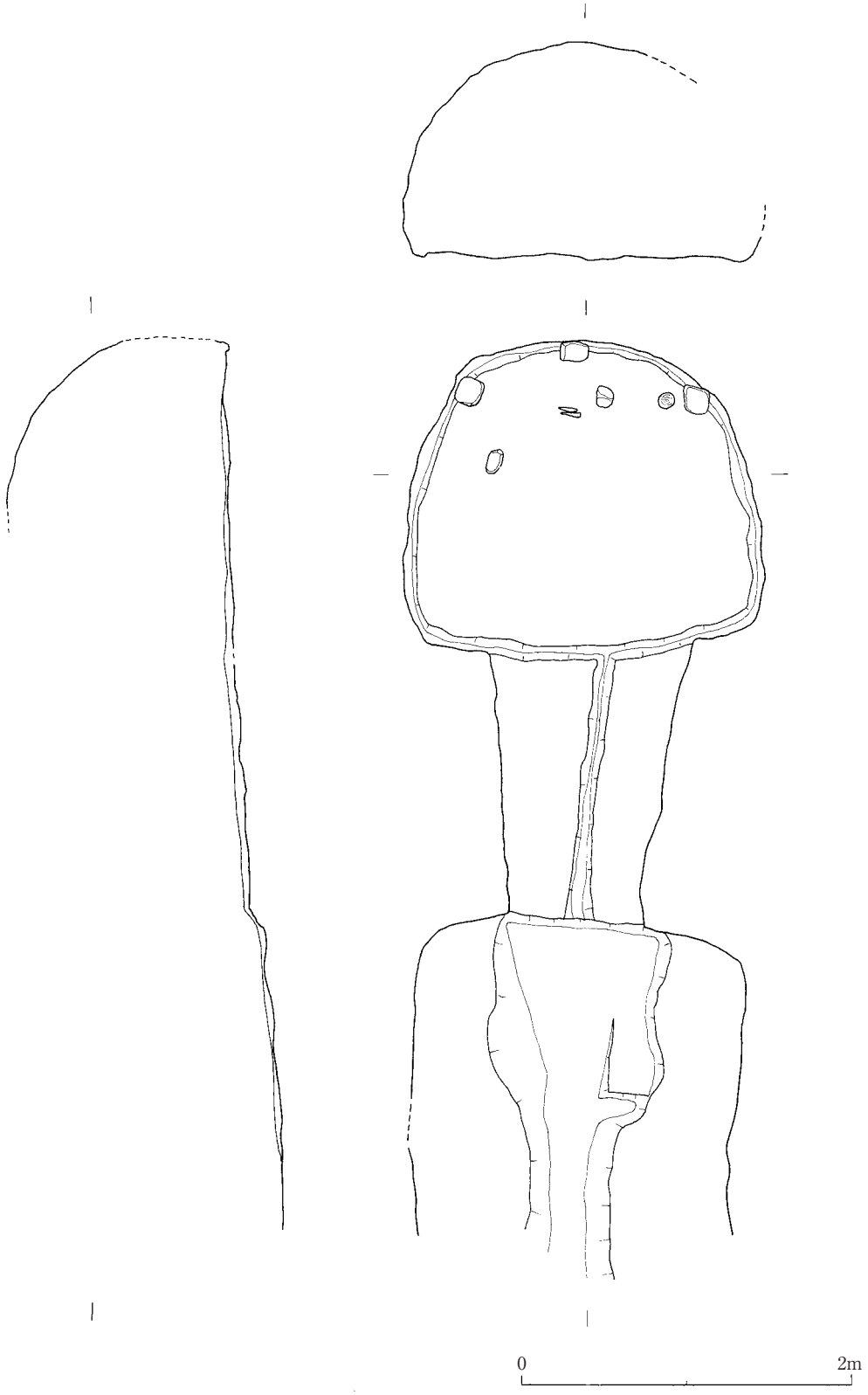
①　遺構

今回の調査区の最も東側で南向きに開口して検出された。玄室は奥行4.8、幅３～４ｍの隅丸長方形プランを呈する。床面積は17.5㎡で今回検出されたなかでは最大規模をほこる。天井は高さ1.8ｍのアーチ型である。玄室内部には礫床に使用した礫が散在しているが原位置から動いている。盗掘された可能性が高い。閉塞には礫が使用されている。

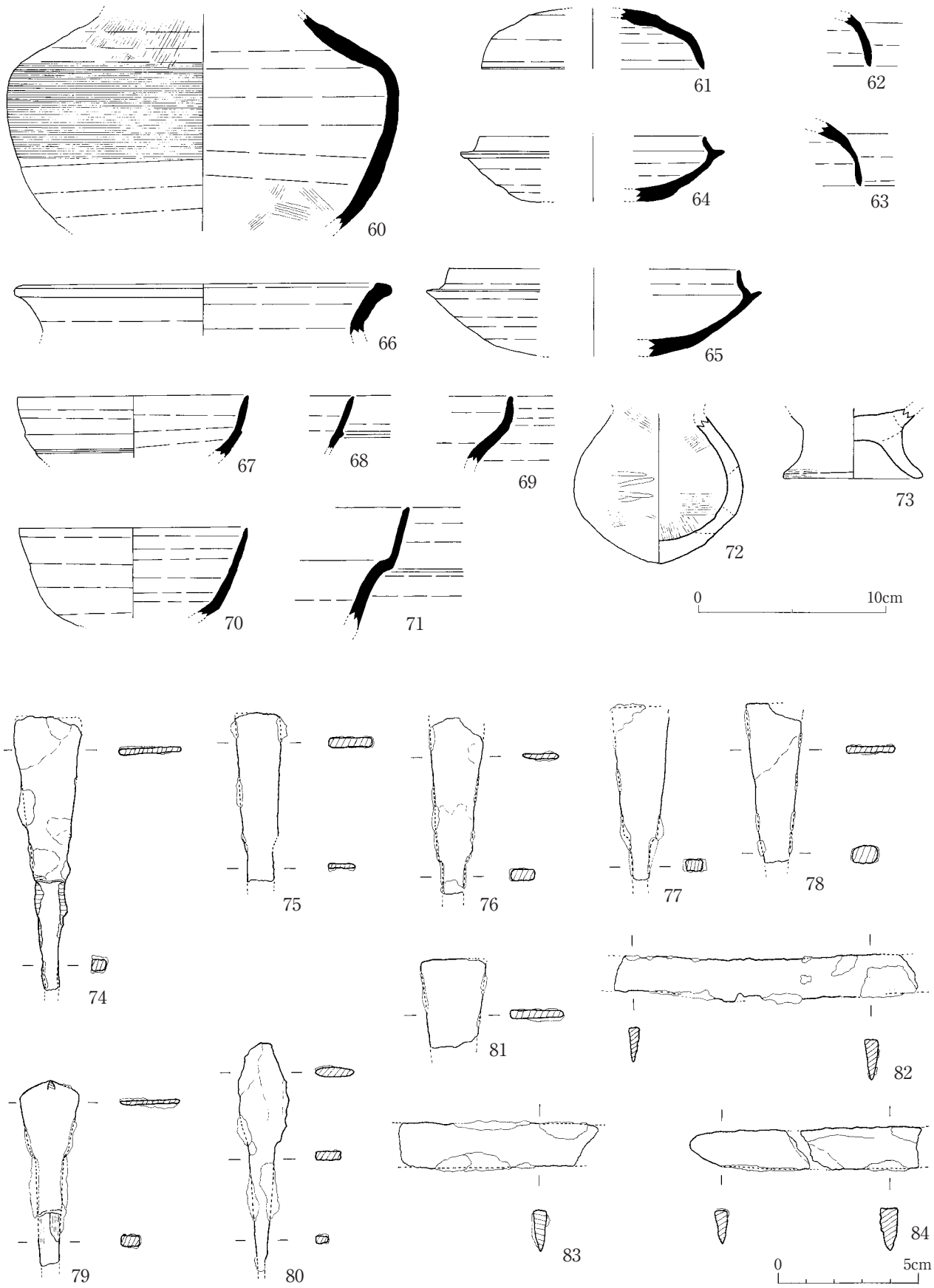
図版10　隅ヶ迫４号横穴墓実測図



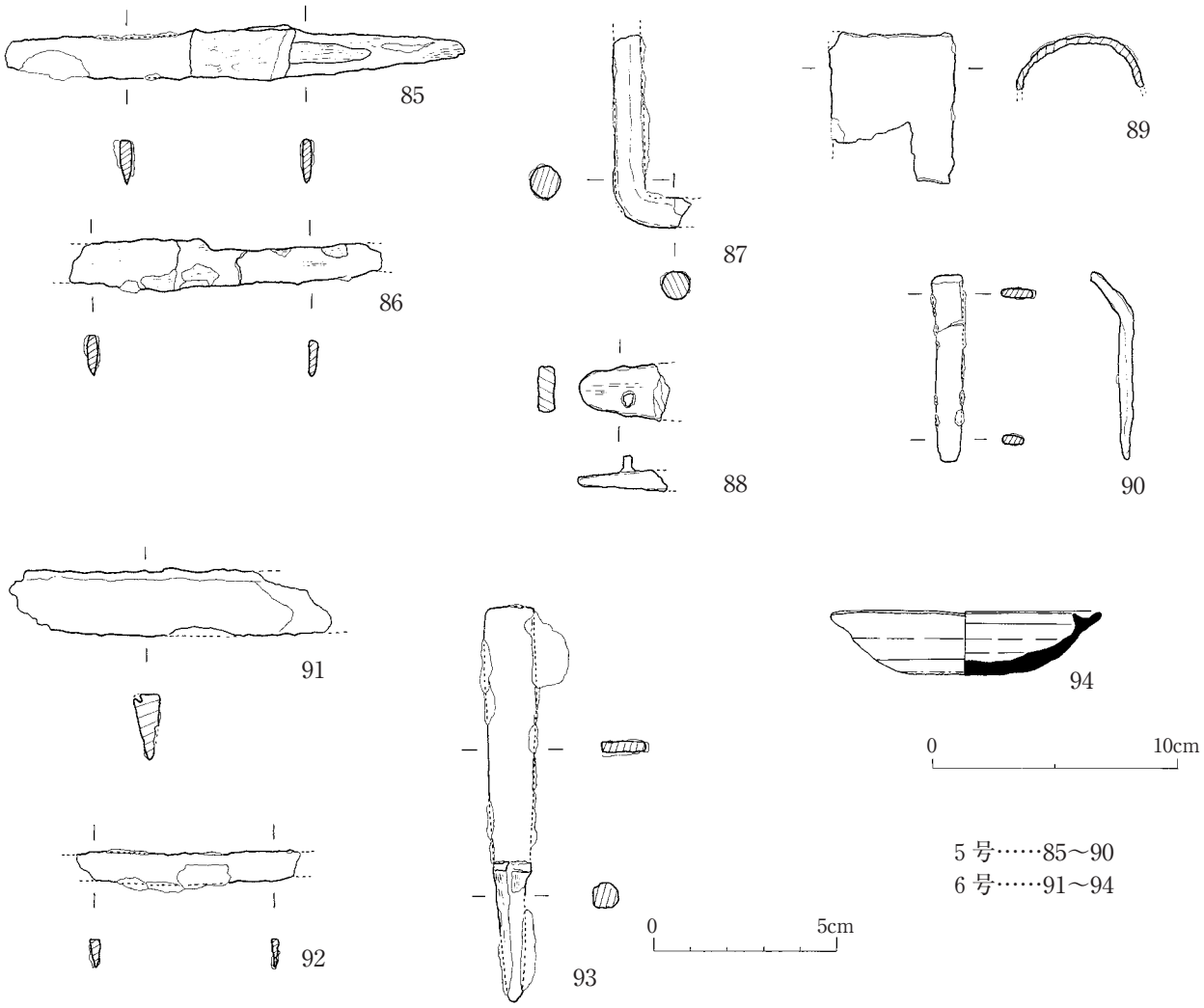
図版11　隅ヶ迫５号横穴墓実測図



図版12　隅ヶ迫６号横穴墓実測図



図版13　隅ヶ迫５号横穴墓出土遺物①



図版14　隅ヶ迫５・６号横穴墓出土遺物

②　遺物

須恵器、土師器、鉄器が出土したが完形品はなく破砕されていた。60は須恵器の長胴壺の胴部片で肩部が張る。胴部中央部にはカキ目を施し、下部には回転ヘラケズリを施す。61～63は須恵器の坏蓋である。61は推定口径11.8㎝、回転ヘラケズリの範囲は全体の１／４程度である。天井部と体部との境が屈曲することによって境を明瞭にしている。62と63はいずれも口縁部の小片。64と65は須恵器の坏身である。64は推定口径12.1㎝、底部が欠損している。65は推定口径15.5㎝、やはり底部は欠損している。口縁部は内傾し途中で角度を変えて垂直気味に立ち上がる。66は須恵器の甕の口縁部片で推定口径18.5㎝、口縁部は外傾しながら立ち上がり端部は平たく作る。67と70は須恵器の高坏の口縁部片である。67は推定口径12.3㎝。体部と口縁部との境に段を設ける。69と71はハソウの口縁部片で、69は口縁部と頸部との境が不明瞭、71は口縁部と頸部との境が屈曲する。72は土師器の小

型壺で口縁部は欠損している。底部は丸底で胴部は丸みを帯びている。内外面ともやや粗いミガキ、一部にナデ調整を施す。73は土師器の高坏の脚部片。坏部は欠損している。摩滅激しく調整は不明瞭。74～81は鉄鏃である。74～78は方頭形の鉄鏃で74以外は茎部を失っている。錆が激しく全体の形状は判然としないが、鏃身長は５～６㎝と推測される。79は圭頭形の鉄鏃で茎部も一部残存し有機質の痕跡が残る。装着時に巻いた樹皮の可能性が高い。80は細身の柳葉形の鉄鏃である。82～86は刀子である。錆と欠損が激しい。84は先端の一部が残存している。85と86は茎部の一部が残存している。

（６） ６号横穴墓

①　遺構

６号墓は４号と５号の間で検出された。玄室は入口側が広い隅丸の台形を呈し、奥行1.9m、幅1.6～2.2mを計る。玄室内には少量だが奥側に礫が持ち込まれている。周囲には壁際に沿って排水溝が掘削され、そのまま羨道の中央部から前庭部へと至る。天井は高さ1.3mのドーム型である。羨道長は1.8mで、玄室長に比べて羨道長が長いのが特徴である。閉塞部付近には礫が残っておらず、板閉塞の痕跡も残っていない。

②　遺物

91と92は刀子で90は小型品である。錆と欠損が激しく全体の形状は判然としない。93は方頭形の鉄鏃で錆が進んでいるがほぼ完形である。全長10.9㎝、鏃身長７㎝、幅1.4㎝と細身で茎部には有機質が残る。94は須恵器の坏身で口径9.9㎝、底部の一部に回転ヘラケズリが施される。口縁部は短く内傾して立ち上がる。

第５節　小結

今回の調査では６基の横穴墓の調査を行った。位置図が作成されていないため群構成の詳細を明らかにすることはできないが、唯一北向きに開口した１号墓以外は南向きで築造されている。１号墓については１基のみの単位群で以後新たな造墓がなされなかったようだ。２号から６号については１つの単位群として構成されていたか複数の単位群として構成されていたか判然としないが、玄室規模が大きく比較的精美な造りである３号墓と５号墓を端緒として２つの単位群で構成されていた可能性もある。出土須恵器から考えられる築造時期については５号墓が須恵邑編年のTK43型式併行期まで遡り、本横穴墓群形成の端緒となったと推測される。次いで１号墓と３号墓がTK209型式併行期に築造され、１号墓は隼上りⅢ型式段階併行期以降も追葬行為が行われた可能性が高い。２号墓と４号墓および６号墓は隼上りⅠ型式から隼上りⅡ型式併行期にかけて築造されたと思われる。ただし、１号墓以外は盗掘のため内部が乱されており出土須恵器の年代が築造時期ないし使用期間を反映していないことも考えられる。とくに６号墓は２号や４号より精美な造りであることから築造時期が遡る可能性がある。

表１　隅ヶ迫横穴墓群土器観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
1	１号横穴	須恵器	坏蓋	完形	100%	口径12.8cm 器高4.3cm	口縁部先端がやや外反する。	回転ナデ。外面天井部は回転ヘラケズリ 内面天井部は不定ナデ。	灰N 5 / 緑灰7.5GY 6 / 1	灰N 5 / オリーブ灰 5 GY 6 / 1	精良 良好	
2	１号横穴	須恵器	坏蓋	完形	100%	口径13cm 器高４cm	天井部からなだらかに傾斜し、口縁部で角度を変える。	回転ナデ。外面天井部は回転ヘラケズリ 内面天井部は不定ナデ。	オリーブ灰 5 GY 5 / 1	オリーブ灰 5 GY 5 / 1	精良 良好	
3	１号横穴	須恵器	坏蓋	完形	100%	口径11.1cm 器高3.6cm	口縁部先端を平たくおさめる。	回転ナデ。外面天井部は回転ヘラケズリ 内面天井部は不定ナデ。	灰オリーブ 7.5Y 6/2 黒N 2 /	灰N 6 /	普通 良好	
4	１号横穴	須恵器	坏蓋	完形	100%	口径12.7cm 器高2.1cm	焼き歪み	回転ナデ。外面天井部は回転ヘラケズリ 内面天井部は不定ナデ。	オリーブ灰 2.5GY 5 / 1	灰N 5 /	精良 良好	
5	１号横穴	須恵器	坏蓋	完形	100%	口径11.9cm 器高2.3cm	焼き歪み	回転ナデ。外面天井部は回転ヘラケズリ 内面天井部は不定ナデ。	灰7.5Y 6 / 1 灰10Y 5 / 1	灰白N 7 / 灰N 4 /	精良 良好	自然釉
6	１号横穴	須恵器	坏蓋	完形	100%	口径12.9cm 器高3.6cm	口縁部先端を丸くおさめる。	回転ナデ。外面天井部は回転ヘラケズリ 内面天井部は不定ナデ。	青灰 5 BG 5 / 1 明黄褐10YR 6 / 6	青灰 5 BG 5 / 1 明オリーブ 5 GY 7 / 1	普通 良好	
7	１号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径11.3cm 器高3.7cm	受部は短く内傾する。	回転ナデ。外面には一部回転ヘラケズリ 内面底部は不定ナデ。	灰N 5 /	灰N4/	普通 良好	
8	１号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径11.4cm 器高3.5cm	受部は内傾し、先端部は鋭くおさめる。	回転ナデ。外面には一部回転ヘラケズリ 内面底部は不定ナデ。	灰N 4 / 灰N 6 /	灰N 5 /	精良 良好	
9	１号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径12.5cm 器高4.4cm	受部は内傾し、先端を細くおさめる。	回転ナデ。外面には一部回転ヘラケズリ 内面底部は不定ナデ。	灰N 5 / オリーブ灰 2.5GY 6 / 1	灰N 5 / 明オリーブ灰 2.5GY 7 / 1	普通 良好	
10	１号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径11.1cm 高さ3.8cm	底部はやや平底を呈し、受部は内傾して立ち上がる	回転ナデ。外面には一部回転ヘラケズリ 内面底部は不定ナデ。	暗灰N 3 / 明オリーブ灰 5 GY 7 / 1	灰白 7 / 明オリーブ 2.5GY 7 / 1	普通 良好	
11	１号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径13cm 器高3.6cm	受部は内傾しながら立ち上がる。	回転ナデ。外面には一部回転ヘラケズリ 内面底部は不定ナデ。	灰N 6 / 灰N 4 /	灰白N 7 / 灰N 6 /	普通 良好	
12	１号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径9.9cm 器高3.7cm	底部は平底気味。口縁部は内傾しながら低く立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。中央部に不定ナデ。外面底部にヘラ記号	灰N4/	灰N4/	精良 良好	
13	１号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径11.9cm 器高4.4cm	胴部は全体的に丸みを帯びる。	外面底部付近のみ回転ヘラケズリ。あとは回転ナデ。	暗灰N 3 /	灰N4/	普通 やや不良	自然釉
14	1号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径10.3cm 器高3.7cm	受部は短く内傾し先端部を鋭くおさめる。底部は平底。	回転ナデ。外面には一部回転ヘラケズリ 内面底部は不定ナデ。	灰白2.5Y 8 / 2 淡黄2.5Y 8 / 3	灰白7.5Y 8 / 2 淡黄7.5GY 8 / 3	やや粗 不良	
15	1号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径10.8cm 器高４cm	受部は短く内傾し、先端部のみ垂直に立ち上がる。	回転ナデ。外面には一部回転ヘラケズリ 内面底部は不定ナデ。	灰N 5 /	灰N 5 /	精良 良好	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
16	1号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径13cm 器高４cm	口縁部先端を丸くおさめる。	摩滅激しく不明瞭だが、体部には回転ナデ。	灰白7.5Y7/1	灰白7.5Y7/1	精良 良好	
17	1号横穴	須恵器	坏蓋	完形	100%	口径8.3cm 器高2.7cm	受部先端を丸くおさめる。	回転ナデ。外面天井部は回転ヘラケズリ 内面天井部は不定ナデ。	灰N５／ 暗オリーブ灰2.5GY３／１	灰N５／	精良 良好	
18	1号横穴	須恵器	坏蓋	完形	100%	口径8.1cm 器高2.6cm	受部は短く内傾する。	回転ナデ。外面天井部は回転ヘラケズリ 内面天井部は不定ナデ。	青灰10BG５／１	暗青灰10BG４／１ 青灰10BG６／１	普通 良好	
19	1号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径8.7cm 器高3.8cm	平底の底部。	底部の回転きりはなし痕をそのまま残す。	灰N６／ 淡黄7.5Y８／３	明オリーブ灰2.5GY７／１ 緑灰7.5GY６／１	精良 良好	
20	1号横穴	須恵器	坏身	完形	80%	口径９cm 器高3.1cm	口縁部先端を鋭くおさめる	回転ヘラキリはなしの後、回転ヘラケズリを行わない	暗灰N３／ オリーブ灰2.5GY６／１	灰白N７／	普通 良好	
21	1号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径9.3cm 器高2.7cm	平底の底部。	底部の回転きりはなし痕をそのまま残す。	暗灰N３／ オリーブ灰2.5GY６／１	灰５／ 明オリーブ灰５GY７／１	普通 良好	
22	1号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径9.2cm 器高3.1cm	平底の底部。	底部の回転きりはなし痕をそのまま残す。	灰N５／ 灰白５GY８／１	灰N５／	普通 良好	
23	1号横穴	須恵器	高坏	完形	90%	口径11.8cm 底径9.4cm 器高6.9cm	受部先端を丸くおさめる	回転ナデ。坏部底面は不定ナデ。	灰N５／～４／	灰N５／	精良 良好	
24	1号横穴	須恵器	高台付坏	完形	100%	口径（14cm） 器高５cm 底径10.7cm	焼き歪みが激しい	内外面とも回転ナデ。外面胴部下部に回転ヘラケズリ	灰N５／ 暗灰３／	灰N６／	やや不良 普通	
25	1号横穴	須恵器	高台付坏	完形	100%	口径（15cm） 器高（5.2cm） 底径7.6cm	焼き歪みが激しい	回転ナデ。外面には一部回転ヘラケズリ	灰N６／ 暗灰N３／	灰白７／ 灰N４／	やや粗 普通	
26	1号横穴	須恵器	平瓶	口縁部欠損	90%	胴部径16.2cm	底部は丸底気味。	胴部外面はカキ目。頸部はヨコナデ。	灰N４／		精良 良好	
27	1号横穴	須恵器	平瓶？	口縁部欠損	70%	胴部径12.3cm 底径10.8cm	底部は平底を呈す。	外面は回転ナデ。	灰N６／	灰N６／	精良 良好	
28	1号横穴	須恵器	鉢か		20%	底径（5.5cm）		内外面とも回転ナデ。外面胴部下部に回転ヘラケズリ	灰白2.5Y８／１	灰褐7.5YR７／２		
29	1号横穴	土師器	椀	完形	90%	口径11.8cm 器高4.7cm 底径4.8cm	底部は平底。 口縁部先端は直線的に立ち上がる	横ナデのち横方向の粗いミガキ	橙５YR７／６	橙５YR７／６	良	
30	1号横穴	土師器	坏	完形	90%	口径11.6cm 器高3.2cm 底径5.9cm	底部は平底。口縁部は外反しながら直線的に立ち上がる。	外面はナデ。内面は工具によるナデか。	橙５YR7/6	橙５YR6/6	普通 良好	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
31	1号横穴	土師器	模倣坏	完形	100%	口径12.4cm 器高4.4cm	胴部は全体的に丸みを帯びる。受部先端は丸くおさめる。	内外面とも横、斜め方向のミガキ。外面底部にヘラ記号	橙5 YR 6 / 6	橙5 YR 6 / 6	精良 良好	
32	1号横穴	土師器	坏	完形	90%	口径16.7cm 器高5.5cm	口縁部は逆ハの字状に開く。	外面は不明瞭 内面は横ナデのちヘラミガキ。	にぶい黄橙 10YR 7 / 4 橙5 YR 7 / 6	橙7.5YR 7 / 6	やや粗	
33	1号横穴	土師器	坏	完形	80%	口径（15.1cm） 器高4.6cm	口縁部先端は直線的に立ち上がる。	外面は不明瞭 内面は横ナデのちヘラミガキ	橙5 YR 7 / 6	橙5 YR 7 / 6	精良 良好	
34	1号横穴	土師器	椀	完形	90%	口径（12.8cm） 器高4.4cm 底径5.1cm	底部は平底。 口縁部先端は直線的に立ち上がる	摩滅のため不明瞭。ナデのちミガキか。	7.5YR 8 / 4	7.5YR 8 / 6	やや粗 普通	
35	1号横穴	土師器	鉢	完形	100%	口径8.3cm 器高7.7cm 底径３cm	底部は平底。 口縁部は内湾しながら立ち上がる	摩滅激しい。横ナデのち横、斜めのミガキか	橙5 YR 7 / 6	橙7.5YR 7 / 6	精良 普通	
36	1号横穴	土師器	鉢	完形	100%	口径13.6cm 器高7.1cm 底径6.2cm	底部は平底。 口縁部は外開き。	内外面とも横、斜め方向のミガキ	橙5 YR 7 / 6 橙7.5YR 7 / 6	橙7.5YR 7 / 6	やや粗 普通	
37	1号横穴	土師器	小型壷	完形	60%	口径（6.9cm） 器高12.8cm	丸底に近い底部。口縁部は短く直線的に立ち上がる	外面は不明瞭 内面は横、斜めのヘラミガキ	にぶい黄橙 10YR 7 / 4	にぶい黄橙 10YR 7 / 4	やや粗 良好	
38	1号横穴	土師器	鉢	口縁部欠損	60%	胴部径11cm	胴部下半部からすぼまりながら口縁部に至る	外面は縦方向の板ナデ。内面はナデか。	橙7.5YR 7 / 6 橙5 YR 7 / 6	にぶい黄橙 10YR 7 / 4 橙5 YR 6 / 6	やや粗 良好	
46	2号横穴	須恵器	坏身	完形	50%	口径（11cm） 器高3.9cm	受部は内傾しながら立ち上がる。	底面はヘラオコシをそのまま残す。	灰白2.5Y 8 / 1 灰N 6 /	灰白2.5GY 8 / 1	普通 普通	
47	2号横穴	須恵器	坏身	受部	10%以下		受部は内傾しながら立ち上がり端部を鋭くおさめる。	内画面とも回転ナデ	緑灰7.5GY 6 / 1	オリーブ灰 2.5GY 6 / 1	精良 良好	
48	2号横穴	須恵器	坏蓋	口縁部	10%以下		口縁端部を丸くおさめる。	内画面とも回転ナデ	灰N 5 /	灰N 5 /	普通 普通	
54	3号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径12.3cm 器高3.8cm	受部は強く内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。外面胴部下部に回転ヘラケズリ	青灰５B 6 / 1	青灰10BG 6 / 1	精良 良好	
55	3号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径11.6cm 器高3.9cm	受部は内傾しながら立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。外面胴部下部に回転ヘラケズリ	緑灰7.5GY 6 / 1 灰N 5 /	灰N 5 /	精良 良好	
56	3号横穴	須恵器	高坏	口縁部欠損	40%	底径（11cm）	脚部はハの字状に開く。	摩滅が激しく不明瞭。外面に一部に回転ナデが残る。	灰白５Y 8 /	灰白５Y 8 /	粗 不良	
57	3号横穴	須恵器	坏身	口縁～体部	30%	口径（13.7cm） 器高（3.7cm）		内外面とも回転ナデ。	暗青灰 10BG 4 / 1	青灰10BG 6 / 1	普通 良好	蓋か

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
58	4号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径10cm 器高3.6cm	受部は短く強く内傾する。	底部の回転ヘラオコシ痕をそのまま残す。	灰白7.5Y7/2	灰白7.5Y 8/2	普通 不良	
60	5号横穴	須恵器	長頸壺	胴部	10%以下	胴部径（21cm）	肩部が張る	胴部中央付近にカキ目。下部には回転ヘラケズリ。	灰N 5/	青灰10BG 6/1	精良 普通	
61	5号横穴	須恵器	坏蓋	口縁～体部	50%	口径（11.8cm） 器高（3.4cm）	天井部と口縁部との境で角度を変える。	回転ナデ。外面天井部は回転ヘラケズ内面天井部は不定ナデ。	灰N 6/	灰N 5/	やや粗 やや不良	
62	5号横穴	須恵器	坏蓋	口縁部	10%以下		口縁端部を鋭くおさめる。	内外面とも回転ナデ。外面は天井部に近い部分で回転ヘラケズリ	緑灰10G 6/1	5G 5/1	やや粗 普通	
63	5号横穴	須恵器	坏蓋	口縁部	10%以下			内外面とも回転ナデ。外面は天井部に近い部分で回転ヘラケズリ	灰N 5/	灰N 5/	やや粗 普通	
65	5号横穴	須恵器	坏身	底部一部欠損	10%	口径（15.5cm）	受部は強く内傾したのち角度をかえて立ち上がる	摩滅激しい。内外面ともに回転ナデか。	灰N 6/	灰白N 7/	やや粗 普通	
66	5号横穴	須恵器	甕	口縁部	10%以下	口径（18.5cm）	口縁部はやや外傾して立ち上がる。	内外面とも回転ナデ。	灰7.5Y 6/1	灰白7.5Y 8/1	やや粗 やや不良	
67	5号横穴	須恵器	高坏	口縁部	10%以下	口径（12.3cm）	口縁部下に段を設ける。	内外面とも回転ナデ。	青灰 5B 5/1	青灰 5B 6/1	精良 普通	
68	5号横穴	須恵器		口縁部	10%以下		口縁部下に段を設ける。	内外面とも回転ナデ。	暗灰N 3/	灰オリーブ 7.5Y 5/2	精良 良好	
69	5号横穴	須恵器	不明	口縁部	10%以下		口縁部が直立気味に立ち上がる。	外面は指ナデ。内面は回転ナデ。	灰N 6/	灰N 5/	やや粗 普通	
70	5号横穴	須恵器	高坏	口縁部	10%以下	口径（12.2cm）	口縁部下に浅い段を設ける。	内外面とも回転ナデ。	赤灰10R 5/1	青灰10BG 5/1	普通 やや不良	
71	5号横穴	須恵器	ハソウ	口縁部	10%以下		口縁先端を鋭くおさめる。	内外面とも回転ナデ。	灰N 6/	灰N 5/	やや粗 普通	
72	5号横穴	土師器	小型壺	頸部～底部	20%	胴部径（9cm）	胴部は丸みを帯びて張る。	外面はナデ、ミガキ。内面はミガキ。	にぶい赤褐 2.5YR 5/4 赤灰2.5YR 4/1	にぶい赤褐 2.5YR 4/3 赤黒2.5YR 2/1	普通 良好	
73	5号横穴	土師器	高坏	脚部	10%	底径7.3cm	脚部はハの字状に開く。	摩滅激しい。内外面ともにナデか。	にぶい橙 7.5YR 7/3	褐灰7.5YR 4/1	普通 良好	
94	6号横穴	須恵器	坏身	完形	100%	口径9.9cm 器高2.6cm	受部は非常に短く内傾する。	内外面とも回転ナデ。外面胴部下部に回転ヘラケズリ	灰白7.5Y7/1	灰白7.5Y7/1	精良 不良	

表 2　隅ヶ迫横穴墓群鉄器計測表

挿図番号	出土地点	鏃身形状	法　　量	備　　考
39	1 号横穴	方頭形鉄鏃	現存長10.3cm／鏃身幅2.6cm	
40	1 号横穴	方頭形鉄鏃	現存長2.6cm／鏃身幅2.7cm／鏃身厚0.3cm	
41	1 号横穴	方頭形鉄鏃	現存長7.4cm	茎部、鏃身先端欠損
42	1 号横穴	刀子	現存長7.1cm／刀身幅1.3cm／刀身厚0.4cm	
43	1 号横穴	刀子	現存長 9 cm／刀身幅1.5cm／刀身厚0.4cm	
49	2 号横穴	方頭形鉄鏃	現存長6.7cm／鏃身長4.8cm／鏃身幅3.1cm／鏃身厚0.4cm	
74	5 号横穴	方頭形鉄鏃	現存長9.8cm／鏃身長5.9cm／鏃身幅2.4cm／鏃身厚0.2cm	
75	5 号横穴	方頭形鉄鏃	現存長 6 cm／鏃身長4.4cm／鏃身幅1.6cm／鏃身厚0.4cm	
76	5 号横穴	? 鉄鏃	現存長6.3cm／鏃身幅1.9cm／鏃身厚0.2cm	
77	5 号横穴	方頭形鉄鏃	現存長6.2cm／鏃身長4.7cm／鏃身厚 2 cm	
78	5 号横穴	方頭形鉄鏃	現存5.7cm／鏃身幅1.9cm／鏃身厚0.2cm	
79	5 号横穴	圭頭形鉄鏃	現存長6.6cm／鏃身長4.7cm／鏃身幅2.1cm／鏃身厚0.15cm	
80	5 号横穴	柳葉形鉄族	現存長8.2cm／鏃身幅1.7cm／鏃身厚0.3cm	
81	5 号横穴	方頭形鉄鏃	現存長3.1cm／鏃身幅2.3cm／鏃身厚0.3cm	
82	5 号横穴	刀子	現存長10.8cm／刀身幅1.5cm／刀身厚0.4cm	
83	5 号横穴	刀子	現存長7.2cm／刀身幅1.6cm／刀身厚0.5cm	
84	5 号横穴	刀子	現存長8.2cm／刀身幅1.3cm／刀身厚0.45cm	
85	5 号横穴	刀子	現存長12.7cm／刀身幅1.2cm／刀身厚0.3cm	
86	5 号横穴	刀子	現存長8.6cm／刀身幅1.4cm／刀身厚0.3cm	
91	6 号横穴	刀子	現存長8.8cm／刀身幅1.8cm／刀身厚0.7cm	
92	6 号横穴	刀子	現存長6.1cm／刀身幅0.8cm／刀身厚0.3cm	
93	6 号横穴	方頭形鉄鏃	現存長10.9cm／鏃身長 7 cm／鏃身幅1.3cm／鏃身厚0.3cm	

表 3　隅ヶ迫横穴墓群耳環計測表

挿図番号	出土地点	材　　質	直径	幅	備　考
44	1 号横穴	銅芯	2.8cm	0.4cm	
45	1 号横穴	銅芯金箔張	2.1cm	0.6cm	

第Ⅳ章　南原ベニガラ工房跡

第Ⅳ章　南原ベニガラ工房跡

第１節　調査に至る経緯

平成２年11月頃、大字三納代南原の土砂採取場において「大量の土器と赤色の土」が発見されたとの報告が町教育委員会にもたらされた。現地を確認し、業者と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、工事予定地内の確認調査を行うことになった。

第２節　遺跡の位置と環境

遺跡は、鬼付川により大きく開析された谷（通称三納代谷）よりさらに新田原台地を小さく開析された小谷のわずかに広がる棚状の平坦面標高45mに立地する。周辺の崖には、川原層群に近似する礫層と泥層の互層がある。また、崖面に酸化鉄の露頭が存在し、湧水も確認できる。

周辺地域では遺跡南側の台地面に県指定史跡富田７号墳や南原第１遺跡、北廻遺跡が存在する。いずれも発掘調査歴はないが、南原第１遺跡では縄文時代早期の土器片や焼石が表採されている。

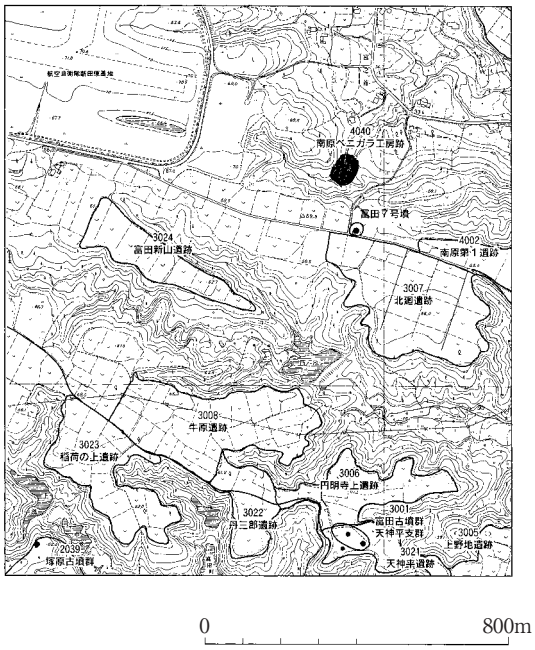
第３節　遺構と遺物

（１）１号土抗

概要報告書では炭窯状遺構として報告されている。長さ8.6m、幅1.65mの長方形プランを呈し、深さは40～50㎝程度である。埋土には大量の炭化物が含まれている

（２）２号土抗

長軸2.1m、短軸1.1mの不定楕円形を呈し、検出面からの深さは40㎝を計る。埋土は赤色砂質土および赤色粘質土である。概要報告書では「ベニガラ焼成窯」として報告されているが、埋土中に大量のほうろく鍋片が混入していることを考えると、ベニガラの製造ではなく、ほうろく鍋を焼成するための窯であった可能性もある。

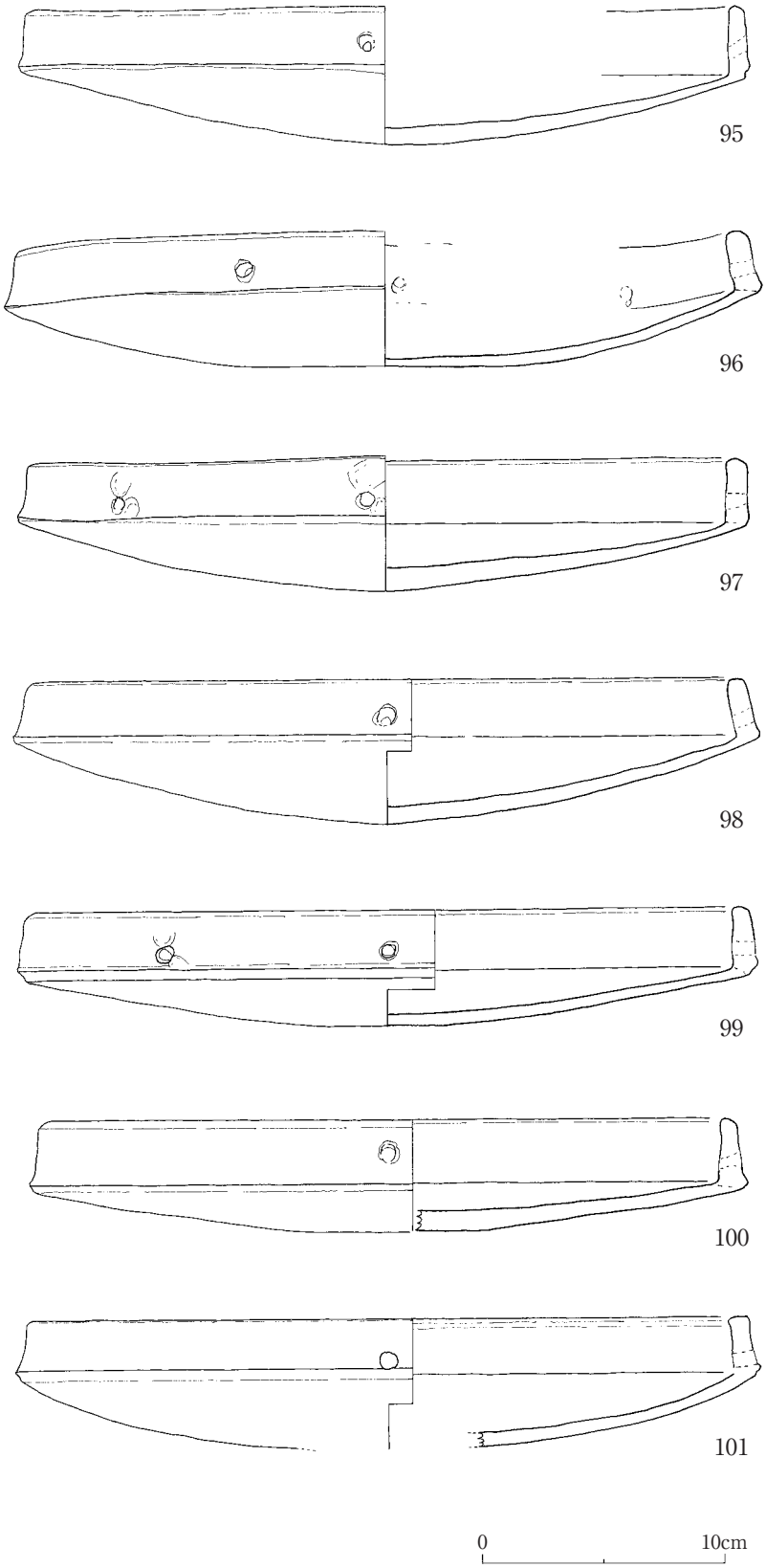


図版15　南原ベニガラ工房跡と周辺遺跡

（３）出土遺物

遺物には褐鉄鉱の残滓と陶器類、ほうろく鍋片がある。このうち陶器類は小片で図化できなかったが薩摩焼系の可能性がある。ほうろく鍋片は２号土抗内ないしその周辺から大量に出土した。いずれも

細かく破砕されていたが７点を図化した。ほうろく鍋は口径が28～29.5㎝で、高さは4.7～７㎝で若干バラつきがあるものの規格性が伺える。口縁部には焼成前の穿孔された孔がある。口縁部が完全に復原できた個体が少ないが孔の数は３つであった可能性が高い。胎土は精良で、表面だけでなく断面も橙や赤色である。このことからはじめから酸化鉄等を混入した赤い粘土を使用していたと思われる。調整は口縁部が内外面とも回転ナデ底部内面は工具を使用した回転ナデが施される



図版16　南原ベニガラ工房跡出土遺物

第４節　小結

今回の調査では大量のほうろく鍋片を検出した。ほうろく鍋は県内での検出例がなく時期もはっきりしない。ほうろく鍋は現代でも存在し主に豆や穀類を煎るのに使用されているほか、一部の地域では土用のうしの日に夏バテ防止のための祈祷用具として使われているようだ。本遺跡のほうろく鍋がどのように使用されていたか判然としない。今後の類例の増加に期待したい。

表 4　南原ベニガラ工房跡土器観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
95	一括	土師器	ほうろく鍋	全形	80%	口径28.9cm 器高5.7cm	底部が外側に凸レンズ状にふくらむ	口縁部は回転ナデ。底部内面も工具による回転ナデ	橙 5 YR 7 / 6 にぶい黄橙 10YR 7 / 4	橙7.5YR 7 / 6	精良 良好	
96	一括	土師器	ほうろく鍋	全形	80%	口径29.5cm 器高5.6cm	底部が平底気味。	口縁部は回転ナデ。底部内面も工具による回転ナデ	橙7.5YR 7 / 6 明赤褐 2.5YR 5 / 6	明赤褐 2.5YR 5 / 6	精良 良好	
97	一括	土師器	ほうろく鍋	全形		口径28.7cm 器高5.6cm	底部がやや尖底となる。	口縁部は回転ナデ。底部内面も工具による回転ナデ	橙 5 YR 7 / 6 赤10YR 4 / 8	橙2.5YR7/8 暗赤7.5YR	精良 良好	
98	一括	土師器	ほうろく鍋	全形		口径28.8cm 器高7cm	底部がやや尖底となる。	口縁部は回転ナデ。底部内面も工具による回転ナデ	橙7.5YR 7 / 6	橙7.5YR 7 / 6	精良 良好	
99	一括	土師器	ほうろく鍋	全形		口径29.1cm 器高4.8cm	底部が平底気味。	口縁部は回転ナデ。底部内面も工具による回転ナデ	橙7.5YR 7 / 6	橙 5 YR7/ 6 赤10YR 4 / 6	精良 良好	
100	一括	土師器	ほうろく鍋	全形		口径28cm 器高4.7cm	底部が平底気味。	口縁部は回転ナデ。底部内面も工具による回転ナデ	橙7.5YR 7 / 6	橙7.5YR 7 / 6 赤10R 4 / 6	精良 良好	
101	一括	土師器	ほうろく鍋	全形		口径（29.5cm）		口縁部は回転ナデ。底部内面も工具による回転ナデ	橙 5 YR 7 / 6	橙 5 YR7/ 6	精良 良好	

第Ⅴ章　祇園原地下式横穴５号の調査

第Ⅴ章　祇園原地下式横穴５号の調査

第１節　調査に至る経緯

平成５年８月下旬、大字新田字祇園原地区の畑地内において、草刈り中に地下式横穴らしき落ち込みを発見したとの連絡が町教育委員会にもたらされた。現地を確認すると、地下式横穴玄室の天井が幅約30㎝～100㎝にわたって崩落しているのが確認された。玄室内には遺物らしきものも確認され、残る天井部も崩落する危険性があった。このため町教育委員会では現地の保全に努めるとともに、周囲の状況からそのまま現地保存することは困難であると判断し、記録保存のための調査を実施することになった。

祇園原地区内ではこれまで４基の地下式横穴の調査を行っている。そこで今回の調査分を５号として取り扱うことにした。

調査は平成５年９月下旬から10月上旬に行い、調査後は埋め戻し保存を行った。

第２節　遺跡の位置と環境

新富町の北部には洪積台地が拡がっている。宮崎平野の洪積台地は高度の異なる複数の段丘面から構成され、本町では茶臼原面（標高約120m）、三財原面（標高約90m）、新田原面（標高約70m）で構成される。

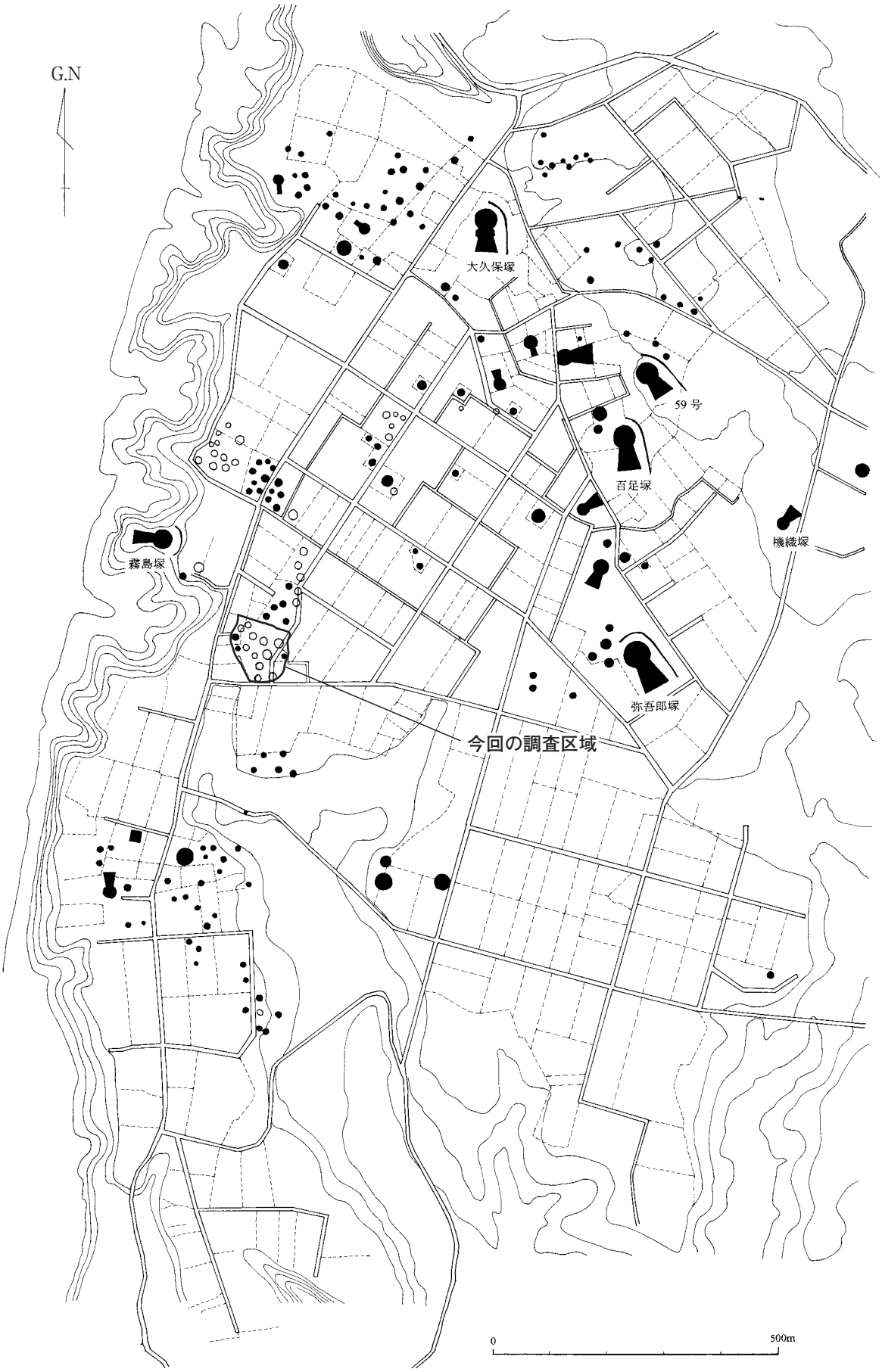
祇園原地下式横穴５号は祇園原遺跡の南西側に位置する。祇園原遺跡は新富町北西部標高約70mの新田原面上に位置し、西側から南側にかけては一ツ瀬川が蛇行しながら流れている。周辺では旧石器から近世に至る遺跡が広範囲にわたって確認されており、早くから人類の生活の場であったようだ。また、国指定史跡「新田原古墳群」の一群である祇園原古墳群の分布域になっており、古墳時代中期から後期を中心に前方後円墳14基、方墳１基、円墳139基の古墳が現存し、祇園原遺跡から春日遺跡にかけて分布している。

祇園原遺跡は平成４年度から５年度にかけて、県営農村基盤整備パイロット事業に伴う調査が行われ、縄文時代後期から古代に至る遺構や遺物が確認された。とくに古墳時代の調査では、墳丘が消滅し周溝のみが残存した墳丘消滅円墳が多数検出されている。これらは出土した須恵器などから古墳時代後期築造と考えられ、現存する円墳群とともに後期の群集墳を形成していたと思われる。また、周溝内に地下式横穴を伴う例や、周囲に馬の埋葬土抗を伴う例があり、その後行われた農道整備や農地保全に伴う調査でも古墳周溝や馬埋葬土抗の検出が相次いでいる。

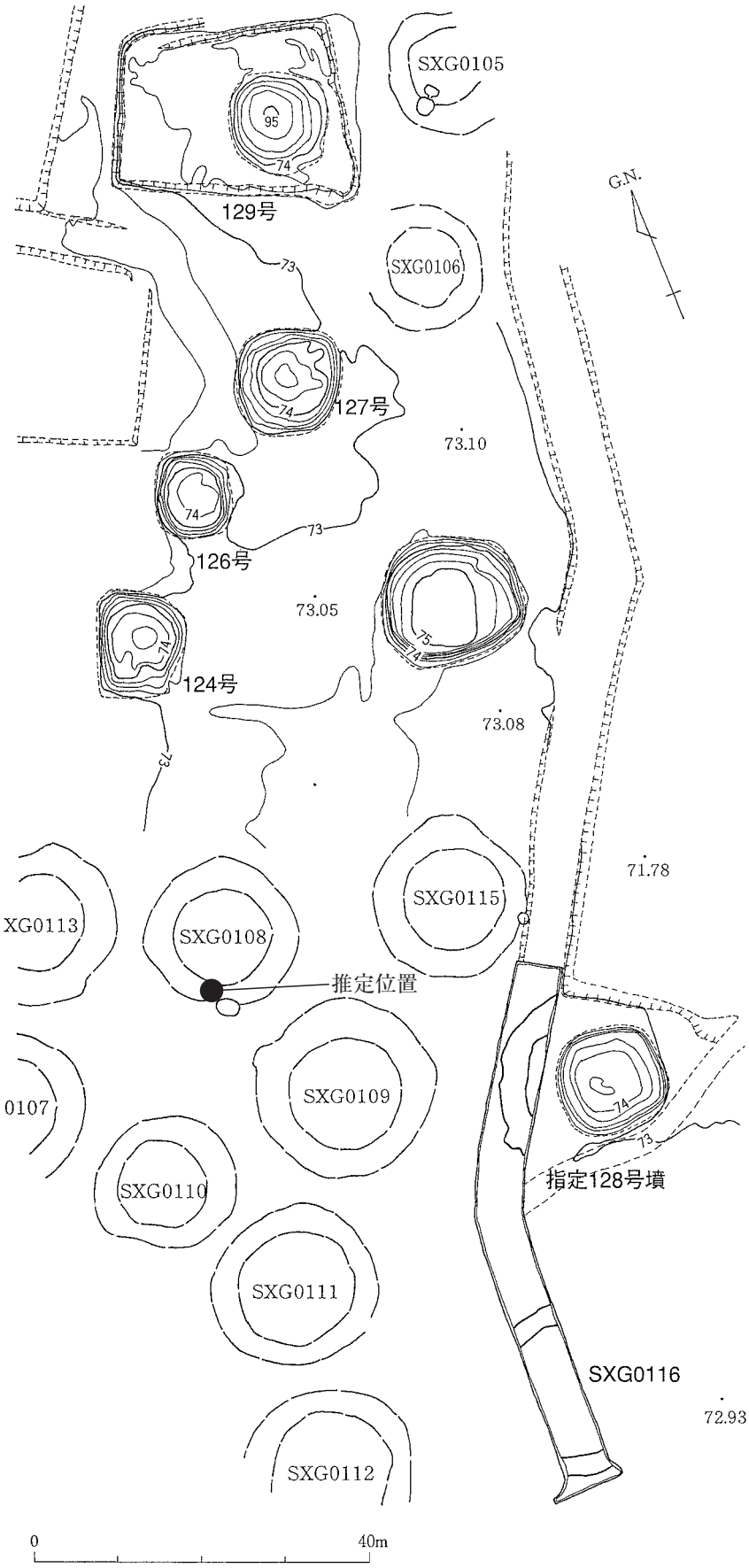
一方、南側に隣接する春日遺跡では台地南側で古墳時代中期中頃から後半にかけての集落が発見されている。祇園原遺跡では古墳築造時期に相当する住居跡は確認されていないため墓域と居住域については一定の制約があったものと考えられる。

さらに、祇園原遺跡の北側では弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、周溝墓を含む木棺墓や土抗墓など195基が検出された川床遺跡がある。川床遺跡は新田原面より一段高い三財原面に位置し、鉄鏃や鉄剣、鉄刀など豊富や鉄製品が副葬されていた。墓制の推移を検討する上で興味深い遺跡といえる。

祇園原遺跡と祇園原古墳群ないしその周辺遺跡では、継続的な調査が行われ、断片的ではあるが徐々にデータが蓄積されつつある。とくに古墳時代後期になると、県内でも最大



図版17　祇園原古墳群古墳分布図



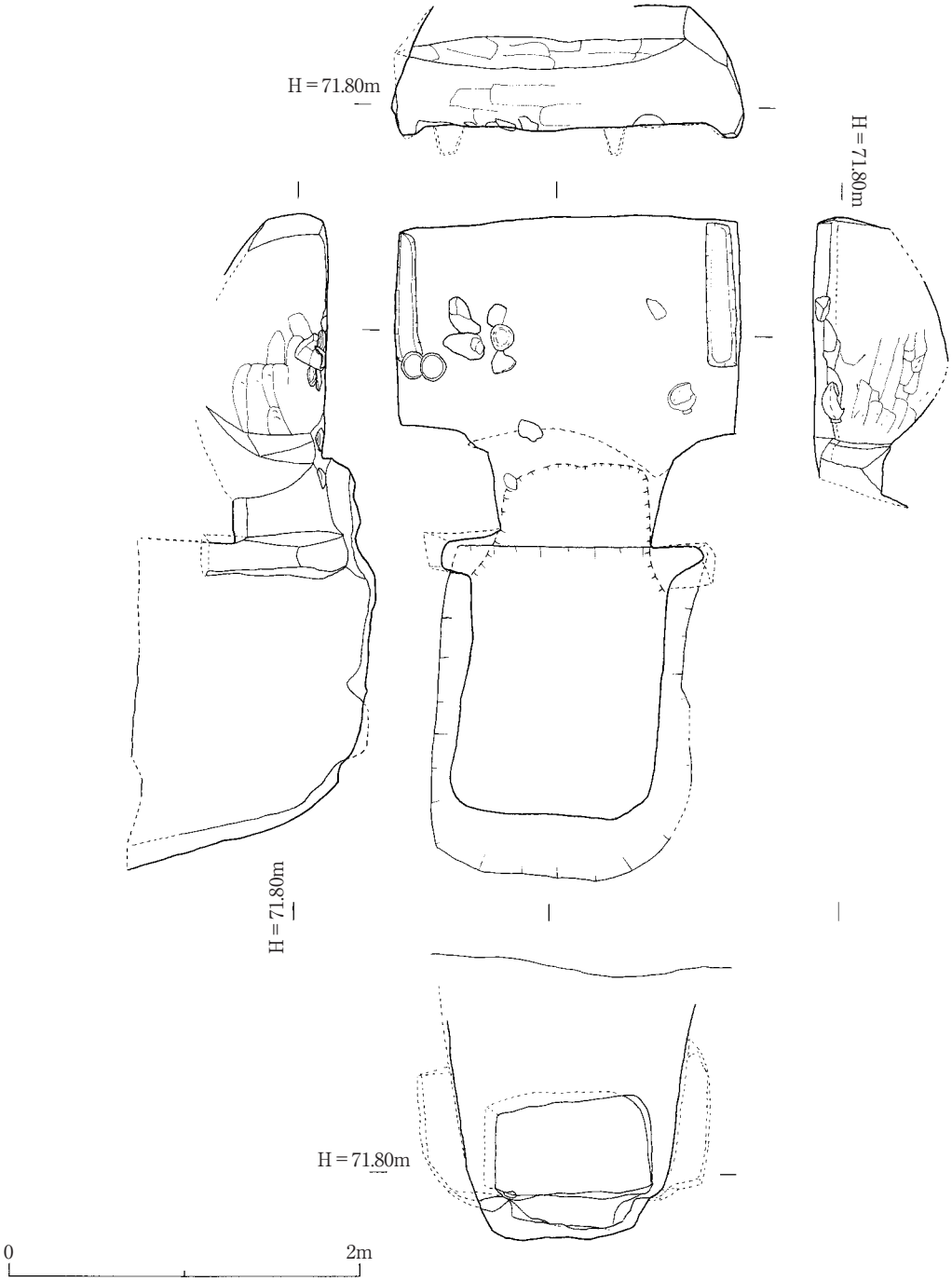
図版18　祇園原地下式横穴５号位置図

級の首長墓系列が形成されるとともに高塚墳、横穴墓、地下式横穴が混在する後期群集墳が形成される。宮崎県の古墳時代を考えるうえでも重要な地域であるといえよう。

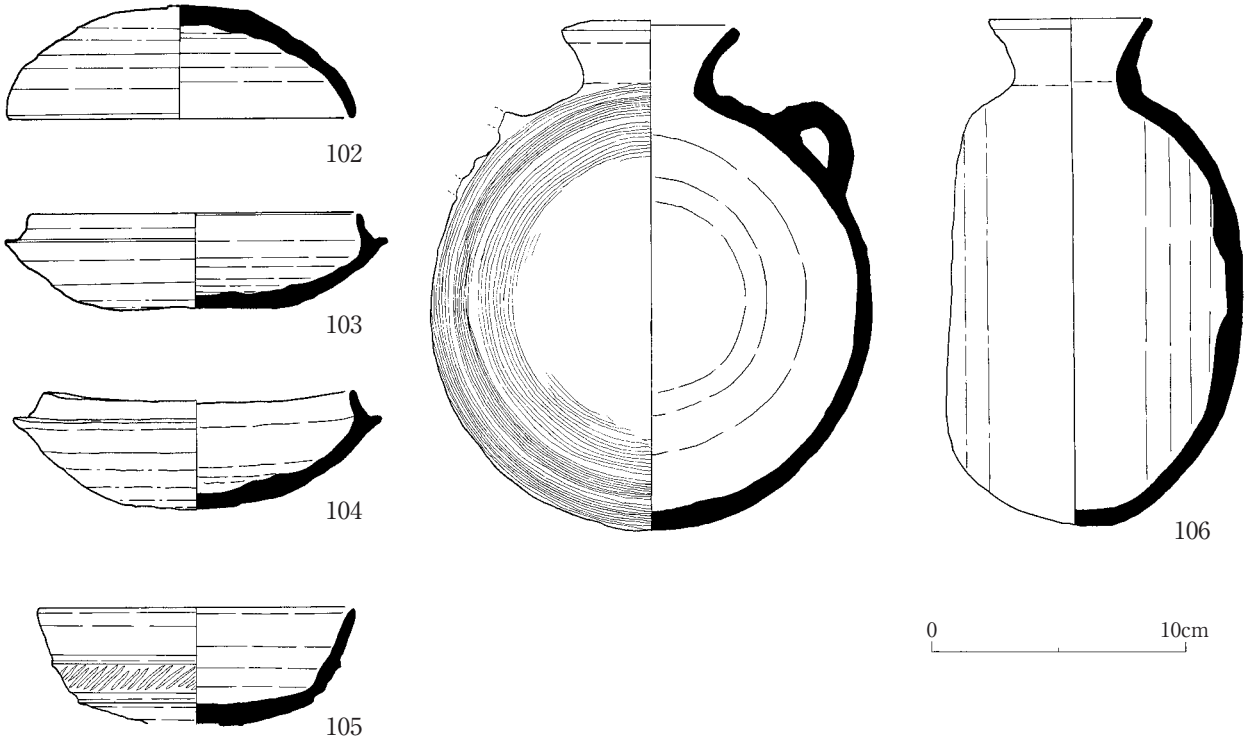
第３節　調査の概要

祇園原地下式横穴５号は祇園原遺跡の南東側に位置し、すぐ南側には瀬戸口遺跡と春日遺跡が隣接している。今回の調査区はすでに県営農村基盤整備パイロット事業に伴い調査が行われている箇所である。ここでは９基にも及ぶ消滅円墳の周溝や２基の馬埋葬土抗、石棺墓が検出されているが当時の調査ができるだけ遺構を保存することを目的としていたため、一部の古墳周溝埋土は掘削されなかった。このため地下式横穴５号を発見することができず今回の発見に至ったものと思われる。

調査は周囲の表土の除去から行った。そして平成４年度調査後の上面に保存のため被覆した黄色砂質土まで除去し、遺構の残存状態の確認を行った。その結果、玄室上面は特殊耕耘機械の掘削が及んでおり、天井を僅か４～５cm残すだけという非常に不安定な状態であ



図版19　祇園原地下式横穴５号実測図



図版20　祇園原地下式横穴５号出土遺物

ることが分かった。このためまず玄室内に落ち込んだ流入土の除去をはじめたが、作業の途中で残りの天井部も崩落したため、天井部を広げて調査を行った。

第４節　遺構と遺物

（１）遺構

玄室は横長の長方形プランを呈し、長軸約1.98m、短軸は東側がやや広く約1.2m、西側は約1.12mを計る。崩落のため天井の形状は不明だが高さ0.7～0.8m程度のドーム型と推測される。短軸側壁に面して両側では長さ75㎝、幅７～10㎝、深さ７㎝の掘り込みがある。この部分を屍床として使用していたと考えられ、小口板の設置に関係するものかもしれない。屍床内には人頭大の川原石が設置されている。

羨道部は長さ0.8m、羨門部付近の幅0.85mで、玄室に向けて緩やかに拡がり、玄室入口では1.08mを計る。高さは掘削高が0.72mで、その後玄室床面に合わせて埋め戻され使用時は0.55mを計る。

竪抗は床面で長軸1.3m、短軸1.1mの隅丸長方形を呈する。地表面からの深さは1.3mで、羨門部左右には板閉塞に係る掘り込みがある。また、竪抗から羨道床面および側壁に幅22㎝前後のU字形鋤先工具によるものと思われる工具痕が認められる。

（２）遺物

遺物は須恵器の提瓶１、坏身２、坏蓋１、高坏の坏部１のほか、坏身の中から朱玉２を検出した。このうち提瓶は玄室と羨門部に破片があることから埋葬時の破砕行為が想定さ

れる。

102は坏蓋である。口径は13.8cmを計り、口縁端部を丸く仕上げる。ヘラケズリの範囲は１／２近くに及び、内外面ともに赤色顔料が付着している。103と104は坏身である。103は口径13.1cmを計り、受部は内傾し、途中で角度を変えて口縁端部に至る。ヘラケズリの範囲は全体の１／３程度である。104は口径12.3cmで、わずかに焼き歪みが認められる。ヘラケズリの範囲は全体の２／３に及ぶ。いずれも底部内面には赤色顔料が付着している。105は高坏の坏部だが、坏として転用された可能性がある。口径12.7cmを計り、底部から体部との境目で角度を変えて口縁に至る。内外面とも回転ナデを施し、体部にはヘラ状工具による斜方向の連続沈線が施され、内面には赤色顔料が付着している。106が提瓶である。口縁は短く外反しながら立ち上がり、吊り手は半環状を呈す。外面には自然釉が認められる。朱玉は脆くなっており図化することができなかったが、一つは大きさが1.9cm×1.6cmで厚さが0.4cm、もう一つは2.5cm×2.2cmで厚さが0.6cmである。

第５節　小結

祇園原古墳群内ではこれまで５基の地下式横穴が確認されており、出土した須恵器は須恵邑編年のTK10型式からTK209型式併行期に相当する。祇園原地下式横穴５号から出土した須恵器はMT85～TK43型式に該当することから、これまでと同様に後期群集墳のなかの一墓制として評価できる。

祇園原古墳群内の地下式横穴は、いずれも円墳の周溝内に竪坑を構築するタイプである。

祇園原地下式５号は正確な位置が不明であるが、いずれかの円墳の周溝内に竪坑を構築した可能性が高い。

表５　祇園原地下式横穴５号土器観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
102	５号地下式	須恵器	坏蓋	完形	100%	口径13.8cm 器高4.5cm	口縁部先端を丸くおさめる。	外面天井部に回転ヘラケズリ。内外面とも回転ナデ。	オリーブ灰 5GY	オリーブ灰 5GY 5／1	精良 良好	内外面とも赤色顔料
103	５号地下式	須恵器	坏身	完形	100%	口径13.1cm 器高3.8cm	受部は内傾し、途中で角度を変えて先端に至る。	回転ナデ。外面には一部回転ヘラケズリ 内面底部は不定ナデ。	灰N 6／	灰N 6／	精良 良好	内面に赤色顔料。
104	５号地下式	須恵器	坏身	完形	100%	口径12.3cm 器高4.4cm	受部は内傾し、先端部は丸くおさめる。	回転ナデ。外面には一部回転ヘラケズリ 内面底部は不定ナデ。	灰7.5Y 6／1	灰7.5Y 6／1	精良 良好	内面に赤色顔料。
105	５号地下式	須恵器	高坏	完形	50%	口径12.7cm	底部から体部にかけて角度を変えて口縁部に至る。	回転ナデ。体部に斜方向のヘラ状工具による連続沈線	暗青灰 5BG 3／1	オリーブ灰 5GY 5／1	精良 良好	坏として転用か。内面には赤色顔料
106	５号地下式	須恵器	堤瓶	完形	90%	口径6.6cm 器高20cm 胴部径17.5cm	吊り手は半環状を呈し、口縁は短く外半しながら立ち上がる。	外面に同心円状のカキ目。	明青灰1 10BG 7／1 青灰10BG 6／1	灰白7.5Y 8／2 灰7.5Y 6／1	やや粗 やや不良	自然釉

第Ⅵ章　比良横穴墓群の調査

第Ⅵ章　比良横穴墓群の調査

第１節　調査に至る経緯

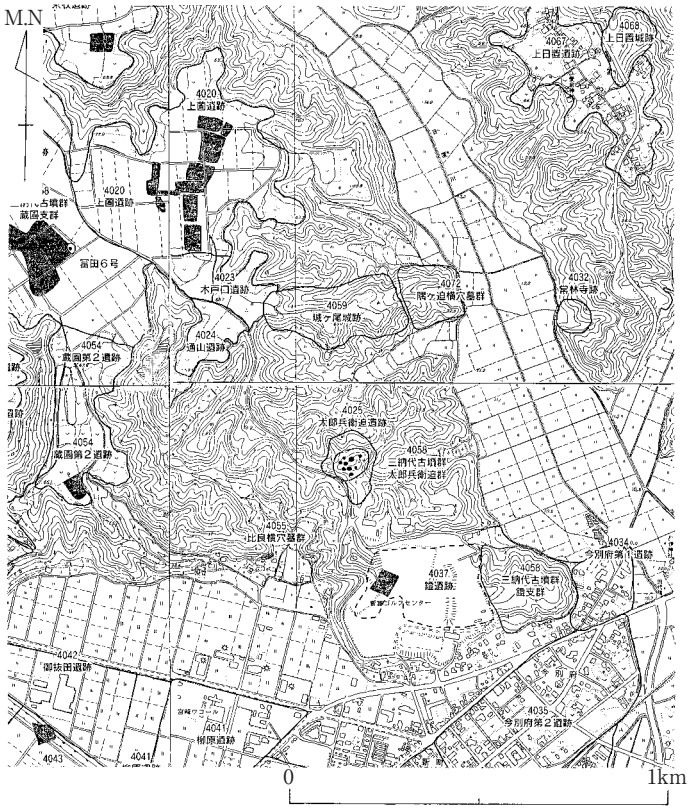
平成７年８月５日に町民の方から、大字三納代の比良地区の土砂採取場で横穴墓らしき遺構があるとの連絡があった。そのため町教育委員会では土地所有者および土砂採取業者と遺跡の取り扱いについて協議を行った。その結果、土砂採取の目的が土砂崩壊による危険防止であることから、工事対象区の横穴墓について調査を行い、記録保存で対応することになった。

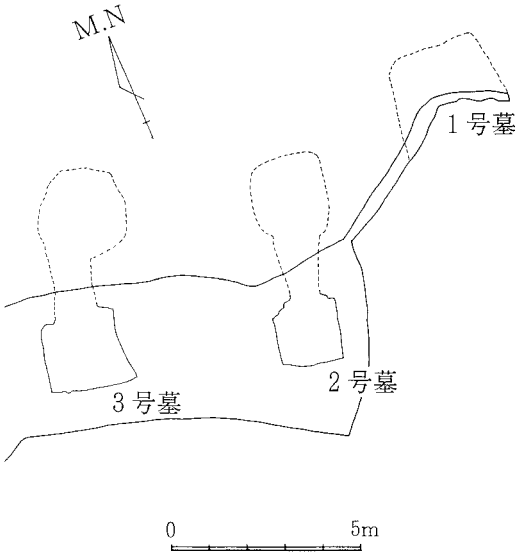
調査期間は平成７年８月８日から９月10日と11月29日から12月23日までである。

第２節　遺跡の位置と環境

比良横穴墓群は北に日置川、南に鬼付女川に挟まれた通称「北原牧台地」から東に派生した舌状丘陵標高約30mの南側斜面に位置する。１号から３号が東西に並んで見つかった。

台地上には古墳時代中期から古代を中心とした集落である上薗遺跡があり、これまでの調査で竪穴住居が300軒以上見つかっている。上薗遺跡の周囲には古墳時代中期以降の墓群が形成されている。舌状丘陵帯の東側には三納代古墳群鐙支群や同太郎兵衛迫支群がある。これらは一定の空間に葺石を伴った円墳が築かれており、初期群集墳の様相を呈している。また舌状丘陵の北側斜面には隅ヶ迫横穴墓群があり、出土遺物などから比良横穴墓群と併行して築かれたと思われる。台地上には円墳や方墳、地下式横穴で構成された後期群集墳が広がっており、集落と墓性の関係を考える上で重要な地域であるといえる。





図版21　比良横穴墓群位置図と遺構配置図

第３節　調査の概要

調査対象となった横穴墓は３基である。このうち１号は玄室が半壊状態での検出であった。２号は保存状態が良好で未開口の横穴墓であったようだ。人骨の遺存状態も良く８体以上の埋葬があったと推測される。３号も未開口の横穴墓であるが、人骨は残っていない。

第４節　遺構と遺物

（１）１号横穴墓

①　遺構

最も東側で検出された。玄室は既に半壊状態であったが奥壁側は遺存している。南向きに開口していたと思われる。玄室幅は1.9mから２mを計る。残存部の形状から隅丸の長方形プランと推測される。高さは1.5mでドーム形天井を呈する。群内最大規模の横穴である可能性が高い。排水溝は施されていない。玄室内部には２ヵ所の礫のまとまりがあり、礫床を形成していたと思われる。いずれも主軸に対して平行に造られており、東側の礫床は比較的小振りな礫を中心に構成されているのに対し、西側では小児人頭大程度の大きめな礫を中心に構成されている。壁面にはU字形鋤先痕と思われる調整痕のほか、ニードル状の工具で刺突した痕跡が多数認められる。副葬に伴う祭祀行為の可能性がある。人骨は遺存していない。

②　遺物

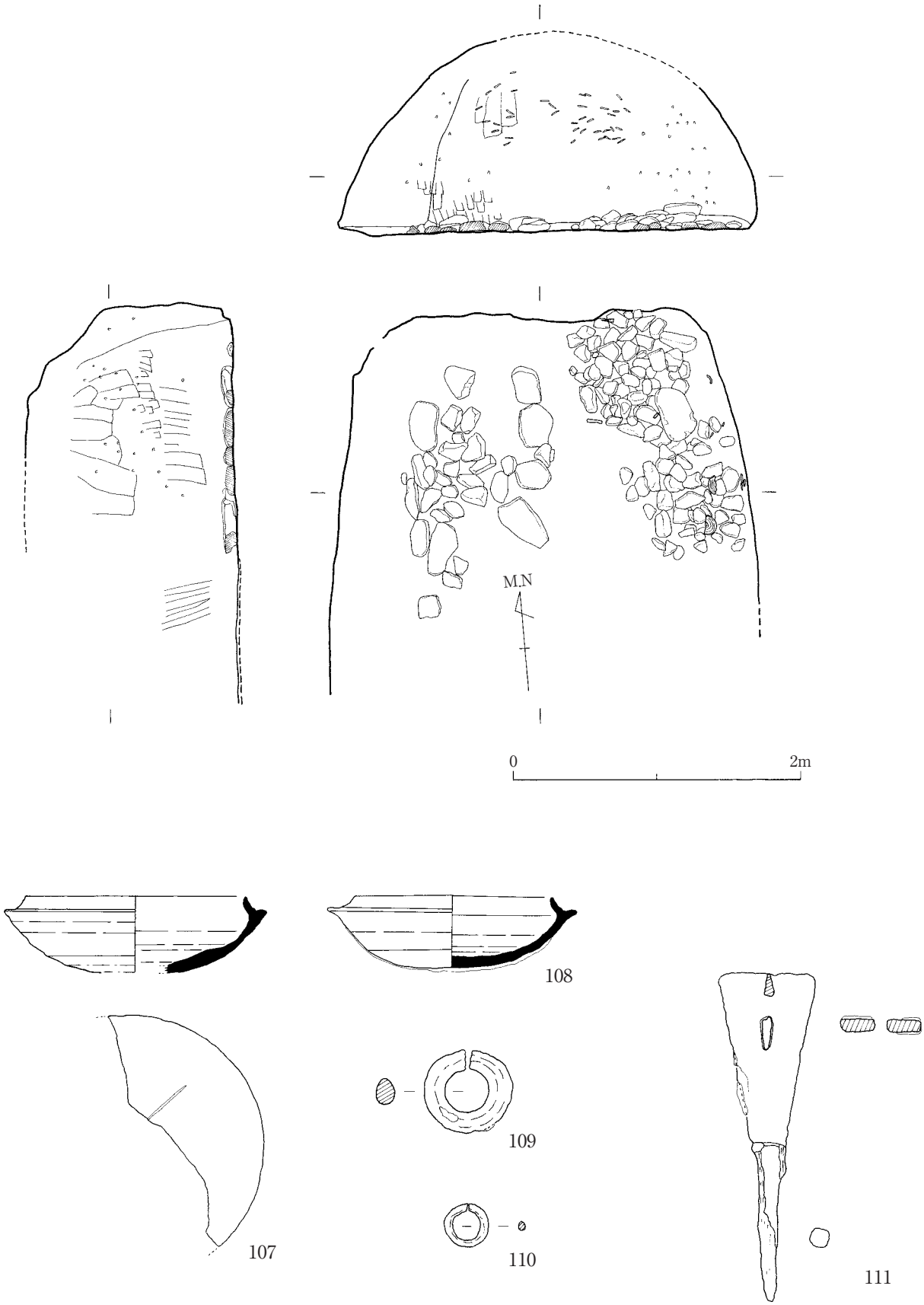
須恵器、鉄鏃、刀子、馬具、耳環を検出した。

107と108は須恵器の坏身である。107は推定口径11.5㎝で底部が欠損している。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／３程度である。口縁部は内傾しながら立ち上がり、先端を鋭くおさめる。108は口径10㎝、器高3.8㎝を計る。回転ヘラケズリの範囲は全体の２／５程度である。口縁部は内傾しながら立ち上がる。109は銅芯銀箔張耳環である。径は2.9㎝で、全体が錆化している。110は銅芯金箔張耳環である。径1.5㎝と小型であることから耳以外の装着も考えられる。錆化激しいが一部に金箔が良好に残る。111～113は方頭形の鉄鏃である。111は茎部まで残存しており全長11.4㎝、鏃身長5.8㎝、幅3.3㎝を計る。鏃身の中央部には幅３～４mm、長さ１㎝程の孔が穿がわれている。112は茎部が欠損している。鏃身長は2.6㎝。113は茎部まで残存している。全長9.6㎝＋α、鏃身長4.4㎝で幅1.5㎝と細身である。茎部には有機質の痕跡が残っている。114はイモ貝製の雲珠である。115は鉄製の馬具である。全体的に錆化が激しいが、環状鏡板付轡の一部ではないだろうか。

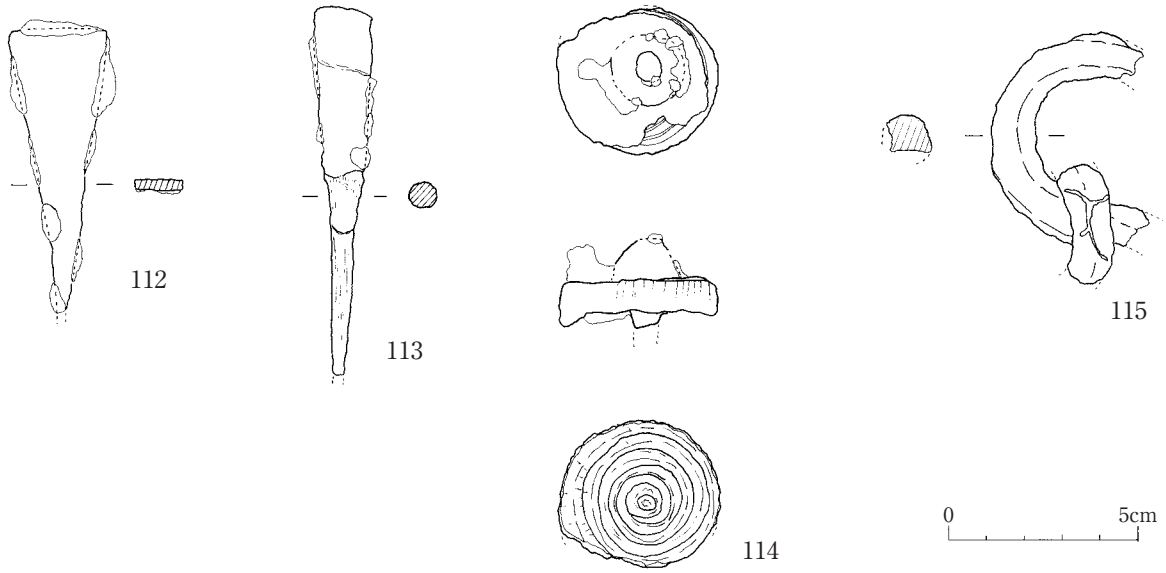
（２）２号横穴墓

①　遺構

１号と３号横穴の間に南向きに開口した。未開口の横穴墓で遺存状態も良好である。玄室は奥行2.6m、幅1.9～2.4mの長方形プランを呈する。高さは1.5mでドーム形天井である。奥壁や側壁に沿うように排水溝が施されており、羨道から前庭部へと続いている。１号横穴と同様に側壁や奥壁にはU字形鋤先痕のほか、ニードル状の刺突痕が施されている。玄室内に多くの礫を持ち込んでおり礫床を形成したと考えられるが、礫は玄室の右半分に集中しており、主に頭位を東側にして埋葬が行われた可能性がある。人骨も遺存しており、



図版22　比良１号横穴墓と出土遺物



図版23　比良１号横穴墓出土遺物

少なくとも８体以上の埋葬があったと推測される。閉塞には人頭大の礫が使用されている。

②　玄室出土遺物

116～123、125は須恵器の杯蓋である。116は口径12.6cm、器高3.3cmを計る。口縁部先端付近で外反する。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／４程度である。117は口径11.4cm、器高4.1cmを計る。天井部からなだらかに傾斜し、口縁部先端で角度を変えて立ち上がる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／６程度である。118は口径9.8cm、器高3.2cmを計る。天井部からなだらかに傾斜し、口縁部先端で急に角度を変える。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／３程度である。119は口径12.3cm、器高4.4cmを計る。天井部からなだらかに傾斜しそのまま口縁部へと至る。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／５程度である。120は口径11.5cm、器高3.8cmを計る。天井部からなだらかに傾斜し、口縁部で角度を変えて先端へと至る。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／６程度である。121は口径11.5cm、器高4.1cmを計る。天井部からなだらかに傾斜し、口縁部で角度を変えて先端へと至る。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／５程度である。122は口径11.8cm、器高3.7cmを計る。天井部からなだらかに傾斜しそのまま口縁部へと至る。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／５程度である。123は口径11.7cm、器高3.4cmを計る。天井部からなだらかに傾斜し、口縁部でわずかに角度を変えて先端へと至る。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／６以下である。125は口径13cm、推定器高3.5cmを計る。天井部はやや平坦気味で、体部なかほどで角度を変えて口縁部へと至る。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／５程度で、体部にはヘラ記号が施される。124、126～142、145～147は須恵器の杯身である。124は口径10.5cm、器高

3.7cmを計る。底部からなだらかに受部へと至る。口縁部は短く内傾し、先端は鋭くおさめる。回転ヘラケズリは全体の１／５程度である。126は口径11.2cm、器高3.9cmを計る。底部はやや平底気味で、口縁部は短く強く内傾し先端は丸くおさめる。回転ヘラケズリは全体の１／５程度である。127は口径13.2cm、器高3.9cmを計る。焼歪みのため左右非対称だが、底部はやや平底を呈す。口縁部は短く強く内傾し、先端は丸くおさめる。128は口径9.2cm、器高3.2cmを計る。底部からなだらかに受部へと至り、口縁部は短く内傾しながら立ち上がる。回転ヘラケズリは全体の１／２に及ぶ。129は口径10cm、器高3.5cmを計る。底部は平底気味で、ヘラ記号が施される。口縁部は短く強く内傾し、先端を鋭くおさめる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／３程度である。130は口径10.8cm、器高3.7cmを計る。底部は平底気味を呈し、受部と口縁部との幅が狭い。口縁部は内傾しながら立ち上がる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／３である。131は口径11.2cm、器高4.3cmを計る。底部は丸底でなだらかに受部へと至る。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／２に及ぶ。132は口径10.8cm、器高3.8cmを計る。底部は丸底で、なだらかに受部へと至る。口縁部は内傾し、先端は直立気味に立ち上がり丸くおさめる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／３である。133は口径10.7cm、器高４cmを計る。底部は丸底でなだらかに受部へと至る。口縁部はやや内傾しながら立ち上がり先端を鋭くおさめる。体部にはヘラ記号が施される。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／３である。134は口径11.6cm、器高3.8cmを計る。底部はやや平底気味だが体部との境は明瞭ではない。口縁部は短くやや内傾気味に立ち上がり先端は丸くおさめる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／２に及ぶ。135は口径10.9cm、器高3.5cmを計る。底部は丸底でなだらかに受部へと至る。口縁部は短く強く内傾するが先端付近で角度を変えて立ち上がる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／３である。136は口径10.9cm、器高3.6cmを計る。底部は丸底でなだらかに受部へと至る。口縁部はやや内傾気味に立ち上がり先端を鋭くおさめる。137は口径8.7cm、器高３cmを計る。底部は平底で体部との境が明瞭である。口縁部は短く内傾しながら立ち上がり先端は丸くおさめる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／５である。138は口径9.9cm、器高３cmを計る。底部は平底で体部との境が明瞭である。口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。底部付近にヘラ記号が施される。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／４である。139は口径10cm、器高3.2cmを計る。底部は丸底でなだらかに受部へと至る。体部にはヘラ記号が施される。口縁部は内傾しながら立ち上がる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／５程度である。140は口径12cm、器高4.1cmを計る。底部は丸底だが体部で若干角度を変えて受部へと至る。口縁部は内傾しながら立ち上がり先端付近で角度を変えて直立気味となる。先端は鋭くおさめる。体部にヘラ記号が施され、回転ヘラケズリの範囲は全体の１／２に及ぶ。141は口径10.7cm、器高3.6cmを計る。底部は平底だが体部との境はあまりはっきりしない。口縁部は内傾気味に立ち上がり先端付近で角度を変えて直立気味となる。回転ヘラケズリの範囲は１／３である。142は口径10.4cm、器高3.6cmを計る。底部は平底で体部との境が明瞭である。口縁部は短く内傾しながら立ち上がり、先端を丸くおさめる。145は口径10.8cm、器高3.5cmを計る。底部は丸底でなだらかに口縁部へと至る。口縁部は短く強く内傾しながら立ち上がり先端を鋭くおさめる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／３である。146は口径15.8cm、器高５cmを計る大型品である。底部は丸底でなだらかに受部へと至る。口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。底部にはヘラ記号が施される。回転ヘラケズ

リの範囲は全体の１／３である。147は口径10.3cm、器高3.7cmを計る。底部は平底で体部との境が明瞭である。口縁部は内傾しながら立ち上がる。底部付近にヘラ記号が施される。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／４である。143は宝珠形のツマミのついた須恵器坏蓋である。口径9.3cm、器高3.3cmを計る。天井部から直線的に受部へと至り、口縁部は短くわずかに内傾しながら立ち上がる。144は受部のない須恵器坏である。底部は平底で体部との境は明瞭である。口縁部は外傾しながら立ち上がる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／６である。

148から152は方頭形の鉄鏃である。いずれも欠損しており全長は不明である。148は鏃身長6.3cm、鏃身幅2.8cmを計る。茎部には有機質の痕跡が残っている。149と150はいずれも鏃身部分が欠損し銹化が激しい。151は鏃身長5.3cm、鏃身幅3.5cmで茎部に有機質の痕跡が残っている。152は鏃身長5.5cm、鏃身幅2.6cmで茎部に有機質の痕跡が残っている。153と154は圭頭形の鉄鏃である。153は銹化が激しいがほぼ全形が残っている。全長10.2cm、鏃身長6.8cm、鏃身幅３cmを計る。茎部に有機質の痕跡が一部残る。154もほぼ全形が残っている。全長11.5cm、鏃身長5.9cm、鏃身幅2.7cmを計る。鏃身中央には逆三角形の孔が施され、頸部には有機質の痕跡が残る。155は逆刺のある柳葉形の鉄鏃で頸部が長頸化している。156から159は刀子である。いずれも銹化が激しく欠損している。159は刀身部分はほぼ残存しており刀身長11cmを計る。160から170は耳環である。いずれも銅芯で161と162は金箔張でとくに162は遺存状態が良好である。他は銹化が激しいが163は金箔張、167と169は銀箔張の可能性が高い。

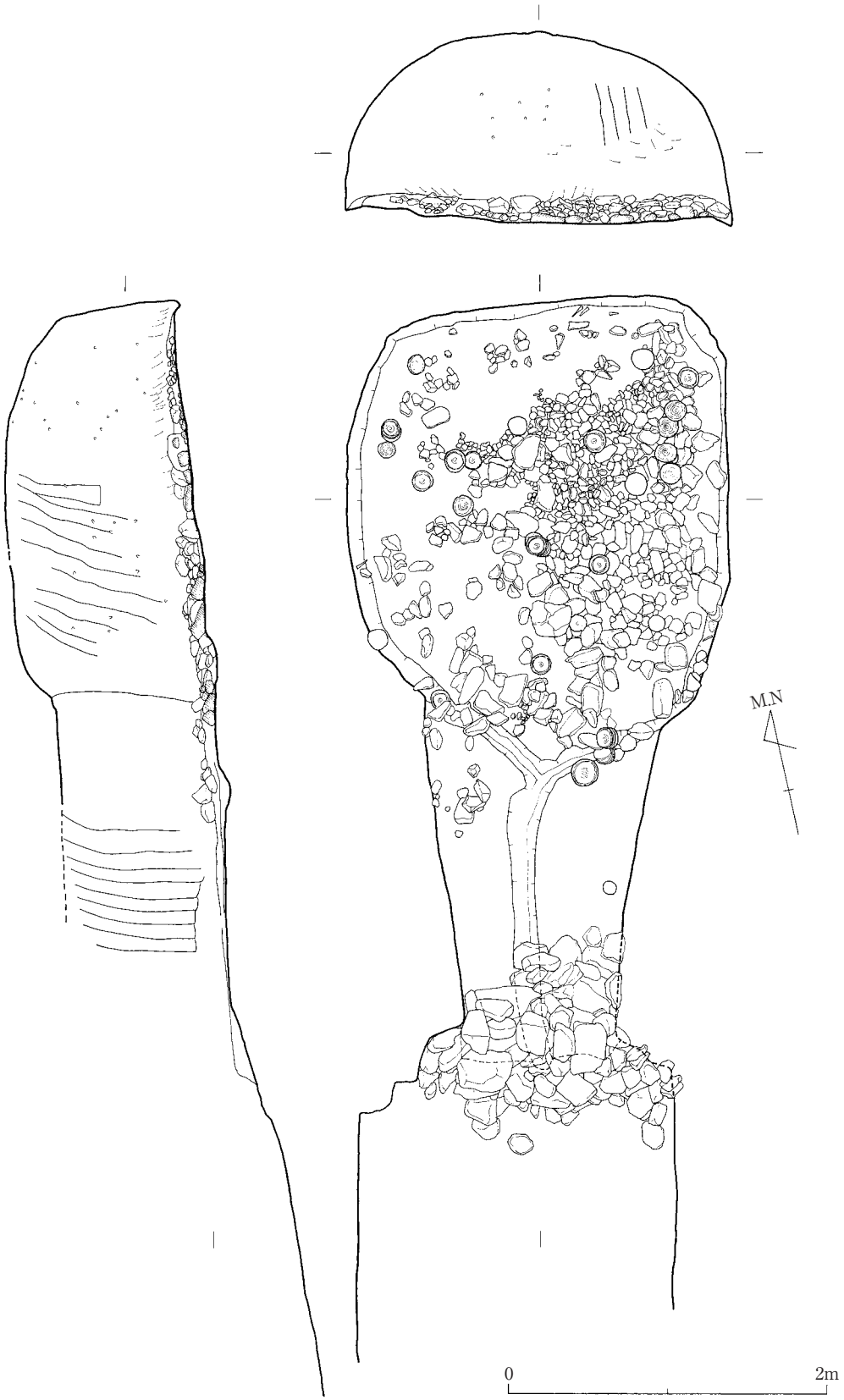
③墓道出土遺物

171は須恵器の横瓶で胴部は俵型を呈している。復元口径は12㎝、復元胴部径32㎝を計る。口縁部は短くやや外反しながら立ち上がり先端部を肥厚させる。外面には格子タタキを施し、内面には同心円状の当て具痕が残る。172は須恵器の坏である。口径10.4㎝、器高3.9㎝を計る。全体的に摩滅しているが内外面とも回転ナデだろう。焼成は不良で軟弱である。173は須恵器の高坏である。口径10.4㎝で器高6.8㎝を計る。内外面とも回転ナデを施し、体部の下１／４程まで回転ヘラケズリを施している。174は長頸壺の頸部か。復元頸部径は4.7㎝を計る。内外面とも回転ナデだが、内面の頸部より下部では斜め方向のナデが認められる。175はハソウか高坏の口縁部と思われる。内外面とも回転ナデを施し、屈曲部には浅い沈線が施されている。177は須恵器の堤瓶の胴部片である。復元胴部径は17.7㎝で外面にはカキ目が施され、内面は回転ナデ調整である。この提瓶は墓道および玄室内から破片が見つかっており、埋葬時の破砕行為が想定できる。

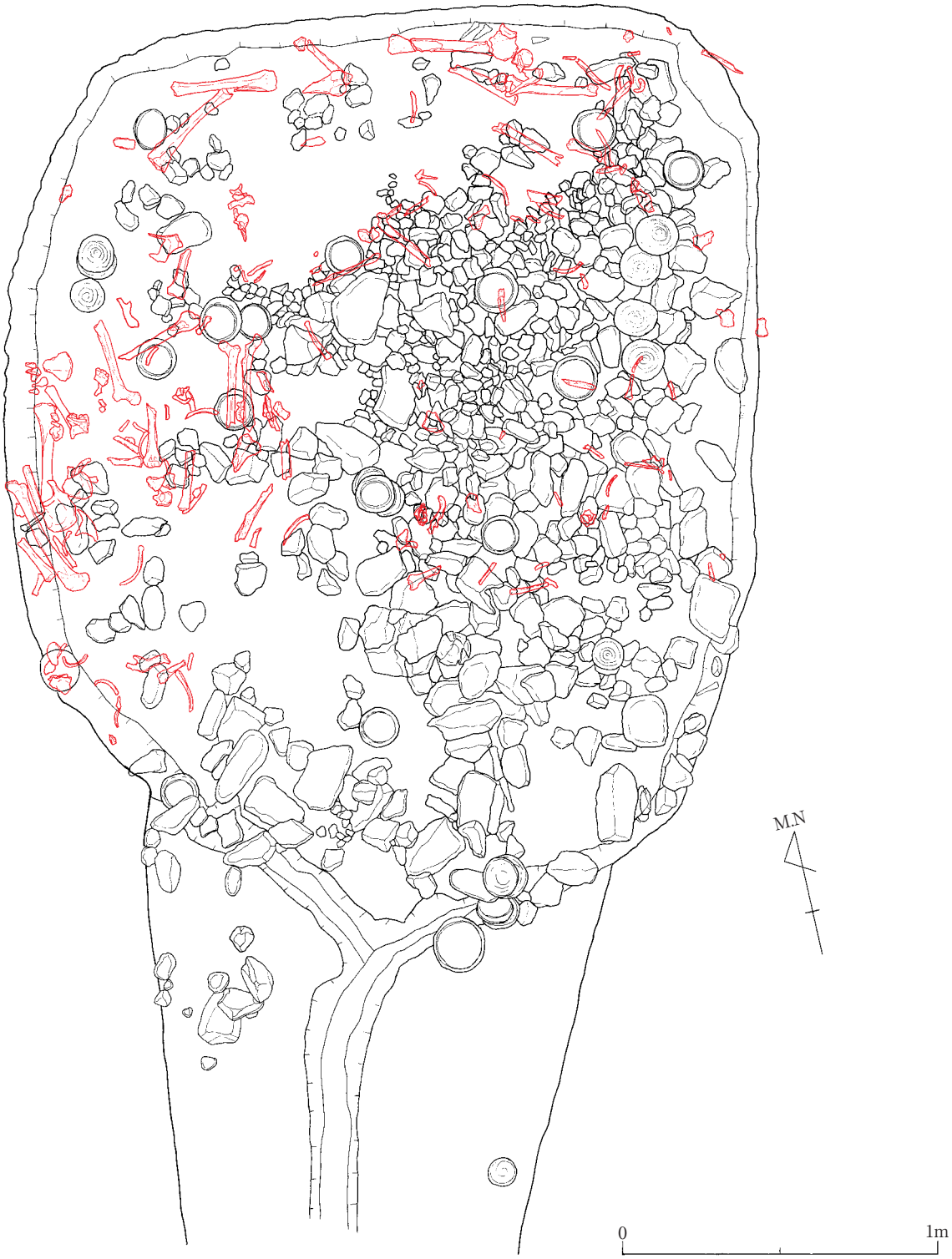
（３）３号横穴墓

①　遺構

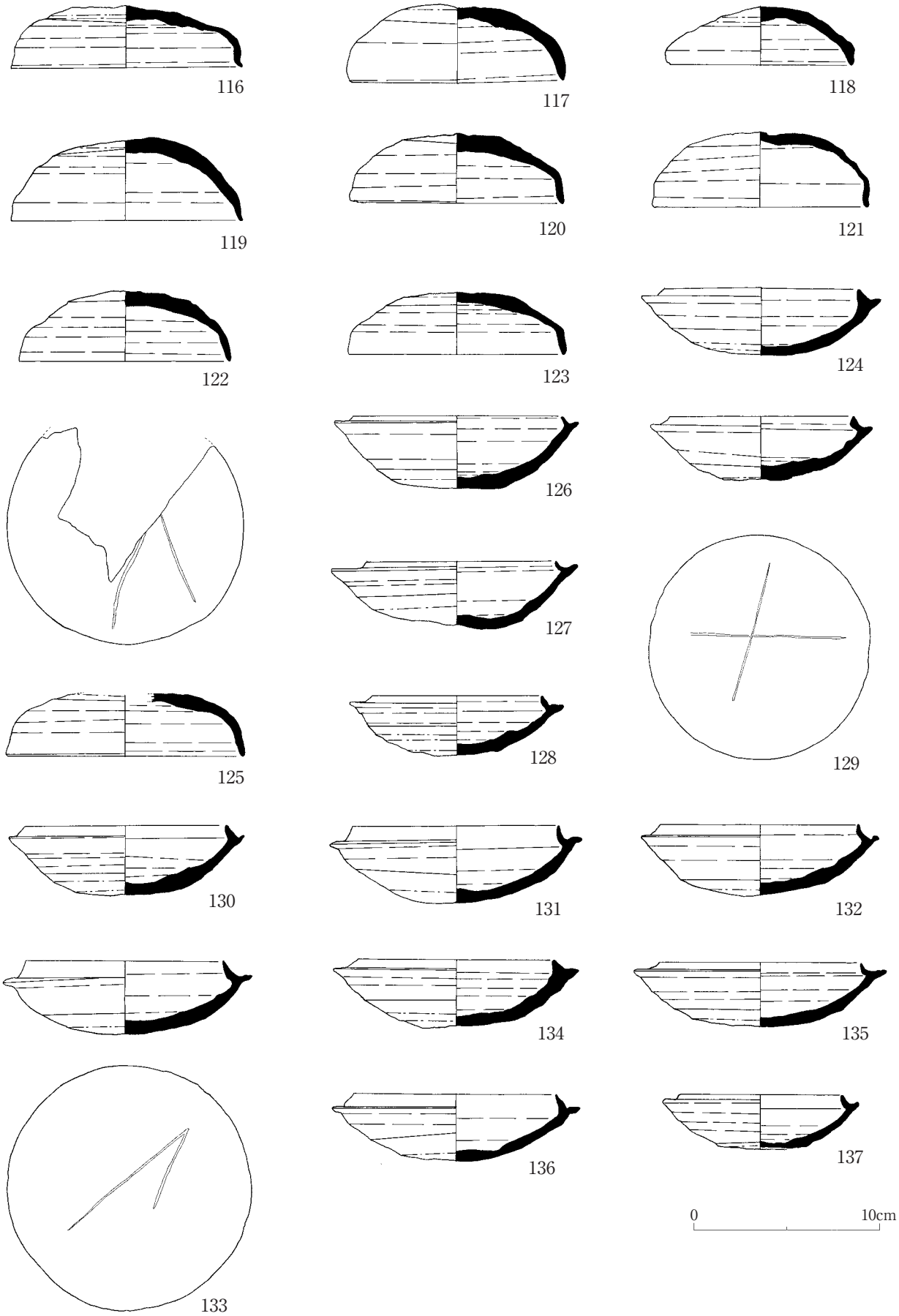
調査区の最も西側で検出された。南西向きに開口している。玄室は奥行き2.4m、幅1.4～2.4mの不定形プランを呈する。高さは１mで平天井に近い。右側壁は0.7～0.8m程の幅で一段高くなった箇所があり、あたかも死床を造りつけたようになっているが築造当初のものか、追葬時のものか判然としない。奥壁から左側壁に沿うように排水溝が設置されており、そのまま羨道左側を通り前庭部へと至る。玄室内には左半分を中心に拳大から小児



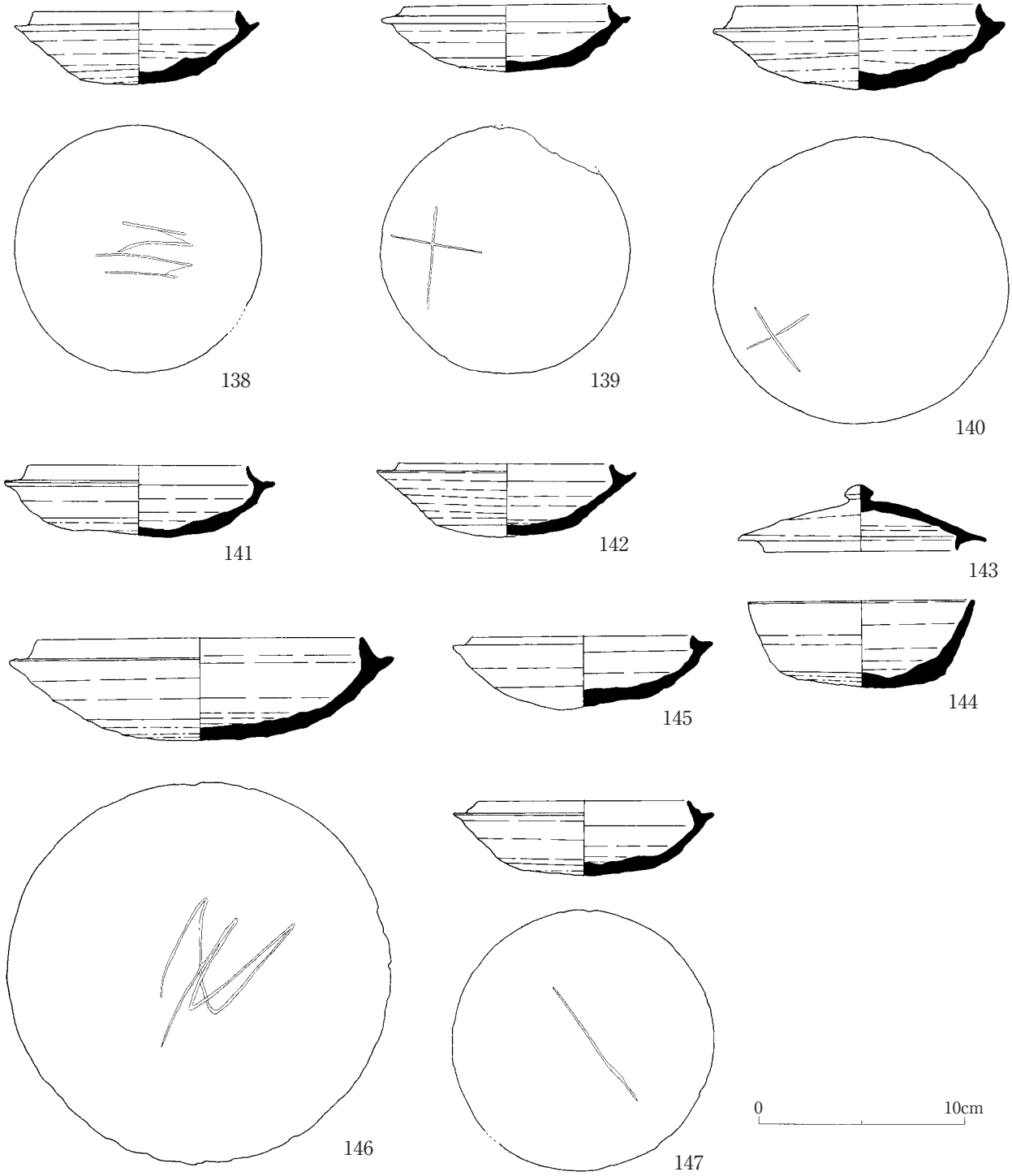
図版24　比良 2 号横穴墓実測図



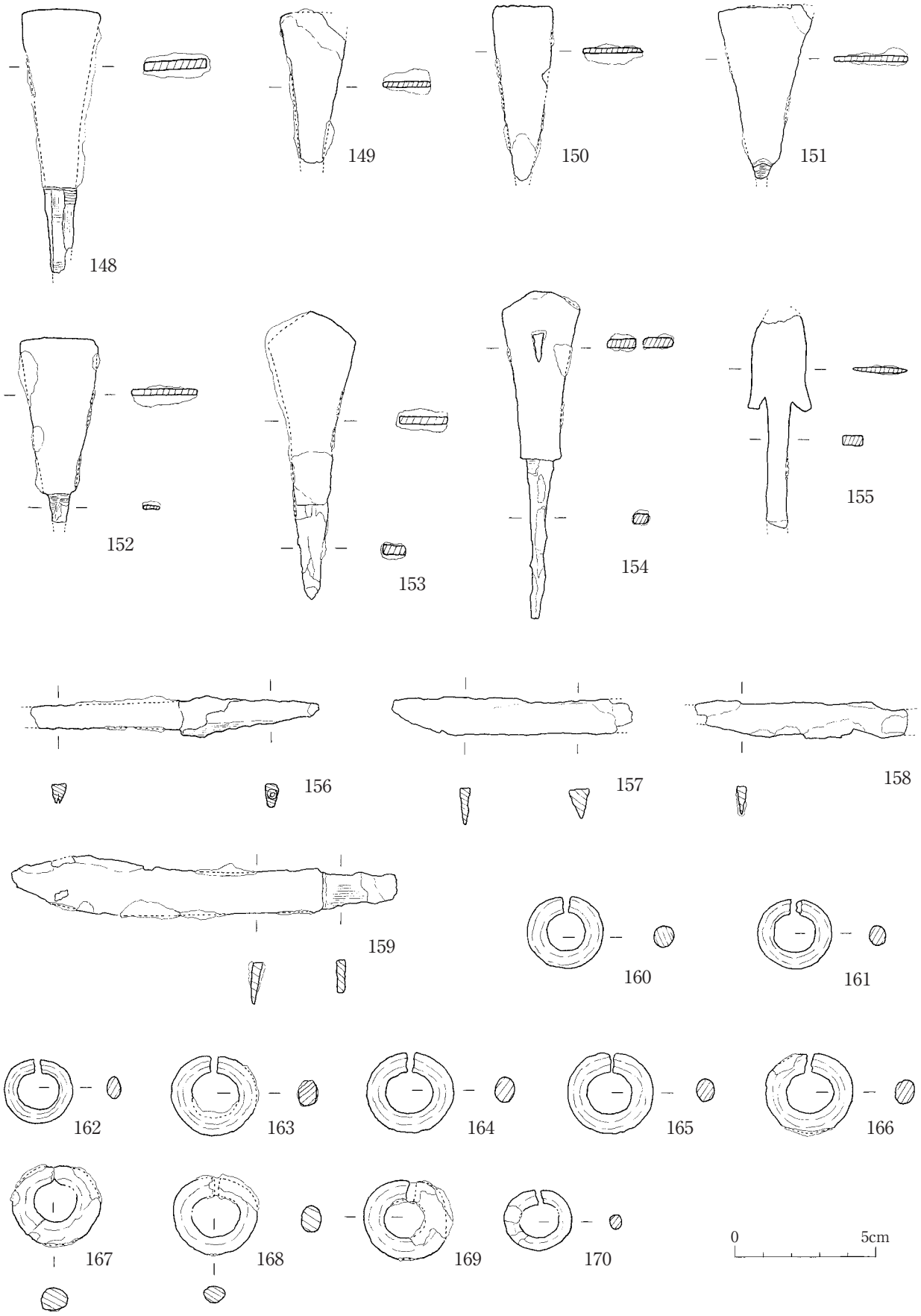
図版25　比良２号横穴墓と人骨



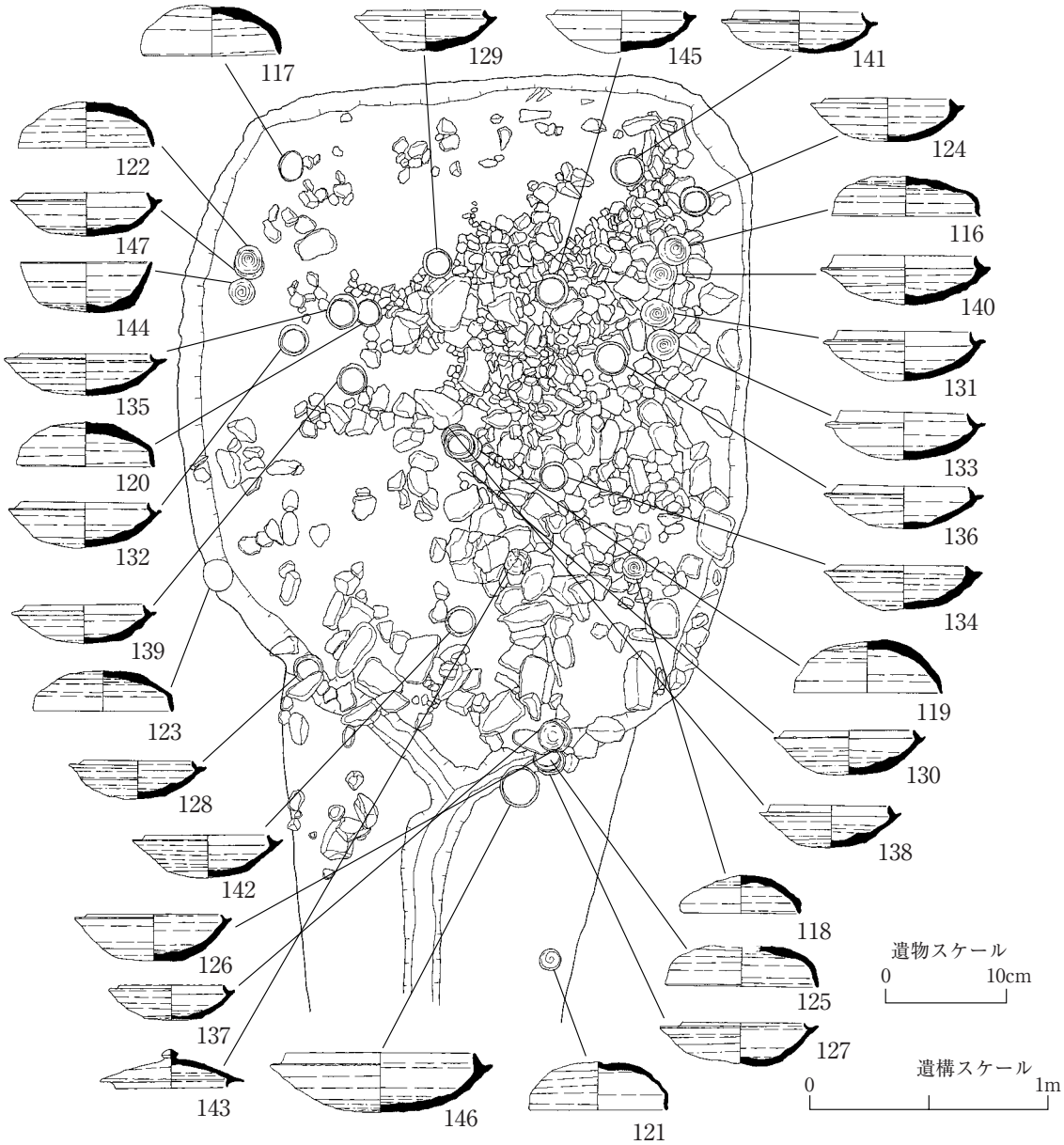
図版26　比良 2 号横穴墓出土遺物①



図版27　比良 2 号横穴墓出土遺物②



図版28　比良２号横穴墓出土遺物③



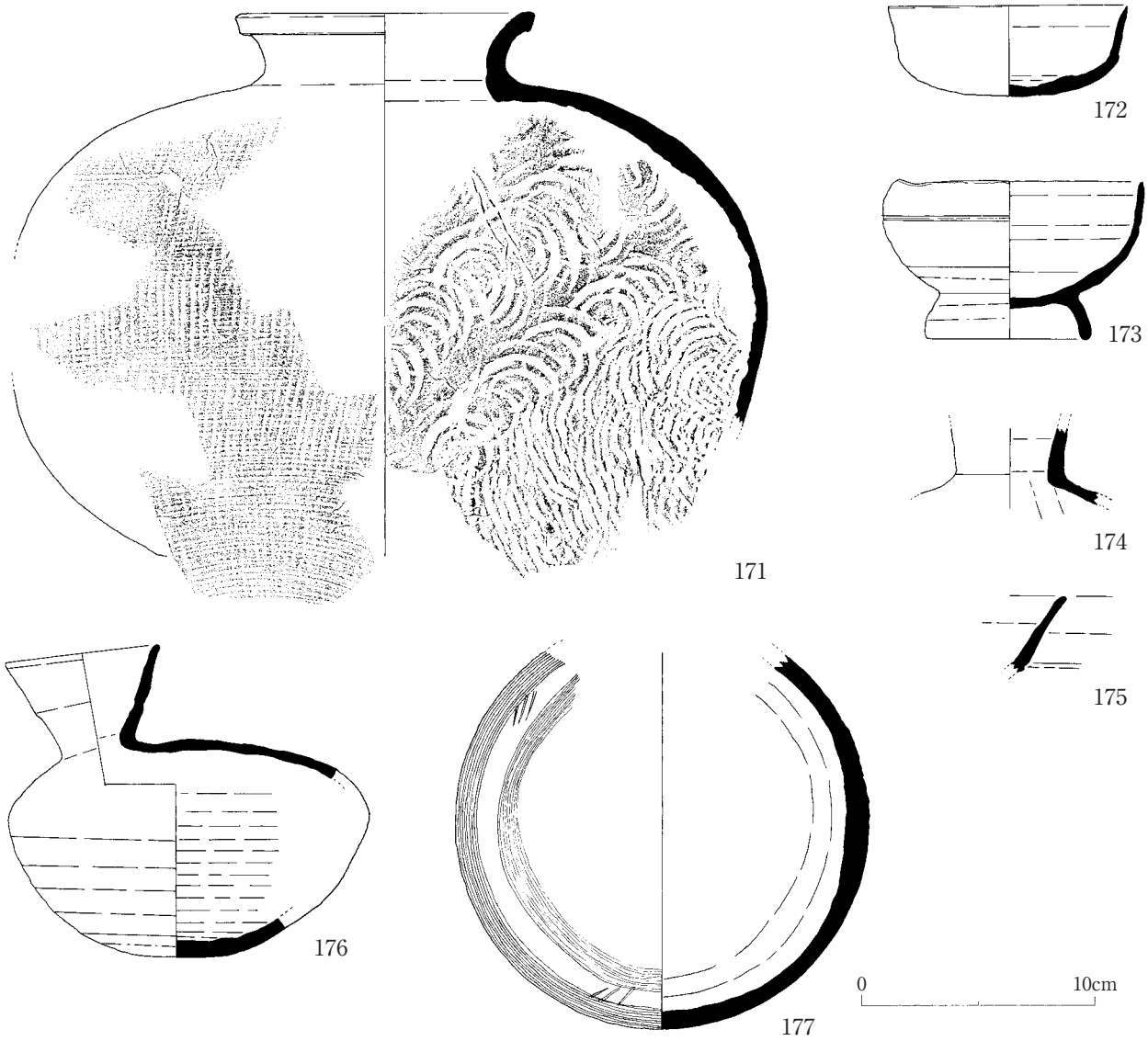
図版29　比良２号横穴墓遺物出土状況

人頭大程度の礫が持ち込まれ礫床を形成している。人骨は遺存していないが埋葬頭位は主軸と同じ向きであった可能性が高い。１号や２号に比べると粗雑な造りで、壁面調整も不明瞭である。

②　遺物

須恵器および鉄鏃を検出した。

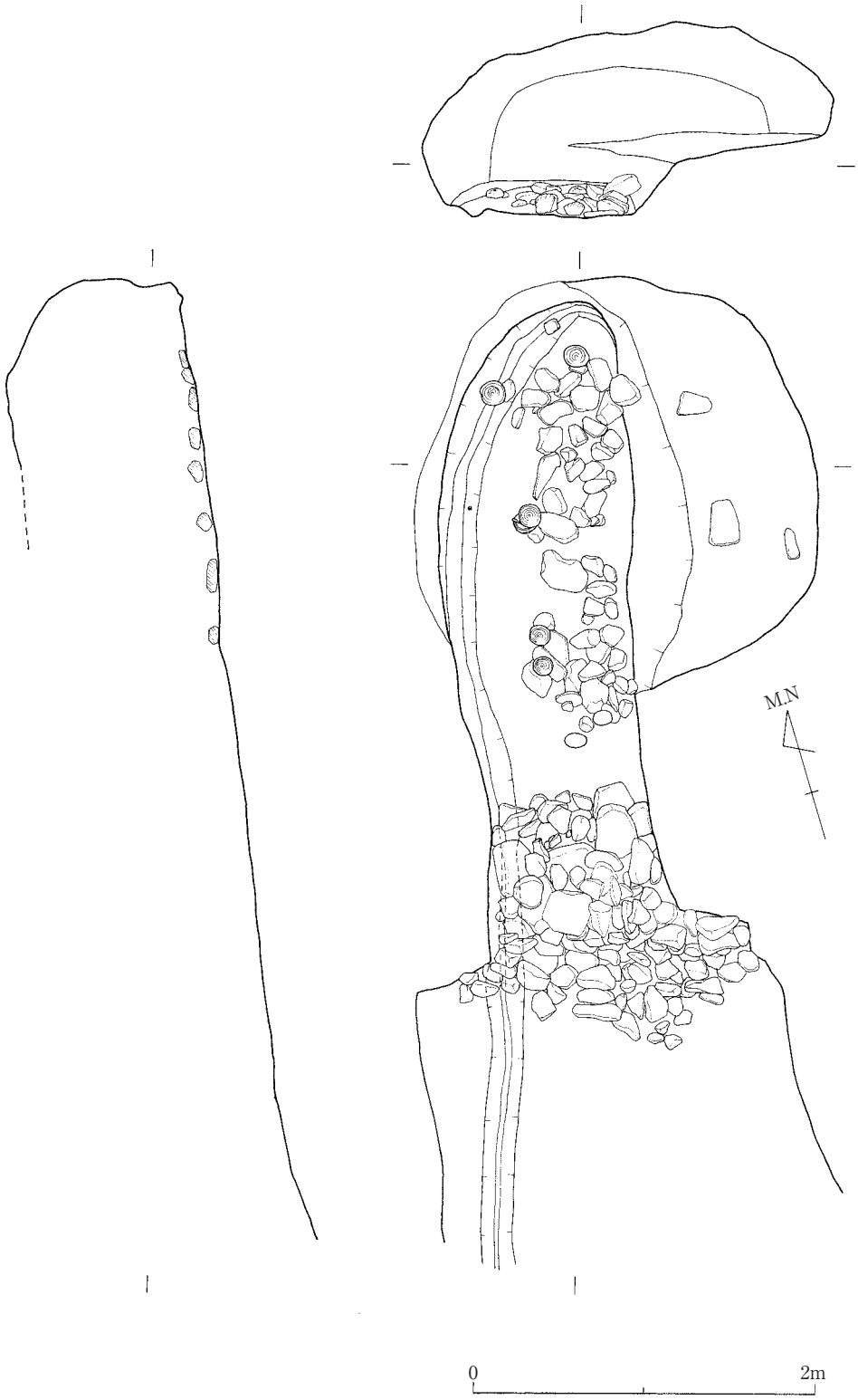
178から182は須恵器の坏蓋である。178は口径12.1cmで器高は4.4cmを計る。天井部から体部にかけてなだらかに傾斜し、口縁部で角度を変えて先端へと至る。回転ヘラケズリの範囲は全体の２／５程度である。179は口径12.1cmで器高は4.1cmを計る。178と同様に体部から口縁部で角度を変える。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／３程度である。180は口径12cmで器高3.8cmを計る。体部から口縁にかけて角度を変えて先端へと至る。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／５程度である。181は口径11.8cmで器高は3.4cmを計る。天井部からなだらかに傾斜しそのまま口縁先端へと至る。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／３



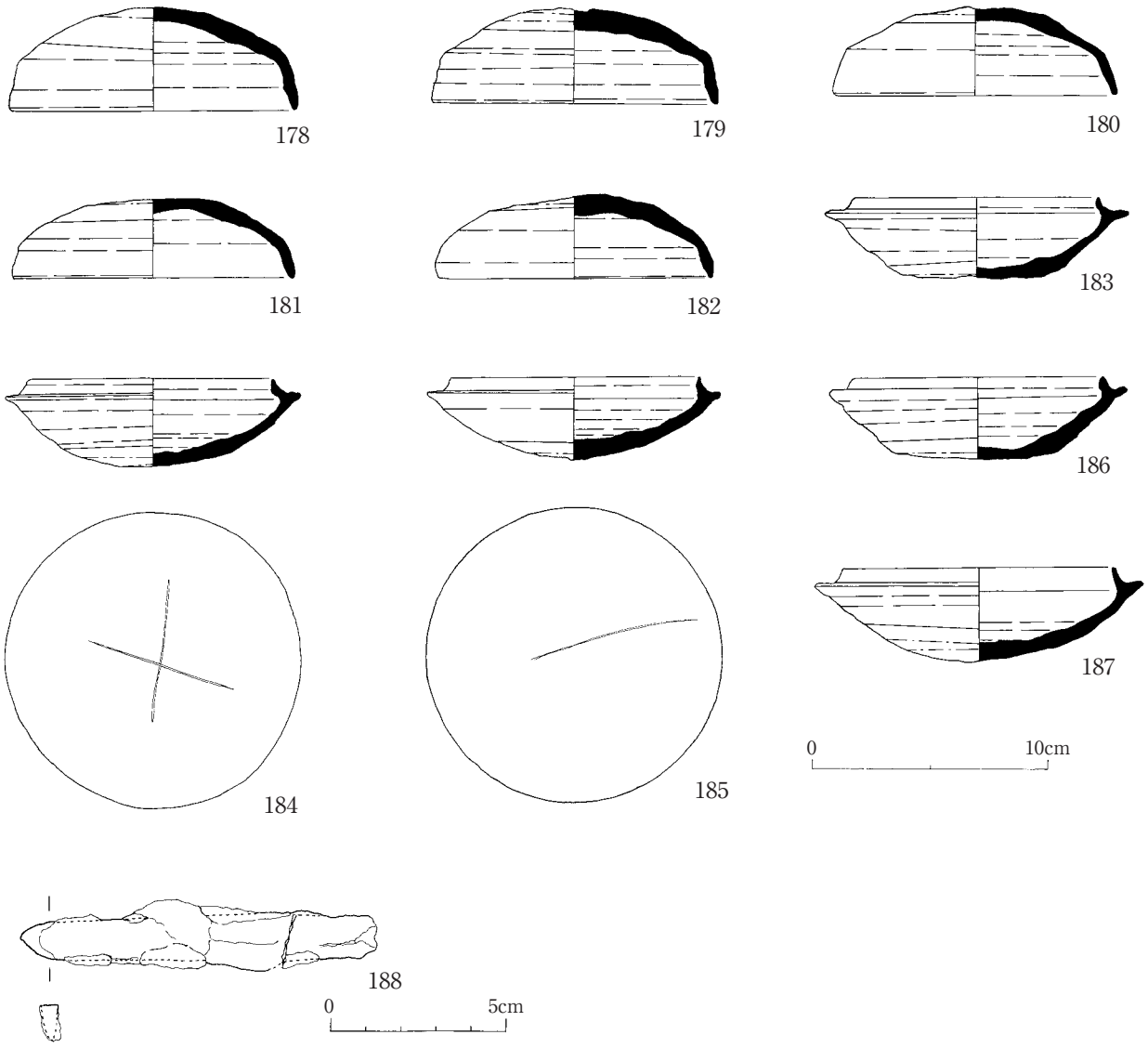
図版30　比良２号横穴墓墓道出土遺物

程度である。182は口径11.7cmで器高は3.6cmを計る。天井部からなだらかに口縁部へと至り先端はやや内傾気味となる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／５程度である。183から187は須恵器の坏身である。183は口径10.4cmで器高は3.5cmを計る。底部は平底で、口縁部は内傾しながら立ち上がる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／４程度である。184は口径10.4cmで器高は3.8cmを計る。口縁部は内傾しながら立ち上がり、内面はやや張り出す。底面には×印のヘラ記号が施されている。回転ヘラケズリは全体の２／５程度である。185は口径10.7cmで器高は3.6cmを計る。口縁部はやや内傾し先端を鋭く作る。底面にはヘラ記号を施す。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／４程度である。

186は口径10.6cmで器高は3.6cmを計る。底部は平底で口縁部は短く内傾する。回転ヘラる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／５程度である。181は口径11.8cmで器高は3.4cmを計る。天井部からなだらかに傾斜しそのまま口縁先端へと至る。回転ヘラケズリの範囲は



図版31　比良 3 号横穴墓実測図



図版32　比良 3 号横穴墓出土遺物

全体の１／３程度である。180は口径11.7㎝で器高は3.6㎝を計る。天井部からなだらかに口縁部へと至り先端はやや内傾気味となる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／５程度である。183から187は須恵器の坏身である。183は口径10.4㎝で器高は3.5㎝を計る。底部は平底で、口縁部は内傾しながら立ち上がる。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／４程度である。184は口径10.4㎝で器高は3.8㎝を計る。口縁部は内傾しながら立ち上がり、内面はやや張り出す。底面には×印のヘラ記号が施されている。回転ヘラケズリは全体の２／５程度である。185は口径10.7㎝で器高は3.6㎝を計る。口縁部はやや内傾し先端を鋭く作る。底面にはヘラ記号を施す。回転ヘラケズリの範囲は全体の１／４程度である。

186は口径10.6㎝で器高は3.6㎝を計る。底部は平底で口縁部は短く内傾する。回転ヘラケズリは全体の１／３程度である。187は口径10.6㎝で器高は4.1㎝を計る。口縁部はやや内傾気味に立ち上がり器壁は薄く作られる。回転ヘラケズリは全体の１／２程度である。

188は方頭形の鉄鏃である。

第５節　小結

比良横穴墓群では３基の横穴墓を検出した。このうち１号横穴墓は玄室が半壊状態での検出であったが、ほかの２基は墓道および玄室が良好な状態で遺存していた。このうち２号横穴墓では５体分の人骨と33個もの須恵器が検出された。１号墓と３号墓については人骨は検出できなかったが、玄室に残された遺物の配置状況から追葬行為があったと思われる。今回調査した３基の横穴墓はそれぞれ10m以内の近接した位置にあり、一つの単位群として構成されていた可能性が高い。このような場合１基ずつ造墓の時期差があるのが基本的なあり方とされる。それぞれの築造時期については出土須恵器から１号墓が須恵邑編年のTK209型式段階から隼上りⅠ型式併行期に、２号墓は多くの須恵器が出土し最古のものはTK209型式段階まで遡るが、多くは隼上がりⅡ型式に対応する。３号墓は隼上がりⅡ型式併行期に対応し、比較的短期間の使用であった可能性が高い。このことから１号→２号→３号の順に築造され、２号墓については埋葬人骨数が示すように長期間にわたり使用されたと思われる。

表６　比良横穴墓群土器観察表

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
107	1号横穴	須恵器	坏身	口縁～体部	50%	口径（11.5cm）	口縁部は内傾しながら立ち上がり先端を鋭くおさめる。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデ。	灰10Y 5 /	灰10Y 6 /	精良 良好	
108	1号横穴	須恵器	坏身	全形	70%	口径10.3cm 器高3.8cm	口縁部は内傾しながら立ち上がる。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰白N 7 /	灰N 6 /	精良 良好	
116	2号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径12.6cm 器高3.3cm	口縁部先端が外反する。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	暗灰N 3 /～ 5 /	灰 4 /～ 5 /	精良 良好	
117	2号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径11.4cm 器高4.1cm	天井部からなだらかに体部へ至り口縁部で角度を変える	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	青灰 5 B 6 /～ 5 /	青灰 5 B 6 /～ 5 /	精良 普通	
118	2号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径9.8cm 器高3.2cm	天井部からなだらかに体部へ至り口縁部で角度を変える	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	灰N 5 /～ 6 /	灰N 6 /	精良 良好	
119	2号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径12.3cm 器高4.4cm	天井部からなだらかに体部へ至り口縁部で角度を変える	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	灰白2.5GY 灰白N 7 /	灰白 5 GY 8 / 1	精良 やや不良	
120	2号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径11.5cm 器高3.8cm	天井部からなだらかに体部へ至り口縁部で角度を変える	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	灰N 5 /～ 6 /	灰N 4 /～ 5 /	精良 良好	
121	2号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径11.5cm 器高4.1cm	天井部からなだらかに体部へ至り口縁部で角度を変える	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	青灰 5 BG 6 / 1 ～ 5 / 1	青灰 5 BG 6 / 1	精良 良好	
122	2号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径11.8cm 器高3.7cm	天井部からゆるやかに体部、口縁部へと至る。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	オリーブ灰 2.5GY 6 / 1	灰N 4 /～ 5 /	精良 良好	
123	2号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径11.7cm 器高3.4cm	天井部からなだらかに体部へ至り口縁部で角度を変える	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	灰N 6 /	灰N 6 /	精良 良好	
124	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.5cm 器高3.7cm	口縁部はやや内傾する。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 5 /	灰N 5 /	精良 良好	
125	2号横穴	須恵器	坏蓋	全形	80%	口径12.9cm	天井部からなだらかに体部へ至り口縁部で角度を変える	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	灰10Y 6 /	灰10Y 6 /	精良 良好	
126	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径11.2cm 器高3.9cm	口縁部は短く内傾しながら立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰白N 8 /	灰白N 8 /	精良 不良	
127	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径13.2cm 器高3.9cm	口縁部は短く内傾しながら立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰白N 7 /～ 6 /	灰白 7 /	やや良 やや不良	
128	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径9.2cm 器高3.2cm	口縁部は短く内傾しながら立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 6 /～ 5 /	青灰 5 B 5 / 1	精良 良好	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
129	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10cm 器高3.5cm	口縁部は短く内傾しながら立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 5 /	灰N 5 /	精良 良好	
130	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.8cm 器高3.7cm	口縁は内傾する。底面はやや平底気味。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰白2.5GY8/1 灰N 6 /	灰白2.5GY 8 / 1	精良 普通	
131	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径11.2cm 器高4.3cm	口縁部は短く内傾・内湾しながら立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 5 /～ 6 /	灰N 5 /～ 6 /	精良 普通	
132	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.8cm 器高3.8cm	口縁部は短く内傾し先端部で角度を変えて立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 5 /～ 4 /	灰N 5 /～ 4 /	精良 普通	
133	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.7cm 器高 4 cm	口縁部は内傾して立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 6 /～ 5 /	灰N 6 /～ 5 /	精良 普通	
134	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径11.6cm 器高3.8cm	口縁が短くやや内傾気味に立ち上がる。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰白N 7 / 灰N 6 /	明オリーブ灰 2.5GY7/1	精良 普通	
135	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.9cm 器高3.5cm	口縁部は短く内傾し先端部で角度を変えて立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 4 / 灰N 7 /	灰N 6 /～ 5 /	精良 普通	
136	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.9cm 器高3.6cm	口縁部は内傾して立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 5 /～ 6 /	灰N 5 /～ 6 /	精良 普通	
137	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径8.7cm 器高 3 cm	口縁部は短く内傾しながら立ち上がる	外面は回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰 5 Y 6 / 1 灰オリーブ 6 / 2	灰N 6 /	精良 良好	
138	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径9.9cm 器高3.6cm	口縁は短く内傾する。底面はやや平底気味。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 4 /～ 5 /	灰N 4 /～ 5 /	精良 良好	
139	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10cm 器高3.2cm	口縁部は内傾して立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	青灰 5 B 5 / 1	青灰 5 B 6 / 1	精良 普通	
140	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径12cm 器高4.1cm	口縁部は内傾して立ち上がる。ヘラ記号あり	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰白N 8 / 灰N 5 /	灰N 7 /	精良 普通	
141	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.7cm 器高3.6cm	口縁部は内傾し先端部で角度を変えて立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 5 /	灰N 5 /	精良 良好	
142	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.4cm 器高3.6cm	口縁部は内傾し先端部で角度を変えて立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰白5Y 8 / 1	灰白 5 Y 8 / 1	精良 やや不良	
143	2号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径9.3cm 器高3.3cm	天井部に宝珠形のつまみがつく	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	灰オリーブ 5 GY 7 / 1	灰白 5 GY 8 / 1	精良 やや不良	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
144	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.9cm 器高4.3cm	受部がなく平底の底部からやや外傾しながら口縁部が立ち上がる。	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	灰N 6 / にぶい赤褐 5 YR 5 / 3	灰白N 7 /	精良 良好	
145	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.8cm 器高3.5cm	口縁は短く強く内傾する	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	紫灰 5 R 6 / 1 明赤灰 5 R 4 / 1	明赤灰 5 R 4 / 1	精良 普通	
146	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径15.8cm 器高5cm	口縁部はやや内傾する。底面にヘラ記号あり	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 6 /	灰N 5 /	精良 良好	
147	2号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.3cm 器高3.7cm	口縁部は強く内傾する。へら記号あり	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N 6 /	灰N 6 /	精良 良好	
171	2号横穴 墓道	須恵器	横瓶	口縁～ 体部	60%	口径（12cm） 胴部径（32cm）	胴部は俵型を呈する。		灰N 6 / 暗灰N 3 /	灰N 6 / 暗灰N 3 /	やや良 良好	
172	2号横穴 墓道	須恵器	坏	全形	60%	口径10.4cm 器高3.9cm	口縁部先端を鋭くおさめる。	内外面とも回転ナデ。摩滅激しい。	灰白7.5Y 8 / 1	灰白7.5Y 8 / 1	精良 不良	
173	2号横穴 墓道	須恵器		全形	90%	口径10.4cm 器高6.8cm	胴部は丸みを帯び口縁部は直立する。	内外面とも回転ナデ。胴部下部に回転ヘラケズリ。	オリーブ灰 5 GY6/1	淡黄7.5Y 8 / 3	普通 不良	
174	2号横穴 墓道	須恵器	長頸壺	頸部	10% 以下		頸部はくの字状に強く屈曲する。	内外面とも回転ナデ。内面の一部に斜め方向ナデ。	オリーブ黄 6 / 4 5 Y	緑灰 5 G 6 / 1	やや良 普通	
175	2号横穴 墓道	須恵器	高坏	口縁部	10% 以下		外開き。	内外面とも回転ナデ。	緑灰 5 G 6 / 1	灰白7.5Y 8 / 2	やや良 普通	
176	2号横穴 墓道	須恵器						内外面とも回転ナデ。	淡黄 5 Y 8 / 3	灰白N 7 /	やや祖 やや不良	
177	2号横穴 墓道	須恵器	提瓶	胴部	30%	胴部径（17.7cm）			灰N 6 /	明オリーブ 2.5GY7/1	普通 やや不良	
178	3号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径12.1cm 器高4.4cm	天井部からなだらかに体部へ至り口縁部で角度を変える	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	灰白7.5Y7/1	灰白7.5Y7/1	精良 良好	
179	3号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径12.1cm 器高4.1cm	天井部からなだらかに体部へ至り口縁部で角度を変える	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4 灰黄2.5Y7/2	にぶい橙 7.5YR7/4	精良 やや不良	
180	3号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径12cm 器高3.8cm	天井部からなだらかに体部へ至り口縁部で角度を変える	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	灰N6/	灰N5/	精良 良好	
181	3号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径11.8cm 器高3.4cm	天井部からなだらかに口縁部に至る	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	灰N6/	灰N6/	精良 良好	

挿図番号	出土地点	種別	器種	部位	残存率	法量	調整・文様		色調		胎土焼成	備考
						（　）は復元長	形態の特徴	技法の特徴	外面	内面		
182	3号横穴	須恵器	坏蓋	全形	100%	口径11.7cm 器高3.6cm	天井部からなだらかに口縁部に至る	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと天井部に不定ナデ。	灰N 7 /	灰N 7 /	精良 良好	
183	3号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.4cm 器高3.5cm	底部は平底。口縁部は短く内傾する	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	オリーブ灰 5 GY6/1	灰N6/	精良 良好	
184	3号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.4cm 器高3.8	口縁部は強く内傾する	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰N5/	にぶい赤褐 5 YR 5 / 3	精良 良好	
185	3号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.7cm 器高3.6cm	口縁部はやや内傾気味。先端を鋭くおさめる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰10Y 5 / 1	灰N 6 /	精良 良好	
186	3号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.6cm 器高3.6cm	底部は平底。口縁部は短く内傾する	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰10Y 6 / 1	灰10Y 6 / 1	精良 良好	
187	3号横穴	須恵器	坏身	全形	100%	口径10.6cm 器高4.1cm	口縁部はやや内傾気味に立ち上がる	外面は回転ヘラケズリと回転ナデ。内面は回転ナデと底面に不定ナデ。	灰白2.5Y7/1	にぶい橙 7.5YR7/4	精良 良好	

表７　比良横穴墓群鉄器観察表

挿図番号	出土地点	名　称	法　　量	備　　考
111	１号横穴	方頭形鉄鏃	全長11.4cm／鏃身長5.9cm／鏃身幅3.3cm／鏃身厚0.5cm	透かし孔
112	１号横穴	方頭形鉄鏃	現存長7.5cm／鏃身幅2.5cm／鏃身厚0.3cm	
113	１号横穴	方頭形鉄鏃	現存長9.7cm／鏃身幅4.4cm／鏃身幅1.5cm	
114	１号横穴	イモ貝製雲珠		
115	１号横穴	環状鏡板付轡？		
148	２号横穴	方頭形鉄鏃	全長9.3cm／鏃身長6.4cm／鏃身幅2.8cm／鏃身厚0.3cm	
149	２号横穴	方頭形鉄鏃	現存長5.3cm／鏃身幅2.4cm／鏃身厚0.2cm	
150	２号横穴	方頭形鉄鏃	現存長6.2cm／鏃身幅2.1cm／鏃身厚0.2cm	
151	２号横穴	方頭形鉄鏃	現存長6.1cm／鏃身長5.4cm／鏃身幅3.3cm／鏃身厚0.2cm	
152	２号横穴	方頭形鉄鏃	現存長6.5cm／鏃身長5.5cm／鏃身幅2.7cm／鏃身厚0.2cm	
153	２号横穴	圭頭形鉄鏃	全長10.2cm／鏃身長6.9cm／鏃身幅3.1cm／鏃身厚0.3cm	
154	２号横穴	圭頭形鉄鏃	現存長11.6cm／鏃身長６cm／鏃身幅2.7cm／鏃身厚0.3cm	
155	２号横穴	柳葉形鉄鏃	現存長7.3cm／鏃身幅2.1cm／鏃身厚0.2cm	
156	２号横穴	刀子	現存長10.2cm／刀身幅0.5cm／刀身厚0.5cm	
157	２号横穴	刀子	現存長8.5cm／刀身幅1.3cm／刀身厚0.4cm	
158	２号横穴	刀子	現存長7.5cm／刀身幅1.1cm／刀身厚0.3cm	
159	２号横穴	刀子	現存長13.7cm／刀身長11cm／刀身幅２cm／刀身厚0.4cm	
188	３号横穴	刀子	現存長10.1cm／刀身長7.5cm／刀身幅1.1cm	

表８　比良横穴墓耳環計測表

挿図番号	出土地点	材　　質	直径	幅	備　考
109	１号横穴	銅芯銀箔張	３cm	0.9cm	
110	１号横穴	銅芯金箔張	1.5cm	0.3cm	
160	２号横穴	銅芯？	2.6cm	0.8cm	
161	２号横穴	銅芯金箔張	2.6cm	0.7cm	
162	２号横穴	銅芯金箔張	2.4cm	0.8cm	
163	２号横穴	銅芯金箔張	2.9cm	0.9cm	
164	２号横穴	銅芯？	３cm	0.9cm	
165	２号横穴	銅芯？	３cm	0.8cm	
166	２号横穴	銅芯？	３cm	0.8cm	
167	２号横穴	銅芯銀箔張	3.1cm	0.9cm	
168	２号横穴	銅芯？	2.9cm	0.7cm	
169	２号横穴	銅芯銀箔張	2.9cm	0.9cm	
170	２号横穴	銅芯？	2.4cm	0.5cm	

第Ⅶ章　分析

第１節　宮崎県新富町比良横穴2号墓出土の古墳時代人骨

鹿児島女子短期大学　竹中　正巳・下野真理子

はじめに

1995年8月、宮崎県新富町比良横穴2号墓が発掘調査され、古墳時代人骨が出土した。比良横穴2号墓から出土した人骨について、人類学的精査を行った結果を報告する。

人骨の所見

比良２号墓の玄室内から200片を超える人骨片が出土した。骨片に番号を付し、取り上げた。

・埋葬された人骨の数の確認

人骨の同定を行った結果、各骨における最小個体数は、胸骨が成人１体（性別不明）、左鎖骨が成人２体（内１体は男性）、左肩甲骨が成人５体、右肩甲骨が成人１体、左上腕骨が成人３体（内１体は男性）、右上腕骨が成人２体と小児1体、左橈骨が成人２体（内１体は男性）、右橈骨が成人１体、左尺骨が成人２体、右尺骨が成人３体、右寛骨が成人２体（２体とも女性）と小児１体、左大腿骨が成人３体（内女性１体）、若年～小児１体と幼児１体、右大腿骨が成人４体（内男性１体、女性１体）、若年～小児１体と幼児１体、左脛骨が成人２体（内男性１体）と小児１体、右脛骨が成人３体（内男性２体）、小児１体と幼児１体、左腓骨が成人３体、右腓骨が成人２体（内１体は男性）、左距骨が成人１体、右距骨が成人２体、左踵骨が成人５体と小児１体、右踵骨が成人２体と小児１体という結果が得られた。この結果を基に、比良横穴２号墓に埋葬された人骨の数を推測すると、少なくとも８体が埋葬されている。成人は少なくとも５体は納められたことがわかる。納められた成人の性別の内訳は、男性は２体以上、女性も２体以上は納められていることになる。未成人については、若年～小児が１体、小児が１体、幼児が１体は少なくとも納められた。

・埋葬および遺骨の取り扱い

最終埋葬の後、玄室内に人が立ち入らなければ、少なくとも、最後に埋葬された人骨のほとんどは解剖学的位置関係を保っているはずである。しかし、玄室内の骨で解剖学的位置関係を保っているものはない。したがって、最終埋葬後に玄室内に人が進入し、人骨の位置が乱されたことがわかる。解剖学的位置関係を保った骨がないことから、靱帯等が死後の腐敗により完全に離断された後に玄室内に入り、人骨を移動させている。腐敗による靱帯の完全離断には少なくとも1年近くの時間がかかると思われる。そのため、最終埋葬後、少なくとも１年程度の時間が経過した後に、玄室に立ち入ったはずである。

南九州の東半分の地域に分布する地下式横穴墓に関する近年の骨考古学的発掘成果として、最終埋葬の後の集骨や骨の移動行為がある。いずれも、７世紀前後の地下式横穴墓の例である。2002年の８月に宮崎県西都市常心原地下式横穴墓群の発掘調査が行われ、最終

埋葬後、再度、玄室を開けて３体を玄室中央に集骨している例が確認されている。また、宮崎県国富町義門寺地下式横穴墓群１号墓の発掘調査でも、最終埋葬後に再び玄室を開け、埋葬してあった２体の人骨を１箇所に集骨した例が明らかにされている。さらに、南九州の内陸部に所在する宮崎県都城市築池地下式横穴墓群2003-2号墓からも、墓使用の最終的な儀礼行為として、白骨化した人骨と副葬された平瓶とを動かすという行為が行われた可能性が考えられている。使用墓の最終儀礼として白骨化した人骨を動かしたり集骨したりするという行為は、同じ時期の九州、山陰や関東の横穴墓でも行われた儀礼行為である。

今回の比良横穴２号墓の人骨の散乱が、前述のような儀礼行為としての人骨移動によってもたらされたものである可能性も考えなければならないが、このような意図以外の目的で行われた可能性も捨てきれない。今後の検討課題の一つである。

・人骨の形質

比良横穴２号墓から出土した人骨の計測値を表１～７に示す。目立った特徴は認められない。男性成人の大腿骨に柱状形成の強い例が1例、脛骨で扁平性の認められる例がやはり男性成人に１例認められる。

四肢骨からピアソン式で推定身長が計算すると、151.1cm（成人男性：右脛骨から計算）、152.3cm（成人男性：右橈骨から計算）、157.5cm（成人男性：左上腕骨から計算）、159.7cm（成人男性：右脛骨から計算）の値が得られる。得られた４つの身長値は、異なる２～４人の成人男性の身長を推定していることになる。150cm台前半の身長は、南九州の古墳人の男性としては低い。また、160cm近くの身長は南九州の古墳人男性としては極端に高身長であるとは言えない。

おわりに

南九州から出土する古墳時代人骨は地域的な偏在が著しい。山間部（内陸部）から保存のよい人骨が大量に出土しているのに対し、宮崎平野部からは少ない。古墳時代の南九州では、高塚墳のほかに、地下式板石積石室墓、地下式横穴墓、横穴墓、土壙墓が造られたが、保存良好な人骨のほとんどは地下式横穴墓から出土したものである。

南九州から出土した古墳時代人骨は地域的な偏在が著しい。山間部（内陸部）から保存のよい人骨が大量に出土しているの対し、宮崎平野部からは少ない。松下（1990）が指摘した男性人骨の山間部と宮崎平野部における地域差は身長と頭蓋計測値に基づくものであり、頭蓋形態小変異や顔面平坦度における地域差の存在は検討されていない。また、女性においては、宮崎平野部の資料の少なさから、山間部と宮崎平野部との地域差の有無を確認できない状態である。今後、宮崎平野部から出土する古墳時代人骨の増加を待って、より詳細な地域差の検討が行われることを期待したい。

比良２号横穴墓から出土した古墳時代人骨は、宮崎平野部の横穴から出土した人骨であり、南九州の古墳人の形質の地域差や、地下式横穴と横穴とを営んだ人々の形質差を考えていく上で貴重な出土例である。今後の宮崎平野部の古墳時代人骨の出土数がさらに増加することが望まれる。

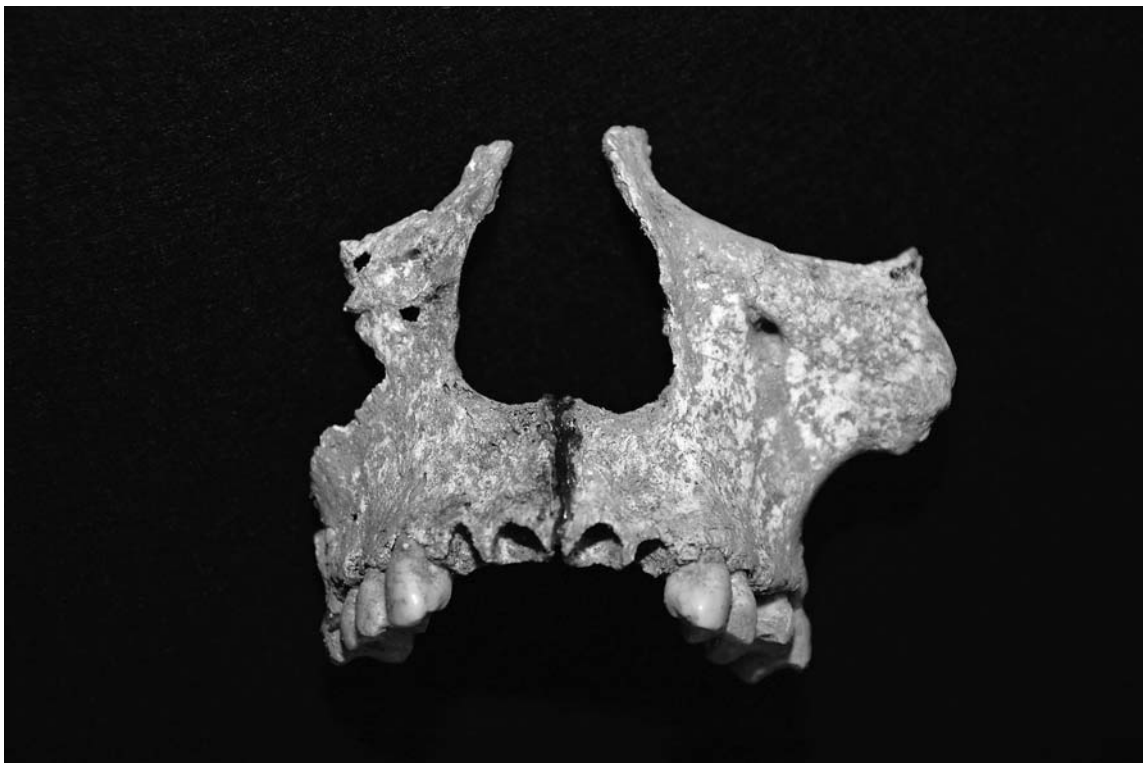


写真1．宮崎県新富町比良2号横穴墓出土成人男性人骨の上顎骨

写真2. 宮崎県新富町比良2号横穴墓出土成人男性人骨の大腿骨

写真3. 宮崎県新富町比良2号横穴墓出土成人男性人骨の脛骨

比良横穴2号墓出土人骨

表9. 頭蓋計測値（mm）

Martin's No.	計測項目	48ー①（男性・壮年）
54	鼻幅	27

表10. 鎖骨計測値（mm）および示数

Martin's No.	計測項目	41ー②（男性・成人） 右	左
1	最大長		137
4	中央垂直経		9
5	中央矢状経		12
6	中央周		36
6/1	長厚示数		26.3
4/5	中央断面示数		75.0

表11. 上腕骨計測値（mm）および示数

Martin's No.	計測項目	22（男性・成人） 右	左
1	全長		300
2	最大長		295
5	中央最大径		22
6	中央横径		17
7	骨体周		66
7a	栄養孔位最大径		66
6/5	栄養孔位横径		77.3
7/1	栄養孔位周		22.0

表12. 橈骨計測値（mm）および示数

Martin's	計測項目	52ー② 右	左
1	最大長	203	
2	機能長	194	
3	最小周	38	
4	骨体横径	17	
5	骨体矢状	11	
4a	骨体中央	16	
5a	骨体中央	10	
5(5)	骨体中央	42	
3/2	長厚示数	19.6	
5/4	骨体断面	64.7	
5a/4a	中央断面	62.5	

比良横穴2号墓出土人骨

表13. 大腿骨計測値(mm)および示数

Martin's No.	計測項目	42ー②（女性・成人）		50ー①（？・若年～小児）		56ー②（？・幼児）		59ー①（男性・成人）	
		右	左	右	左	右	左	右	左
1	最大長								
2	自然位全長								
6	骨体中央矢状径						10	28	
7	骨体中央横径						12	24	
8	骨体中央周						37	83	
9	骨体上横径	27			23			32	
10	骨体上矢状径	19			18			25	
8/2	長厚示数								
6/7	骨体中央断面示数						83.3	116.7	
10/9	上骨体断面示数	70.4			78.3			78.1	

表14. 脛骨計測値(mm)および示数

Martin's No.	計測項目	29ー①（男性・成人）		30ー①（男性・成人）		51ー①（男性・成人）		56ー②（？・幼児）	
		右	左	右	左	右	左	右	左
1	全長			341		305			
1a	最大長		343	346		312			
8	中央最大径		32	31		29		11	
9	中央横径		20	22		20		9	
10	骨体周			84		78		34	
8a	栄養孔位最大径			34				13	
9a	栄養孔位横径			25				12	
10a	栄養孔位周			94				39	
10b	骨体最小径		76	77		71		33	

9/8	中央断面示数	62.5	71.0	69.0	81.8
9a/8a	栄養孔位断面示数		73.5		92.3
10b/1	長厚示数		22.6	23.1	

表15. 腓骨計測値(mm)および示数

Martin's No.	計測項目	51ー② (男性・成人) 右	左
1	最大長	313	
2	中央最大径	16	
3	中央最小径	10	
4	中央周	45	
4a	最小周		
3/2	骨体中央断面示数	62.5	
4a/1	長厚示数		

第Ⅷ章　考察とまとめ

第１節　横穴墓の築造時期について

今回は９基の横穴墓の報告を行った。

宮崎平野部の横穴墓については藤本貴仁氏が詳しく検討している[1]。藤本氏は横穴墓の築築造時期について、横穴墓の構造などからⅠ～Ⅴ期に区分し、宮崎平野部の横穴墓はTK43型式併行期に築造が開始され、隼上りⅢ型式併行期以降に急速に衰退するとしている。また、今回報告した隅ヶ迫横穴墓群や比良横穴墓群の編年や群構造についても言及している。

それによると隅ヶ迫横穴墓群では、唯一北向きに開口した１号と南向きに開口し群の西側に位置する２～４号、群の東側に位置する５号と６号の３つの単位群で構成されるとしている。そして築造時期については５号が藤本編年のⅠ期（TK43型式併行期）、１号と３号および６号がⅡ期（TK209型式併行期）、２号がⅣ期（隼上りⅡ型式併行期）、４号がⅤ期（隼上りⅢ型式併行期）としている。この編年案は出土須恵器ではなく、あくまで横穴墓の構造から導きだしたものである。出土須恵器で検討すると５号からTK43型併行期に築造され群の端緒となった可能性が高い。次いでTK209型式併行期に１号と３号が、そして２号、４号、６号から隼上りⅡ型式ないしⅢ型式併行期に築造された可能性が高い。６号については藤本編年ではTK209型式併行期築造とされているが、唯一出土している須恵器坏身は矮小化が進み受部も短くなっており、隼上りⅡないしⅢ型式である。横穴墓は追葬行為や盗掘が行われることが多いことから、出土遺物の年代が直接築造時期を反映しているとは言い難いが、玄室床面積が3.6㎡と小型の６号が長期間使用されたとは考えにくい。ただし藤本氏が指摘するように各単位群では、それぞれ１基ごとに築造差があるようだ。また、各単位群で築造の端緒となった横穴墓はいずれも整美で規模も大きい。特に５号は床面積が17.5㎡もあり、県内でも最大規模を誇る。隅ヶ迫横穴墓群内にはこのほかに県指定史跡「富田村古墳」として38～42号の計５基の横穴墓が存在するとされているが、38～41号は第２次大戦中の防空壕であった可能性が高い。また、42号は現在その所在を確認することができない。周辺に未開口の横穴墓が存在することは否定できないが、それほど大規模な群ではなかったようである。

比良横穴墓群では今回報告した３基が１つの単位群を形成していたようだ。藤本編年では１号がTK43型式からTK209型式併行期にかけて築造され、次いで２号が隼上りⅠ型式併行期に、３号が隼上りⅡ型式併行期築造とされている[2]。出土須恵器の分析でも１号→２号→３号の順に築造された可能性が高いが、33個の須恵器が出土した２号からはTK209型式から隼上りⅢ型式までの須恵器が出土している。人骨も８体以上確認されており長期間の使用であったようだ。３号から出土している須恵器はほぼ隼上りⅡ型式に限定されており、短期間の使用であった可能性が高い。

町内にはこのほかに祇園原、銀代ヶ迫、宮ヶ平で横穴墓が確認できる[3]。

祇園原横穴墓群では２基の横穴墓が調査されている[4]。玄室は半壊状態であったため全体の形状は判然としない。出土須恵器から隼上りⅡ～Ⅲ型式併行期築造と推測される。銀代ヶ迫、宮ヶ平は分布調査のみで詳細は不明である。

第２節　横穴墓の立地について

隅ヶ迫横穴墓群と比良横穴墓群は一ツ瀬川左岸の通称「北原牧」と呼ばれる台地から派生した舌状丘陵斜面に築造されている。台地上には円墳や方墳、地下式横穴で構成される後期群集墳である三納代古墳群蔵園支群と北原牧支群が存在する。また、古墳時代中期から後期にかけて県内最大規模の集落である上薗遺跡があり、集落と墓との関係を検討するうえで重要な地域である。両横穴墓群は高塚群集墳からやや離れた位置にあり、現在のところ直接的な関連性は認められない。掘削場所は丘陵斜面の中腹から高位にかけてであり、斜面の下場から掘削されるものはない。これに対し祇園原横穴墓群は高位台地面から低位台地面への斜面に立地し、後背には径10～15mの円墳８基が存在する。このようなあり方は西都原古墳群内の酒元ノ上横穴墓群と類似しており[5]、高塚群集墳と横穴墓との関連性が指摘できる。

町内の横穴墓は１から数基程度の群で構成されており、未開口の横穴墓の存在を考慮しても大規模な群は存在しなかった可能性が高い。祇園原古墳群や三納代古墳群で高塚群集墳が数十基単位で構成されていることと比較しても少ないといえる。

第３節　地下式横穴墓について

町内の地下式横穴は祇園原古墳群内と、三納代古墳群内で確認されている。

祇園原古墳群内では今回報告した５号を含めて６基の地下式横穴が調査されている。出土須恵器はTK10型式からTK209型式まで認められ[6]、高塚群集墳と同時期に築造されていたようだ。今回報告した５号もMT85型式からTK43型式併行期築造と考えられこれまでの調査結果と矛盾しない。いずれも玄室形態は「平入り」と呼ばれる横長タイプで、出土位置が不明なものもあるが基本的には円墳の周溝内に竪抗を掘削する寄生型である。１号のように墳端に竪抗を設け玄室を墳丘下に設けるものや、竪抗を周溝の外縁部に掘削し、玄室も周溝下に設けるものもある。前者の場合は円墳の主体部の可能性が指摘でき、後者は従属的な埋葬施設としての使用が考えられよう。

三納代古墳群では蔵園支群内で３基の地下式横穴が確認できる。うち内容が判明しているのは１号と３号である。うち３号から出土した須恵器は隼上りⅠ～Ⅱ型式で、祇園原の地下式横穴より新しい。また、高塚墳に従属するのではなく単独で存在した可能性が高い。

第４節　まとめ

今回は６基の横穴墓と１基の地下式横穴の報告を行った。いずれも古墳時代後期から終末期にかけて築造されており、群集墳のなかの１墓制として評価できる。

新富町内には多くの古墳が存在する。既に開発行為等で消滅したものもあるが、横穴墓や地下式横穴を含めるとその数は330基以上に及ぶ。

これらの古墳には下屋敷古墳のように前期古墳も含まれているが、築造数が増えるのは中期以降であり、とくに後期になると小円墳を中心とした「後期群集墳」が形成される。

町内では祇園原古墳群と三納代古墳群で高塚群集墳が存在する。後期の高塚群集墳はTK10型式併行期から形成が始まりTK209型式併行期で築造を停止するとされている。地下式横穴も高塚群集墳と同時期に群集墳として採用され、一部は隼上りⅡ～Ⅲ型式併行期まで存続したが、祇園原古墳群内の地下式横穴墓は高塚墳同様、TK209型式併行期で築造

を停止したようだ。横穴墓は隅ヶ迫横穴墓群ではTK43型式併行期に、比良横穴墓ではTK209型式併行期に築造が始り、ともに隼上りⅢ型式併行期に築造および使用を停止したと考えられる。これはこれまでの研究成果を逸脱するものではない。時期的な問題だけであればTK43型式からTK209型式併行期にかけて高塚群集墳や地下式横穴から横穴墓への墓制転換が想定できる。ただし、祇園原横穴墓群のように円墳を後背墳丘に見立てて配置する場合もあれば、隅ヶ迫横穴墓群や比良横穴墓群のように高塚群集墳とは一定の距離を隔てている場合もある。高塚墳、地下式横穴、横穴墓の関係は首長とその構成員の関係や階層性を考えるうえで重要であり、墓制の推移がどのような過程を経て行われたかについては今後の課題としたい。

【注】

（1）藤本貴仁　1998「宮崎平野部の群集墳－横穴墓群を中心に」『宮崎考古』16号　宮崎考古学会

（2）（1）と同じ。

（3）樋渡将太郎　2006「新富町の遺跡改定版」『新富町文化財調査報告書』第48集　新富町教育委員会

（4）有馬義人　2001「町内遺跡17」『新富町文化財調査報告書』第31集　新富町教育委員会

（5）長津宗重　1998「特別史跡　西都原古墳群」『発掘調査　保存整備概要報告書』Ⅲ　宮崎県教育委員会

（6）飯田博之　1996『祇園原地区遺跡」宮崎県教育委員会

図版 1

1．隅ヶ迫 2 号横穴墓閉塞状況

2．隅ヶ迫 1 号横穴墓羨道部土層断面

3．隅ヶ迫 1 号横穴墓閉塞状況

1．隅ヶ迫横穴墓群調査状況①

2．隅ヶ迫横穴墓群調査状況②

3．隅ヶ迫横穴墓群調査前

図版 3

1．隅ヶ迫横穴墓群西側から

2．隅ヶ迫１号横穴墓検出

3．隅ヶ迫横穴墓群１号墓真上から

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

図版 5

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

29

図版 7

31

32

33

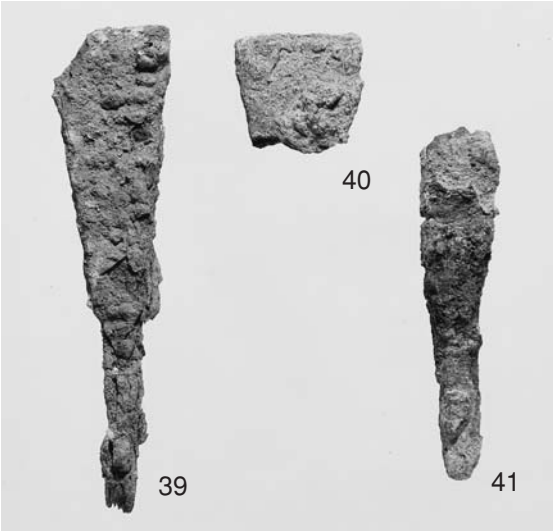
34

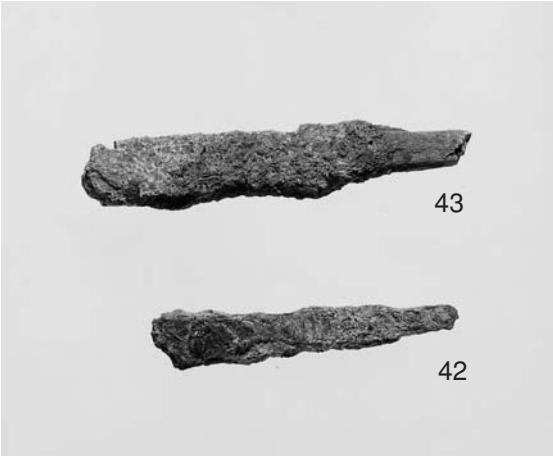
35

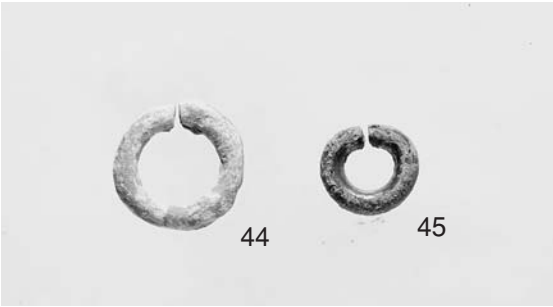
36

37

38


40
39
41


43
42


44
45

46

52
53
50
51

49

図版 9

54

55

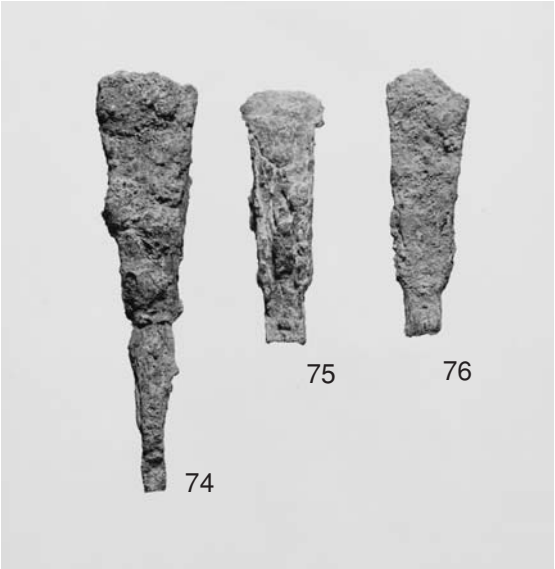
56

57

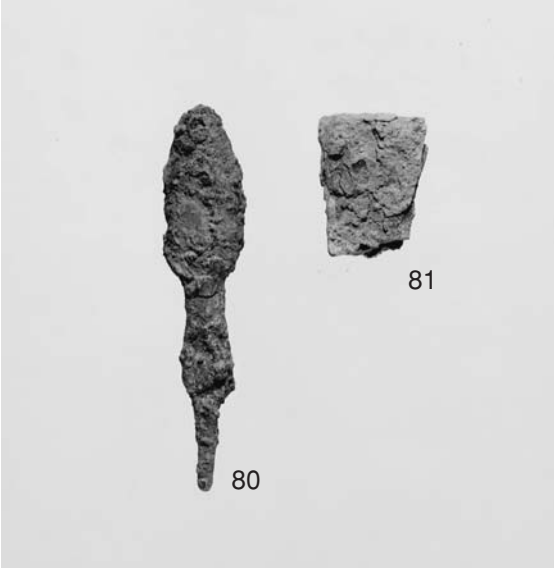
58

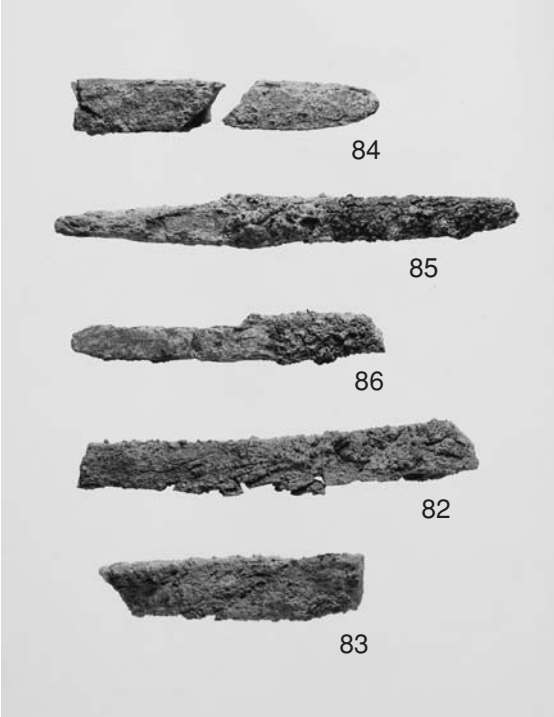
61

73

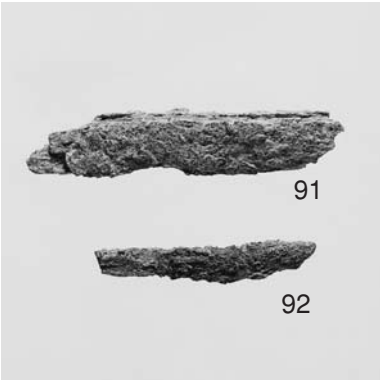

74
75
76

77
78
79


80
81


84
85
86
82
83

94

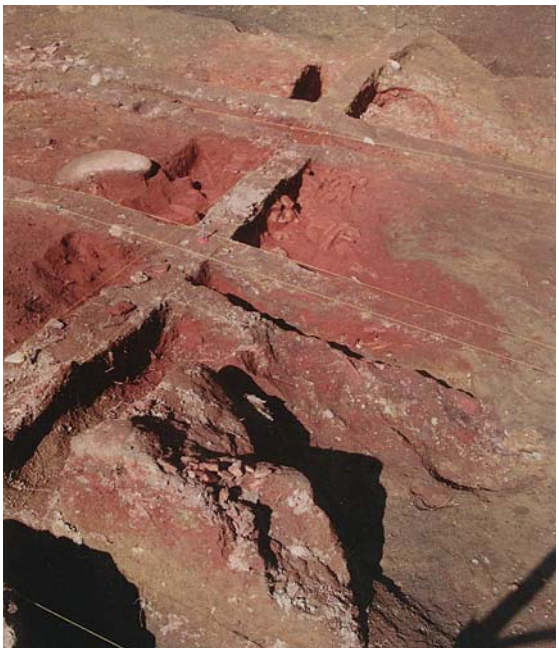

91
92

93

図版11

1．南原ベニガラ工房跡全景

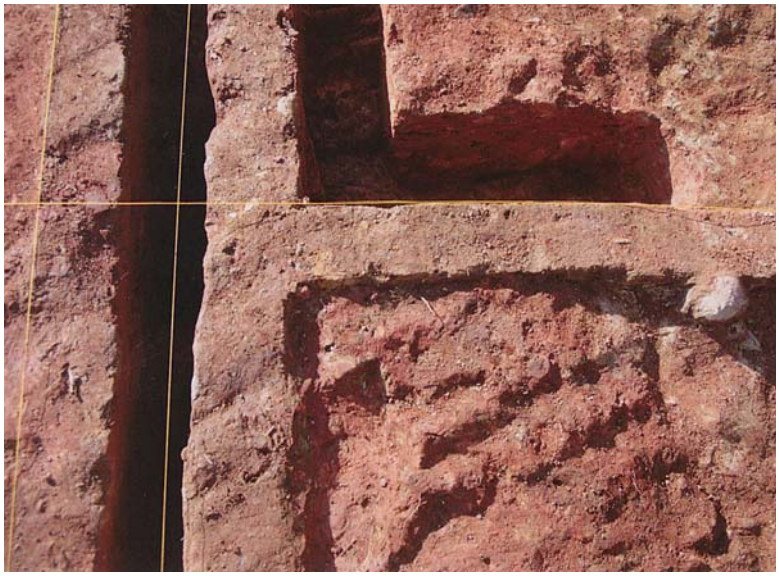
2．２号土抗①



3．２号土抗②

1．２号土抗③

2．２号土抗④



3．２号土抗⑤

図版13

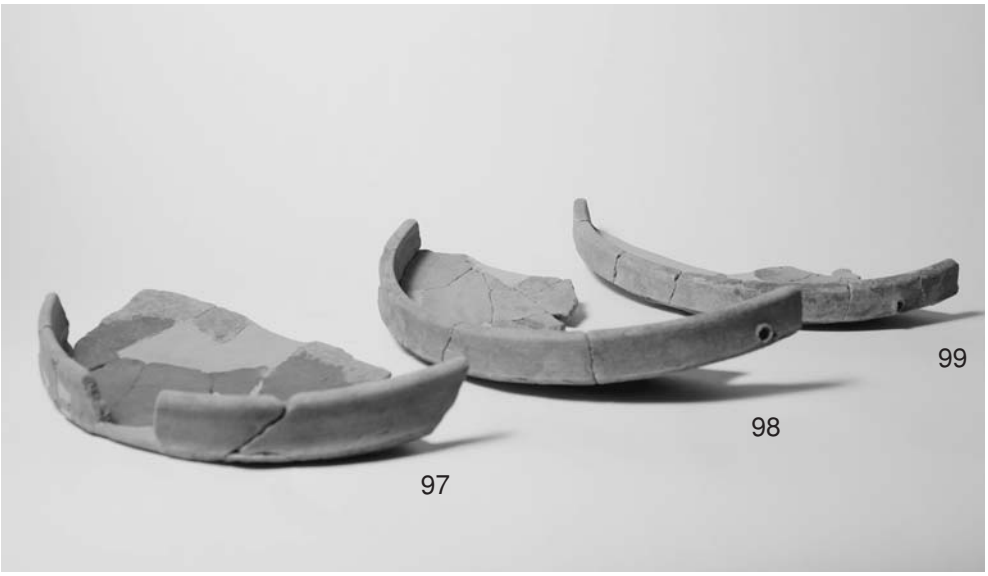
1．２号土抗⑥

2．１号土抗と２号土抗

3．１号土抗調査状況

95

96


97
98
99

図版15

1．祇園原地下式横穴５号竪抗検出状況

102

103

104

105

106

図版17

1．比良横穴墓群南側から

2．１号横穴墓検出状況

3．１号横穴墓作業状況

1．１号横穴墓奥壁調整痕

2．１号横穴墓奥壁ないし左側壁調整痕

3．１号横穴墓側壁刺突痕

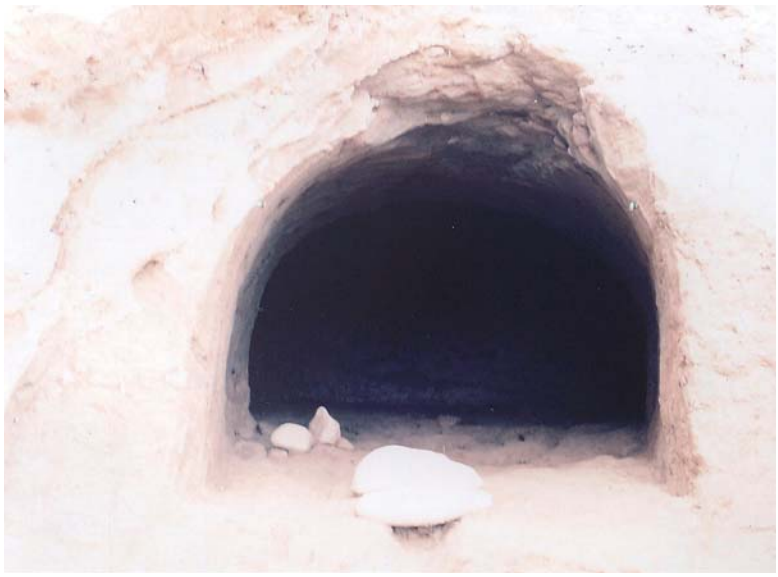
図版19

1．１号横穴墓完掘状況

2．２号横穴墓土層堆積状況

3．２号横穴墓閉塞状況

1．２号横穴墓（西側から）



2．２号横穴墓（正面から）

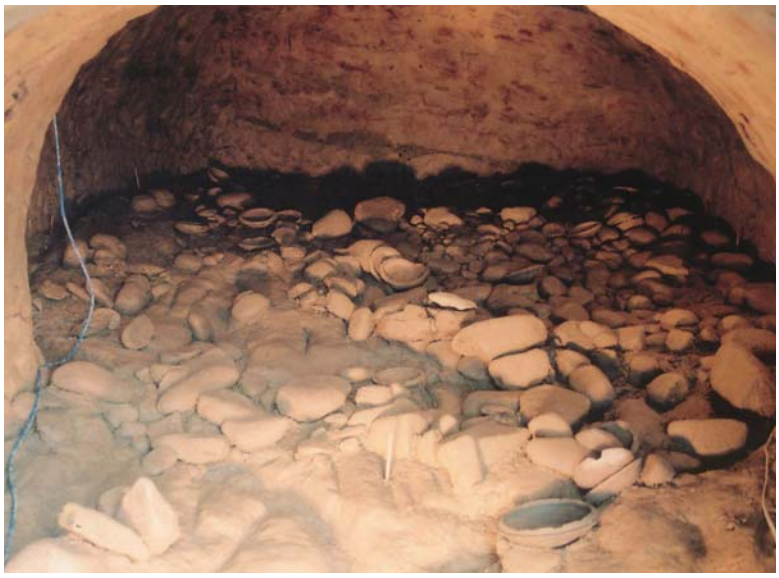
3．２号横穴墓玄室内状況

図版21

1．２号横穴墓左奥壁側遺物出土状況①

2．２号横穴墓左奥壁側遺物出土状況②

3．２号横穴墓右奥壁側遺物出土状況

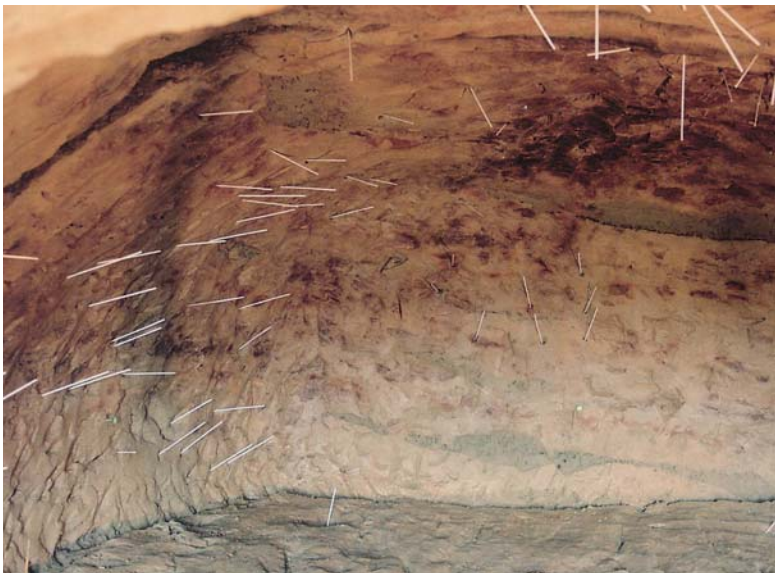


1．２号横穴玄室内遺物出土状況（人骨取上げ後）

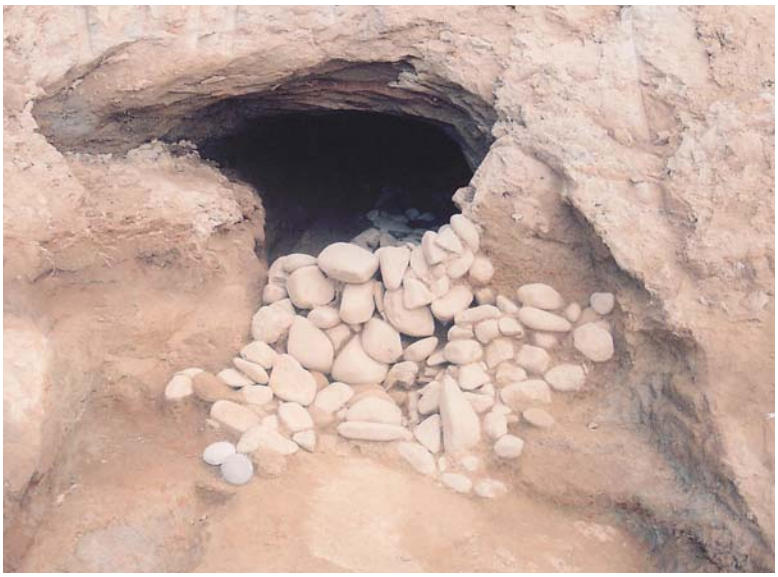
2．２号横穴墓須恵器出土状況①

3．２号横穴墓須恵器出土状況②

図版23



1．２号横穴墓奥壁・側壁調整痕



2．３号横穴墓検出状況

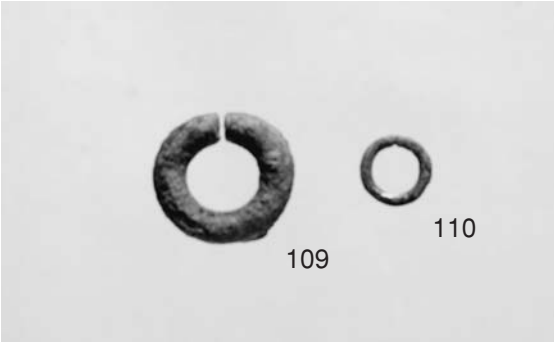
3．３号横穴墓閉塞状況

1． 3号横穴墓作業状況

2． 3号横穴墓ベッド状遺構

3． 3号横穴墓完掘状況

図版25



116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

図版27

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

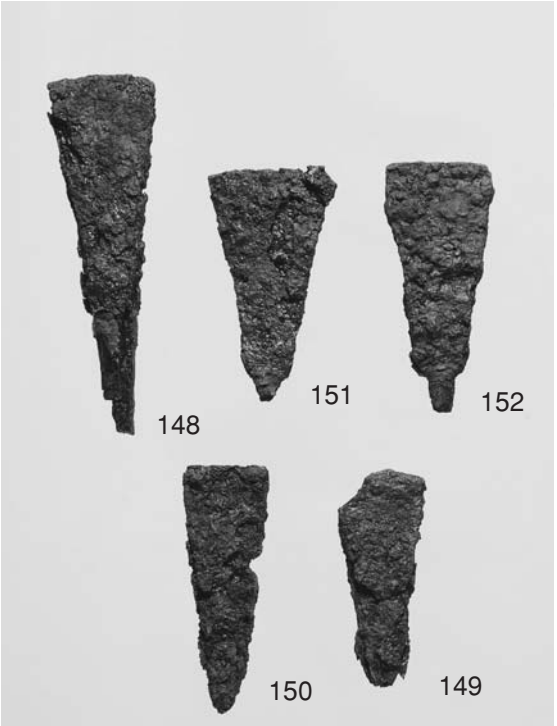
144

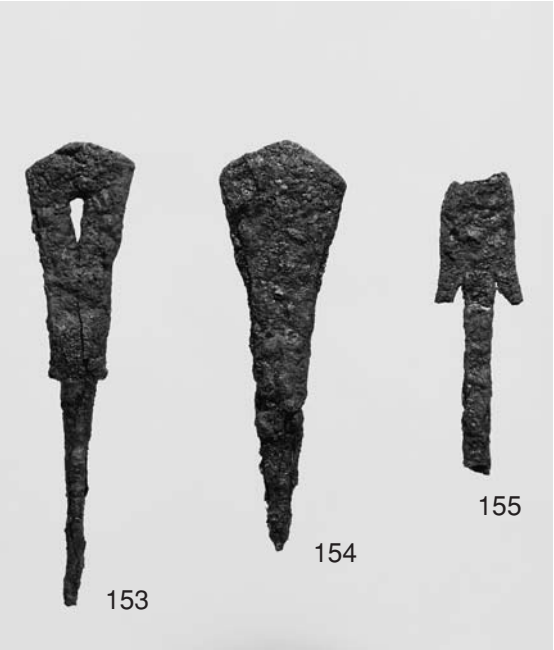
145

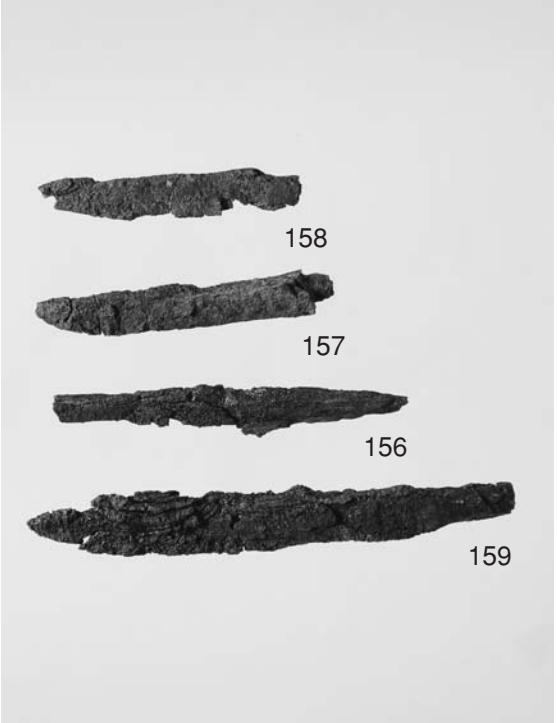
図版29

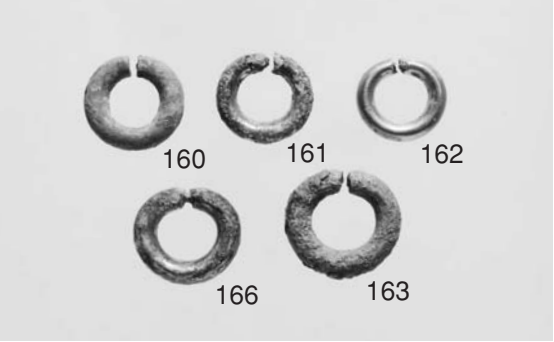
146

147


148
151
152
150
149


155
154
153


158
157
156
159


160
161
162
166
163

167
165
164
168
169
170

171

176

172

173

図版31

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

報　告　書　抄　録

ふりがな	すみがさこよこあなぼぐん　みなみはらべにがらこうぼうあと　ぎおんばるちかしきよこあなごごう　ひらよこあなはかぐん
書名	隅ヶ迫横穴墓群　南原ベニガラ工房跡　祇園原地下式横穴５号　比良横穴墓群
副書名	民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第53集
編著者名	樋渡将太郎
編集機関	新富町教育委員会
所在地	〒889-1403　宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発行機関	新富町教育委員会
発行年月日	2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すみがさこよこあなぼぐん 隅ヶ迫横穴墓群	大字日置字隅ヶ迫	45202	4072			19900911 19901128	1500㎡	民間造成
みなみばるべにがらこうぼうあと 南原ベニガラ工房跡	大字三納代字南原	45202	4040			199011	300㎡	民間造成
ぎおんばるちかしきよこあな 祇園原地下式横穴５号	大字新田字祇園原	45202	1030			199309 199310	10㎡	畑地陥没
ひらよこあなぼぐん 比良横穴墓	大字新田字比良	45202	4055			19950808 19950911	300㎡	土砂採取

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
隅ヶ迫横穴墓群	横穴墓	古墳	横穴墓	須恵器土師器 鉄器耳環	
南原ベニガラ焼成跡	窯跡	近世	ほうろく鍋焼成窯？	ほうろく鍋	
祇園原地下式横穴５号	古墳	古墳	地下式横穴	須恵器土師器 朱玉	
比良横穴墓群	横穴墓	古墳	横穴墓	須恵器鉄器 耳環	須恵器多数

新富町文化財調査報告書　第52集

隅ヶ迫横穴墓群・南原ベニガラ工房跡
祇園原地下式横穴５号・比良横穴墓群
―民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

発行年月日　平成21年３月31日
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　株式会社 宮崎南印刷